

AREA CAMPUS MOGAMI

# エリアキャンパスもがみ 研究年報 2020・2021



山形大学  
Yamagata University

---

エリアキャンパスもがみ  
研究年報 2020・2021

---

## 「エリアキャンパスもがみ研究年報 2020・2021」発刊にあたって

エリアキャンパスもがみキャンパス長 清塚 邦彦

「エリアキャンパスもがみ」は、最上地域における教育の発展と地域振興に資するための事業として、最上広域圏 8 市町村と山形大学との協力の下、2005 年 3 月にスタートしました。以来、多くの学生が最上地域において地域の皆様のご指導とご協力のもとで様々な学習をしてきました。「エリアキャンパスもがみ」の中心となる「フィールドラーニング—共生の森」の授業を履修した学生は累計で 3,500 名を超え、地域社会のなかで若者を育てる山形大学の特徴ある教育プログラムとなっています。

今回の研究年報は、2020 年度から 21 年度にわたる「エリアキャンパスもがみ」2 年分の活動を記録した合併号となります。第 1 部は事業内容の概要、第 2 部は「フィールドラーニング—共生の森もがみ」を受講した学生が作成した授業記録です。「エリアキャンパスもがみ」では、運営経費をめぐる厳しい状況もあり、2020 年度より、各市町村 1 プログラム、総計 8 プログラムを前期に開講する体制となりました。以前よりも規模は縮小するものの、今後も安定的に継続していける形を模索した結果です。あいにく、新体制がスタートした 2020 年度は、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、計画の中止を余儀なくされました。しかし、2021 年度には、前年度の経験も踏まえ、コロナ禍の中にもかかわらず、予定された 8 プログラムすべてが実施され、総計で 75 名の学生の参加を見ることができました。本年報には、学生が自らの活動を振り返って、学んだこと、感じたこと、考えたことが率直に記述されています。それぞれのプログラムで設定された課題に対して、若者らしい発想と視点で取り組むなかで、地域社会に対する理解が深まったことが見て取れます。このような教室の座学では得られない貴重な学習体験は、これからの彼らの人生において必ず糧になるものと信じております。

「エリアキャンパスもがみ」は最上広域圏での高等教育に対する最上広域圏 8 市町村の皆様の熱い思いと、地域創生・次世代形成を掲げる山形大学の教育理念が呼応して進められてきました。近年、地方国立大学を取り巻く状況は厳しさを増しておりますが、「エリアキャンパスもがみ」に対する学生と地域の皆様の期待に応えるべく、これからも本事業に取り組んでまいりますので、どうか変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

# 目 次

「エリアキャンパスもがみ研究年報 2020・2021」発刊にあたって エリアキャンパスもがみキャンパス長 清 塚 邦 彦 .....	2
---	---

## 第一部 研究年報

第1章 エリアキャンパスもがみ令和2・3年度事業の概要 .....	5
第2章 初年次教育 フィールドラーニングー共生の森もがみ .....	8
第3章 もがみ専門科目 .....	16
第4章 もがみ活性化事業 .....	25

## 第二部 授業記録

「フィールドラーニングー共生の森もがみ」プログラム .....	26
---------------------------------	----

エリアキャンパスもがみ関係者名簿 .....	81
------------------------	----

# 第一部 研究年報

# 第1章 エリアキャンパスもがみ 令和2、3年度事業の概要

## I エリアキャンパスもがみの概要

### 1 はじめに

山形大学は、過疎化の進む最上広域圏全体をキャンパスに見立てて教育・研究・地域貢献を展開する「エリアキャンパスもがみ」を平成16年度に発足させた。

エリアキャンパスもがみでは、「自然と人間の共生」をキーワードに、大学と最上広域圏双方の人材育成と活性化を図ることを目的に、自然や伝統文化を活用した実践的活動について、その知識や知恵、ノウハウを、最上広域圏全体で共有・活用するだけでなく、地域の教育資源として教育活動に活用している。

特に教育活動については、本学の初年次教育の展開に活用しており、本学の学生は、社会性や課題探求能力を身につけるために、地域の講師と子供から老人までの幅広い世代の住民を交えた現地体験型授業や課外活動に参加している。

### 2 これまでの経緯

県の北東部に位置する最上広域圏は、南西に最上川が流れ、一部盆地を含む大部分が山岳・丘陵地帯の自然豊かで市町村毎に独自の文化を有する農山村地帯である。その一方で、8市町村のうち6町村が「過疎地域自立促進特別措置法」に基づく過疎地域に指定されている状況にある。

また、最上広域圏は大学・短大が一つもない県内唯一の広域圏であり、山形大学は、平成16年度に最上広域圏の8市町村と包括協定を締結し、広域圏全体をキャンパスとする「山形大学エリアキャンパスもがみ（以下、YAM）」を設立し、総合大学として組織的な地域貢献の挑戦を開始した。

YAMは、地域の自然や伝統文化などを教育資源として活用し、学生自らが現代社会の課題を発見し、探求し、解決するためのフィールドとして好適な場である。YAMの開設以降、最上広域圏を活性化させる様々な事業（以下、それらを総称して「もがみ活性化事業」と呼ぶ）を立ち上げ、多くの学生が課外活動として参加し、学生と住民の交流の中から、地域活性化の新たなシーズが生み出されてきた。

平成17年、大学は、YAMのこれまでの活動を振り返り、学生に社会性を持たせ、広い視野の下、課題探求能力を伸ばしていくには、柔軟性に富んだ初年次の学生を対象とした基盤教育の授業を立

てることが必須である、と考えた。

そこで、地域からの申し出もあり、地域の方を講師として、学生と住民、特に子供たちが現地で一緒に活動することができる初年次の全学生を対象とした基盤教育授業『フィールドワーカー共生の森もがみ』を平成18年度から開講することとした。

この初年次の基盤教育授業を骨格として、それに学部の専門教育の授業と課外活動を連携することによって、地域に根ざした実践的な課題探求能力を育成することになった。

なお、これらの取組については、「エリアキャンパス未来遺産創造プロジェクト」として、平成18年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に採択された。



「エリアキャンパス未来遺産創造プロジェクト概念図」

### 3 目標

エリアキャンパスもがみでは、次の2点を目標に掲げ活動を行っている。

#### (1) 大学生に対する教育

- ①過疎化、少子高齢化、環境などの現代社会が直面する課題発見・探求・解決能力を向上する。
- ②社会性を向上する。
- ③コミュニケーション能力を向上する。
- ④プレゼンテーション能力を向上する。
- ⑤豊かな地域社会の建設に関わる人材を輩出

する。

## (2) 最上広域圏の人材育成と活性化

①未来遺産の共有・活用・発展を図る。②地域の自然や文化を子供たちに伝える。③子供たちの地元に対する誇りを抱かせる。④情報発信力を向上する。⑤豊かな地域社会の建設に関わる人材を輩出する。

## 4 運営体制

YAMの運営体制は、小白川キャンパス長がエリアキャンパスもがみのキャンパス長を務めており、YAMの運営の中核をなす「運営会議」は、山形大学と最上広域圏から選出された委員で構成されている。

山形大学の運営委員は、キャンパス長、教員7名、事務職員3名、で構成されており、最上広域圏の運営委員は、各市町村の教育長8名、文化団体等の代表3名で構成されている。

また、現地に最上広域圏の事務職員が常駐する「最上事務局」を設置し、YAMを円滑に運営するための、橋渡し役を担っている。

本プロジェクトの関連経費は、各事業の内容に応じて大学と各自治体で応分に負担している。また、地元講師の謝金等は市町村が負担する寄付授業となっている。

## 5 教育改革への有効性

### (1) 教育課程、教育方法等の創意工夫

「フィールドワーカー共生の森もがみ」は、正規の授業を地域の人材育成活動と連結させている点に特色があり、学生は、初年次の授業で地域に出て、社会性と課題探求能力を身に付け、それを大学の在籍期間を通して、専門教育と課外活動で伸ばしていくことができる。そのために、本授業では、次のような創意工夫を行っている。

- ①授業そのものが地域のニーズに基づいたもので構成され、地域の活性化に直接結びついている。
- ②現地で行う体験型学習となっている。
- ③現地にいるその道の達人が講師として直接指導に当たる。
- ④開講日を土・日曜日にするによってたくさんの方々が参画できる。
- ⑤学生は子供の指導に関わることによって責任感を持つ。
- ⑥この授業は、「大学コンソーシアムやまがた」の単位互換協定に基づき県内の大学・短大生が履修できる。

### (2) 期待できる成果等の教育改革への有効性

地域活動が活発になればなるほど、教育面での受益者は増すという相乗効果が期待できる。授業「共生の森もがみ」で、学生は世代の異なる住民と交流することによって、社会性が増し、「過疎化」「少子高齢化」「環境」などの現代的な問題群と向き合うこととなる。多くの学生にとって、このような日本が直面している現代的な問題に對峙し、それを考えることは、これからの我が国の発展のために大きな意義がある。

## II 事業実施計画

### 1 基本的な年間スケジュール

- 4月 「フィールドラーニングー共生の森もがみ」と「もがみ活性化事業」開始
- 7月 エリアキャンパスもがみ運営会議  
フィールドラーニング活動報告会
- 10月 エリアキャンパスもがみ懇談会
- 3月 もがみ担当者会議  
研究年報刊行

### 2 令和2、3年度実施事業

#### 【令和2年度】

#### (1) 教育活動

##### ①初年次教育

「フィールドラーニングー共生の森もがみ」  
8プログラム※コロナ渦により中止

##### ②主なもがみ専門科目

- ・地域教育文化学部「教育実践実習」新庄市
- ・大学院教育実践研究科（教職大学院）  
「学社融合の実践と課題」戸沢村

など

#### (2) もがみ活性化事業

##### ①山形大学見学旅行

- ・真室川町立真室川あさひ小学校  
(4年生11名) 10月20日(火)
- ・新庄市立新庄中学校  
(3年生18名) 11月4日(水)
- ・大蔵村立大蔵中学校  
(3年生5名) 11月6日(金)
- ・新庄市立八向中学校  
(3年生7名) 11月12日(木)

**【令和3年度】**

**(1) 教育活動 ※事業詳細は第4章を参照**

①初年次教育

「フィールドラーニングー共生の森もがみ」  
8プログラム

②主なもがみ専門科目

- ・地域教育文化学部「教育実践実習」新庄市
- ・大学院教育実践研究科（教職大学院）  
「学社融合の実践と課題」戸沢村

など

**(2) もがみ活性化事業**

①山形大学見学旅行

※コロナ渦により受入れ休止

②フィールドラーニング応用編

- ・山形大学 舟形プロジェクト  
舟形野菜かき揚げ丼の提案と販売、アンケート調査を実施

**(3) 広報事業**

- ・エリアキャンパスもがみ研究年報（3月）  
令和2、3年度合併号



## 第2章 初年次教育

### フィールドラーニングー共生の森もがみ

#### I 意義

本授業は、山形大学の全学共通教育である基盤教育の正規の授業として開講された。本授業の特色は、①初年次教育、②全学共通教育、③現地体験宿泊型学習、④少人数教育、⑤山形大学の理念「自然と人間の共生」の具現化、⑥自然豊かな農山村地の活用、⑦現地講師による指導、である。

初年次教育は、通常、アメリカで初年次の学生の退学を防ぐことを目的として、大学への適応を意図した教育プログラムを指す。初年次学生の退学者が少ない日本ではおかれている状況がアメリカとは大きく異なっており、そこから必然的に初年次教育はアメリカのそれと異なったプログラムとなる。

我々がこの授業を初年次教育として強く意識しているのは、本学の学生は一年目に基盤教育を受講し、その後は各学部で専門課程を受講することから、専門に入る前に学問の専門性を超えた社会に対する問題意識を持ってもらいたいということである。

混沌とした社会においては、これが問題ですよというように、はっきりとしたかたちでは現れてはくれない。急激に変化する時代にあって、我々の知恵と感受性で問題を主体的に拾い出していくしかない。それが現代の市民に求められている。社会に主体的に関わっていくためには、自分で問題を発見していく能力を養っていかなければならないのだ。この授業の教育目標は、社会の様々な事象の中から学生自らが問題を発見することにある。

山形大学は6学部からなる総合大学であるが、6学部の学生が交流する機会はそれほど多くない。学生は学生の交流の中から自らを発見していく。本授業は全学共通教育の特性を活かして、学部を越えた学生の交流を図っている。

現代の若者は体験が少なくなっている。大学教育において意図的にこの体験を増やしていくしかない。リアルな体験を通して、学生の思考を深め、社会性を涵養させ、行動的にしていくことが求められている。そこでこの体験を濃密にするために、現地体験宿泊型学習を導入した。土・日曜日の宿泊型にすることによって、平日の授業と競合することがない。また、食事や宿泊を共にすることによって、人間関係が濃密になる。

この授業は10名程度の少人数教育となっており、地域の講師の人々との交流が密になり、教育効果もあがるように設計されている。

山形大学の理念である「自然と人間の共生」を

教育に反映するために、この自然豊かな「エリアキャンパスもがみ」を活用する。しかし、同時に、そこは少子高齢化、過疎化の進む現代の課題の先進地域でもある。こうして、学生が多くのことを考える場になっている。

この授業の大きな特色は、現地の達人を講師とし、この達人を中心とした授業を地元の方と大学で設計し、実施している点にある。大学という学問に立脚した知の拠点が、学問的知を越境し、社会的、日常的、実践的な知に踏み込む教育活動でもある。このことは教育の主役を教員から学生に重心移動したことの一つの表れでもある。つまり、学生にいま必要なことは何なのかを問い詰めていけば、授業において様々な可能性を試していかなければならない時代に入ったということが考えられる。学生は現地講師を通して、コミュニティということ意識し、故郷や家庭、そして自己を再考するきっかけとなっている。

本授業のもう一つの重要な側面は、この授業を学生教育だけでなく地域活性化のために活用するという点にある。では、この大学の授業が地域活性化にどのように貢献するのであろうか。

一つには、大学がなく若者があまりいない地に学生が入るだけで活性化される。学生が入ることは授業でなくてもいいのだが、正規授業でもなければ学生が観光地でもない遠隔地に集団で入ることはまずない。

二つ目は、授業の中に子どもを含めた地域住民との交流が入っており、学生と地域住民との交流が密になる。そこには、大学生による地域の子どもの指導なども組み込まれている。

三つ目は、全国から集まった大学生の新鮮な眼によって、地域が再発見されていく。そのことによって、地域の人々に地元の誇りが醸成される。

四つ目は、学生によってまちおこしなどの具体的な提言がなされる。

この授業によって上記のような地域活性化が考えられるが、実際にはことはそううまくは運ばない。授業に参加する学生は一年生であって、学問的な専門性を身につけているわけではない。そこで、専門的な視点からの提案を求めることはほとんど不可能である。また、現実には熱意のない学生が参加することも十分に考えられる。

この授業を大学と地域の双方に利益がある形に高めていくためには、これからのたゆまぬ授業改善が必要である。特に、上記の特性を踏まえた綿密な授業設計が重要である。

## II 令和3年度シラバス

※令和2年度はコロナ禍により不開講

【授業名】 フィールドラーニング

ー共生の森もがみ

(領域：山形から考える)

【担当教員】 阿部宇洋

(教育開発連携支援センター)

【授業概要】

・授業の目的

自然豊かな山形県最上地域でのフィールドラーニングを通して、地域の文化や歴史、自然、環境等だけでなく、過疎化、少子高齢化等の現代日本が直面する諸問題を地域の人たちと共に学び、実践的な視点から知識を獲得し、山形から日本、世界及び過去から、現在、未来の空間及び時間軸で現象を把握する力を養う。

・授業の到達目標

この講義を履修した学生は、

1) 地域から与えられた課題を発見できる。

【知識・理解】

2) 地域で発見した課題を探求することができる。

【知識・理解】

3) 課題を議論することで、コミュニケーションできる。

【態度・習慣】

4) プレゼンテーションを行うことができる。【技能】

5) 行動力、社会性の基礎的な力を身につけることができる。【態度・習慣】

【授業計画】

・授業の方法

この授業は、各自が以下のプログラム(①～⑧)から1つを選択して受講する。受講の流れは以下のとおり。

- 1) オリエンテーション
  - 2) 事前学習 (WebClass)
  - 3) 【1泊2日フィールドラーニング (1回目)】
  - 4) 中間学習 (WebClass)
  - 5) 【1泊2日フィールドラーニング (2回目)】
  - 6) 最終レポート (WebClass)
  - 7) 活動報告会に向けた説明会・練習、活動報告ポスター作成
  - 8) 活動報告会での発表  
[プログラムリスト]
- ① (新庄市) 地域×バーチャルコワーキングスペースの未来構想
  - ② (金山町) かねやま旅情
  - ③ (最上町) 最上町の人・自然・文化にふれよう
  - ④ (舟形町) 里地里山の再生 I
  - ⑤ (真室川町) 子どもの自然体験支援講座
  - ⑥ (大蔵村) 大蔵村の生活と伝統の継承
  - ⑦ (鮭川村) 人と地域をつなぐ環境保全活動
  - ⑧ (戸沢村) 里山保全と角川のパワースポット巡り
- 以上、8プログラム

・授業日程

- ① 4月8日(金)～4月14日(水) プログラム説明会・オンライン (プログラム選択希望調査を同時に行う。)
- ② 4月22日(木) 当選者発表
- ③ 4月30日(金) 16:30～18:00 オリエンテーション (プログラム顔合わせ・役割決め・フィールドラーニング上の留意点について)
- ④ 5月8日(土)～7月4日(日) フィールドラーニング活動期間 (土日2回、計4日間)
- ⑤ 7月16日(金) 16:30～18:00 活動報告会

【学習の方法】

- 1) 安全第一を心がけ、積極的に活動に参加してください。
  - 2) 専門分野の方法論や数値的なデータだけではなく、フィールドラーニング(あるく・みる・きく)で集めたデータをもとに考えるよう心がけてください。「現場で考える」「体で考える」(もちろん頭も使います)ことが合言葉!そして、自分の想像力を大事にしてください。
- ・学部の行事や、サークル活動(大会)と予定がバッティングしないように気をつけてください。必ず確認すること。
  - ・メールでのお知らせや掲示板での情報がありますので、必ず確認してください。

・授業時間外学習へのアドバイス

- 1) オリエンテーションで配布される「しおり」を熟読し、内容を理解して授業に臨んでください。
- 2) オリエンテーションでの詳細説明に基づき①事前学習、②中間学習、③最終レポートに取り組んでください。また、フィールドラーニング中はこまめに記録ノートを作成するよう努めてください。
- 3) フィールドラーニング終了後、活動報告会に向けて準備を進めてください。方法については説明会を開催し、発表指導を2回行います。

【成績の評価】

・基準

- 1) 地域での活動により課題を発見し、探求により深め、活動報告会の発表により他者に伝える事が出来たかどうかを評価の基準とする。
- 2) 一連のグループ学習の中でコミュニケーション能力や主体的学習力、社会性などを発揮できる事を評価の基準とする。
- 3) 現地講師による活動評価、受講態度や、指示に対する達成度を数値化しそれを参考に教員が相対的に評価を実施する。

・方法

前提として、現地活動にはすべて参加していること、また最終レポート提出が基本条件。

フィールドラーニング活動への参加度 40%  
 活動報告会での発表の完成度(ポスター含む) 30%  
 現地講師による活動評価 20%  
 受講生による相互評価 10%

【学生へのメッセージ】

フィールドラーニングとは、山形大学オリジナルの学術用語で、学部専門で学ぶであろう、フィールドワークの入門編として設計されました。フィールドワークでは全て、みずからの関心で調査する事に対して、フィールドラーニングとは、提示されたプログラムを通して、課題発見などを行なう教育プログラムになっています。最上地域は、学生諸君を温かく迎え入れてくれるでしょう。是非、もがみを見て、聞いて、感じて(味わって)、「共生の森」のパワーを体全体で吸収してきてください。この講義をきっかけに、多くの学生が最上地域での課外活動に参加してきました。教員を目指す学生や、地域でのボランティア、地域活動を体験したい学生にはお勧めです。本授業は宿泊や実技体験を伴いますので、参加費が必要となります。(詳細は、プログラム説明会の際に説明します。)

【オフィスアワー】

原則として Webclass のメッセージで質問を受け付けますが、オフィスアワーとして「阿部研究室」(基盤教育1号館2階東側)において、予約制で受け付けます。会議や出張等で不在にすることもするため、確実に面談したい場合は事前に Webclass のメッセージで予約をお願いします。3人の教員が担当していますが、基本的には阿部へ連絡をください。

Ⅲ 受講者数

プログラム No.	開講プログラム	受講者
1	地域×バーチャルコワーキングスペースの未来構想	4人
2	かねやま旅情	10人
3	最上町の人・自然・文化に触れよう	10人
4	里地里山の再生 I	8人
5	子どもの自然体験活動支援講座	15人
6	大蔵村の生活と伝統の継承	9人
7	人と自然と地域をつなぐ環境保全活動	5人
8	里山保全と角川のパワースポット巡り	14人

Ⅳ 活動報告会

フィールドラーニングー共生の森もがみ  
 日時：7月16日(金)16:30～  
 場所：基盤教育2号館222教室



Ⅴ 授業改善アンケート結果について

本年度に実施した授業改善アンケートについて、70人(回収率93.3%)から回答があった。アンケート結果については、表のとおりであり、基盤共通教育科目全体の平均値と比較してみると、総じて学生の満足度が高いことが読みとれる。

表:「フィールドラーニングー共生の森もがみ」の授業改善アンケート結果と基盤教育科目全体の平均値との比較

質問項目	FW	全体平均
この授業を意欲的に受講しましたか	4.8	4.3
この授業の内容を理解できましたか	4.9	4.4
考え方、能力、知識、技術などは向上しましたか。	4.8	4.5
自ら学ぶ意欲は湧きましたか。	4.7	4.3
自ら進んで課題を発見し、探求する力が身につきましたか。	4.7	4.2
教員に熱意は感じられましたか。	4.9	4.5

考え方(教授法)はわかりやすかったですか。	4.8	4.4
教員の一方的な授業ではなく、コミュニケーションはとれていましたか。	4.9	3.9
板書や配布物、提示資料は読みやすかったですか。	4.7	4.4
この授業を総合的に判断すると良い授業だと思いますか。	4.8	4.5

## 「フィールドラーニング

### ー共生の森もがみ」コラム

#### 持続可能なフィールドラーニングへ

山形大学学術研究院 阿部宇洋

2020年から日本にも新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、2020年度の「フィールドラーニングー共生の森（以下FLもがみ）」は休講にならざるをえなかった。その2020年度は、FLもがみは大きな転換期であった。教育の質保証、様々な公的補助金の終了などいままでの活動を見直す時期となった。

FLもがみは、2019年度まで前期16プログラム、後期10プログラムで開講されており、抽選のかかる講義であった（もちろん、現在も抽選のかかる講義である。）。

この1年間26プログラムを私一人で担当していたのが一つ課題にあがったのである。結果として、2020年度からは各市町村1プログラムの提供を頂くことになった。

この要員は、もちろん、教員の実力不足の面が多いところでは有るが、フィールドワークなどの専門教育では、大人数での活動は教育効果が上がらないともいわれる。FLもがみを事例とすると、1プログラム（7～15人）の学生に対して、各プログラムに1人のフィールドワーク経験のある教員がついて教育を行うのが理想なのである。つまり、年間26プログラム実施しているため、少なくとも、26人分の教員は必要なのであった。

また、公的補助の削減も大きかった。各市町村へのバス代を補助金から捻出し対応していたが、公的補助の終了とともに、学生達を安全に現地へ送る手法が電車のみになっ

てしまったのである。山形での冬の交通、特に電車は運休、遅延が多いことで知られている。かくいう私も、吹雪の新庄駅で帰宅できなかった経験がある。FLもがみは2020年から電車での往復となり安全に予定通りに送迎できない環境に見舞われてしまった。

冬のもがみのプログラムも、みな魅力的で、山形でしか体験できない活動が多かったが、安全、安心には代えがたく、結果的に前期のみの開講になったのであった。

プログラムの縮小は、様々な要因があるが、1、担当教員の確保、2、公的補助金の終了、3、学生の送迎に関わる安心安全が大きな要因となった。これらの問題は教員を26人分雇う、バスの往復代を確保するなど金銭的に解決できる問題であったが、現在の日本の教育予算の現状を目の当たりにすると、教育はなんとやせ細ってしまったのであろうかと哀傷せざるをえない。

ただ、悪い面ばかりでもない。2021年度からこの状況を鑑み、教育の質保証の一環として、担当教員が私も含め3人となり学生の大学での学びをより深める環境が整った。また、プログラムが濃縮されたことにより、より挑戦的な学生の履修が見られたのである。

フィールドワーク系講義でよく誤解されるのが、「地域に連れて行くだけの講義で、適当に採点すればよい」といった勘違いされやすい採点基準、また、採点基準が不明瞭であるという問題であった。この問題は、文科省、大学、学部、教員といったさまざまな意思や意図の微妙なずれがもたらす問題の一つでもあった。この点も、教員3人で検討している状況である。

山形で生活していると、山大卒業生に出

会うことがある。その際、このFLもがみの前身「フィールドワーカー共生の森もがみ」の印象を聞くことがあった。その際の共通した回答は、「すごく面白かった」という現地活動の満足感と、「お金を払って単位をとる授業」というイメージであった。

実際に、現地活動、もがみでの活動の満足感年々上昇、維持している。しかし、大学の授業の印象として「お金を払って単位を取る授業」という楽に単位を取得できる講義という状況があったようである。もちろん、当時から授業評価はきちんと設定しており、場合によっては単位を落とすケースもある。ただ、学生の、先輩からの無責任な口承では「単位を取得しやすい授業」として伝わっていた側面があったため、抽選になった場合、単位目当ての学生が当選し、地域にご迷惑をおかけする場合もあった。

近年、その取得が楽な単位から実りある単位へそして、本当に地域で学び、地域に還元したい学生が増えてきたことは、FLもがみの成熟もたらすものであろう。

最後に、地域で学生を受け入れるという事は非常に労力がかかる問題でもある。かくいう私も、自治体勤務、博物館勤務の際に無償で引き受けていたが、準備や当日の対応、学生のリアクションの少なさに、自身の力不足を嘆いたことがある。ただ、今ふりかえると、非常に勉強になったことも事実で今の私の思考を支える重要な柱となっている。

一方で、内容が響いた学生は、その後も継続的に来訪し交流人口となったケースもある。教育には一定の投資が必要で、教員や教育関係者のみでまかなえる物ではないと私は考えている。つまり「教育は見返りを求め

ない投資」。ただし、投資しすぎると、自身の負担が増えすぎるため、バランスは大事だ。投資した結果、思いもよらぬ結果となり、嬉しい知らせが聞こえたり、社会的変質が見られたり、投資を失敗すると、痛手を被ることもある。(これはあくまでも個人的な考えです。)

地域で学ぶということは町内での挨拶や、ちょっとした会話から社会の実状や問題、課題を見いだせる機会と出会うことが出来る。たった一度の地域の方との会話で学生の一生が変わることもあるだろう。

このFLもがみの講義は、コロナ禍においても大成功を収めている。本当に地域の皆様のご協力の賜であると同時に、もがみから山形、日本、世界を考えるきっかけをいただいていることを実感している。

引き続き、持続可能な範囲での講義としてのFLもがみを努めてゆきたいと同時に、地域の皆様にはご迷惑をおかけするが、今後も学生には暖かく接していただければと思う。

## 「フィールドラーニング

### ー共生の森もがみ」コラム

フィールドラーニングがもつ教育方法としての  
価値ー生活綴方的教育方法との比較を通してー

山形大学学術研究院 菊田尚人

筆者は、2021年4月に山形大学へ着任し、「フィールドラーニングー共生の森もがみ」の担当教員の一人となった。フィールドラーニングというこれまでに馴染みのなかった教育活動に取り組む中で、フィールドラーニングがもつ教育方法としての価値について関心をもつようになった。

本コラムでは、日本における伝統的な書くことの教育実践である生活綴方との共通性という観点から、フィールドラーニングが教育方法としてどのような価値をもっているのかについて考えたい。生活綴方とは、自身を取り巻く生活をありのままに見つめながら取り組む文章表現活動のことである。特に、生活綴方を教科学習のための方法として生かそうという側面は、純粋な生活綴方の取り組みと区別する形で、生活綴方的教育方法と呼ばれている。

フィールドラーニングと生活綴方的教育方法という二つの教育方法の特徴として、どちらも学習者が主体的に課題を発見する過程そのものを大切にしていることがあげられる。専門教育としてのフィールドワークと比較しながら、フィールドラーニングの概念整理を行っている阿部(2018)は、「民俗学的なアプローチでは、課題が先に存在し、その課題を解決するために地域へ調査に行くが、フィールドラーニングにおいては、一定地域に入ってから自ら課題を見つける必要になるという特徴が見えてきた」

(p. 30)と指摘している。一方、生活綴方的教育方法に関する過去の文献を見てみると、学習者自身が問いを発見できることに、教育方法としての価値が置かれていたことが分かる。例えば、田宮(1981)では、生活綴方的教育方法の流れをくむ「文筆活動法」が学校現場で取り組まれた背景について、「他教科の学習のなかで『文章を書くこと』によって、問題の発見、感想の提示、整理、確認主体化、などのために役立つからである」(p. 149)と述べている。このように、学習者にとっての切実な問いの創出を重視していることは、教育方法としてのフィールドラーニングと生活綴方とが共通してもっている特徴だといえる。

それはすなわち、どちらの方法も、学習者が主体的に自分にとっての問いを発見できる機会を保障しているという点で、教育方法としての価値をもっているといえる。

ところで、フィールドラーニングには、生活綴方としてこれまでに取り組まれてきた実践とは大きく異なる点もある。例えば、生活綴方が書くという行為に基づく学習活動であるのに対して、フィールドラーニングは地域での体験活動を通した学びを重視している。また、フィールドラーニングは大学の初年次教育を対象としている。

今後、こうした違いの側に注目することで、これまでの生活綴方の教育実践にはない、フィールドラーニングという教育方法独自の価値を見出せるかもしれない。そのためにも、フィールドラーニングという教育方法がもつ豊かな可能性について、学生の学びの姿に寄り添いながら考え続けていきたい。

参考文献

阿部宇洋(2018)「フィールドラーニングと  
フィールドワークの差異と民俗学への応  
用」『山形大学高等教育研究年報』第12号、  
29-32.

田宮輝夫(1981)「生活綴方と他教科の教育」  
『作文と教育』11月号、148-150.



### 第3章 もがみ専門科目

#### I 地域教育文化学部

#### “新庄市での教育実習（もがみ教育実習）”

山形大学大学院教育実践研究科 江間史明

##### 1 「もがみ教育実習」の15年の歩み

新庄市での教育実習プログラムは、学生が、実習期間中（3週間）、新庄市内に合宿して実習を行うという現地滞在型の教育実習である。「小規模から中規模までの学校を実習校に選べる」「地域の人々を交えた懇談会の開催」など、学校での授業実習に加えて、広く地域と関わって教育実習を行えるという特徴を持つ。この教育実習は、新庄市教育委員会の全面的なバックアップによるものである。この教育実習で学んだ学生の中から、最上地域の市町村で初任教师として第1歩を踏み出す学生が生まれている。地域と大学が連携し、地域を担う教師を育てるという取組が、具体的成果を生みつつあると言える。

この教育実習は、2006(平成18)年度にスタートし、次の表1のように実習生が参加してきた。

表1 新庄市の教育実習実施状況

年	2年基礎実習 (1週間)	3年実践実習 (3週間)	栄養実習	合計 (人)
2006	8			8
2007	18	10		28
2008	15	11		26
2009		14		14
2010		14		14
2011		12		12
2012		18		18
2013		20	2	22
2014		25	4	29
2015		20	6	26
2016		24	4	28
2017		12	6	18
2018		16	6	22
2019		21		21
2020		4		4

2009(平成21)年度から、基礎実習(1週間)は、附属学校での実施になり、新庄市教育実習では実

施しなくなった。栄養教育実習は、2013(平成25)年度より2018(平成30)年度までの実施であった。

2020(令和2)年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、2月27日より全国一斉休校となり、休校は、3ヶ月間続いた。大学でも授業はオンラインとなった。2020年度の新庄市教育実習でも、通常の合宿形式は、集団生活が密な環境となるため実施できなかった。結果として、最上地域の自宅から実習校に通える学生4名のみでの実施となった。

2021(令和3)年度は、新型コロナウイルス感染症に対応する2年目の教育実習であった。

##### 2 新庄市教育委員会からの申し入れと実習生

2020(令和2)年度の新庄市教育実習については、2019(令和元)年12月13日付で、新庄市教育委員会よりエリアキャンパスもがみのキャンパス長あてに「山形大学地域教育文化学部教育実習の新庄市での実施について(要望)」(新学発第5430号)という文書が、提出された。

要望書は、2019(令和元)年度教育実習において、「実習校においても、教育実習生を受け入れることを大きな刺激として受け止め」ていたことを述べて、「新庄市ならではの少人数指導、小中一貫教育、地域と密着した教育活動」を活かし、令和2年度も引き続き新庄市での教育実習を継続して実施できるよう要望していた。新庄市教委は、平成25年度より教育実習の宿泊施設である山屋セミナーハウスの使用料(一人あたり1人1030円×20泊)を予算化して、充実した教育実習ができるように、大学との協力体制の整備も行っている。

しかしながら、2020(令和2)年度は、5月時点で15名の希望者がいたが、新型コロナウイルスの感染拡大で宿泊施設を利用できず、すでに述べたように、自宅生の4名のみでの教育実習となった。

2021(令和3)年度の新庄市教育実習については、新型コロナウイルスの感染状況をみながら新庄市教育委員会と実施の方向で協議を行い、2020年12~2021年1月の学生へのオリエンテーションでこの実習への参加者を募った。2021年度の新庄市の教育実習には、3年生と4年生14名(小学校11名、中学校3名)の希望者があった。

しかし、その後、新型コロナウイルスの感染再拡大により、2021年度も、教育実習期間中の宿泊施設を使用できないことが判明した。新庄市教育委員会とさらに協議を行い、新庄市での実習を希望する学生には、駅前のビジネスホテル(シング

ル)を用意することになった(大学からは、地域教育文化学部後援会より1泊1000円の補助を決定した)。再度、学生への希望を聞いた結果、2021年度の新庄市教育実習は、下記の11名となった。

3年生8名(小学校) 4年生3名(中学校)  
このうち、ホテル利用が5名であった。

### 3 2021年度教育実習への準備と指導体制

2021(令和3)年度の新庄市の教育実習は、次のように行われた。

○教育実践実習A(3年生、3週間、小8名)

○教育実践実習B(4年生、3週間、中3名)

2021年8月30日(月)～9月17日(金)

小学校実習校は、6校(新庄小、日新小、本合海小、升形小、萩野学園(前期)、明倫学園(前期))、中学校実習校は、3校(新庄中、日新中、八向中)であった。

この実習への準備として、2021年7月30日(金)に「山形大学エリアキャンパスもがみ教育実習打合せ」を、新庄市民プラザで行った。江間が実習生と参加した。大森桂学部長からは、オンラインで大学からの挨拶をいただいた。ここが、学生と実習校との顔合わせの場所になる。全体打合せのあと、学生は、自分が実習を行う学校を訪問して打合せをした。その後、宿泊場所となるホテルの見学を行い、実習への準備をすすめた。



打ち合わせ会の様子

教育実習期間中の指導体制については、新型コロナウイルス感染症への対策から、実習校が指導を希望する場合には、地域教育文化学部の教員が研究授業を参観し、事後研究会にも参加することとした。これは、山形市など村山地域の実習校と同様の指導体制であった。

### 4 「地域懇談会」の中止と地域連携の学び

これまで、新庄市教育実習の特色の一つとして、地域懇談会を位置づけてきた。懇談会には、新庄市教育委員会、各実習校の校長および保護者代表者が参加し、大学側からは、江間が参加してきた。学生にとっては、学校内の教育実習に加えて、学校と地域の関係を直に学ぶことのできる貴重な機会であった。学校長からは、学校における地域についての学習や、地域とのつながりのある活動等が紹介された。保護者代表からは、地域とのつながりにおいて学校に期待することや未来の教師に期待することが述べられてきた。

しかし、2020年度と2021年度については、新型コロナウイルス感染症への対策から、2年連続して地域懇談会を中止せざるをえなかった。各校の地域と学校の連携は、校長先生の講話などで扱うこととした。こうした中で、学生は、普段の学校の取組から地域と学校の連携について学んでいた。村岡陽菜さん(資料1、後掲)は、2年生の生活科のまち探検について次のように述べている。

次々と質問が飛び交い、生き生きとした表情で地域の方の話をしている子どもたちの姿を見て、学校で働く教員だけが子どもたちの先生というわけではなく、地域の方々も子どもたちにとって先生であり、地域と学校が連携することでより地域に根ざした教育を行うことができることを実感しました。

新庄市の学校で積み上げられてきた、当たり前の教育活動から、村岡さんが新鮮に学んでいることを指摘できる。

### 5 今後の課題

このように、2020年度と2021年度は、新型コロナウイルス感染症による様々な制約の中で、新庄市教育実習を実施した。だが、2021年度は、実習中の宿泊場所の確保などについて、新庄市教育委員会と協議しながら進めることができた。結果として、2021年度は、自宅生とホテル利用の学生による教育実習の実施となった。では、学生は、2021年度の実習をどう受け止めたのだろうか。

資料3の実習生の今回のアンケートは、回収数10(回収率91%)であった。アンケートからは、次の3点を指摘できる。

第一に、新庄市教育実習に参加した点についてである。まず、ホテルを宿泊場所とした点については、自由記述で次の指摘があった。

ホテルの人たちと教科指導などについて相談しながら実習を行うことができたので、楽しく行えた。もがみ教育実習にしてよかった。

学生への経済的負担は軽くはなかったと思われるが、学生が、お互いに協力して充実した教育実習にしたことがうかがわれた。

また、回答者の全員（10名）が、「もがみ地域の学校で実習ができたこと」を「よかった」と回答している（問10）。その理由には、「先生方のご指導やサポートが手厚いこと」「1日担任の経験を1週間まるまる出来ること」「実習に集中できる環境」「小規模校での実習」をあげていた。

第二に、実習の前と後で、教職への意欲・関心（問2）が、「大幅に高まった」7名（70%）「少し高まった」3（30%）とする学生がいたことである。教職への強い意欲を示した点で、本実習が、教師を目指す学生に対して高い教育効果を持ったことを指摘できる。

第三に、実習を体験して勉強になった点（問4）について、「②授業の進め方（板書・発問・展開・等々の仕方）」と「⑥個々の児童生徒の理解と受容の仕方」を回答者の10名全員があげている。これは、実習生が、授業の基本的な進め方とあわせて、個々の児童生徒へ向き合い方を、同時に学んだことを示している。高橋音々さん（資料2、後掲）は、「授業づくりは、児童をよく知った上で、目の前の児童に適切な授業を作る力が重要なのだと実感した」と述べて、2年国語の授業での次のエピソードを挙げている。

同じところで手が止まっている2人の児童に対して、同じ声かけを行った時がありました。この時、1人の子は、「わかった！」と自分で答えに辿り着けていましたが、もう1人の子は、首をかしげたままで、解けていない様子でした。この経験から、1人に対して通用した説明でも、他の人に通用しないことを体験しました。

ここで高橋さんは、「子どもを見る」という教師の根本を、教育実習で学んでいることを指摘できる。

最後に、実習校からのアンケート（回答数5/9、回答率55.5%）の指摘を見ておきたい。実習校では、実習に臨む学生の意欲を肯定的に受け止めていただいている一方、大学の指導については次の指摘があった。

本時の評価や評価物までを入れた指導案の書き方についてご指導いただければと感じました。また、板書の有能性や必要性、板書計画の立て方についても、授業づくりの授業・講座の中で取り扱っていただけたらと思いました。

実習生が最も時間を割き、悩んでいたのはやはり授業づくりでした。実習前に学習指導の実際、授業展開の実践などの経験を積んでおくことは必要不可欠だと感じました。

コロナ禍での実施になっているので仕方がない面もありますが、集団接種の日程と重ならないように配慮していただけたらと感じました。公欠ではありますが、紙面上は欠席扱いとなり、副反応等で長引いてしまった場合には単位を落としかねません。学生たちが、教育実習に専念できる期間の設定をお願いいたします。

指摘された課題については、新型コロナウイルス感染症への対応を考えながら、より充実した教育実習となるように、新庄市教育委員会と協議をしながら進めていきたい。

#### 資料1

萩野学園(前期)での3週間を振り返って

児童教育コース3年 村岡陽菜

私は今年度、萩野学園（前期）で3週間の教育実習をさせていただきました。様々な教科、様々な学年の授業を見学させていただいたり、実際に子どもたちの前で授業をさせていただいたり、子どもたちとたくさん関わったりする中で、たくさんのお話を学ばせていただきました。今でも「萩野学園に戻りたいなあ」と思うほど、充実した楽しい時間を過ごすことができました。この実習を通して学んだことや感じたことを主に二つ述べたいと思います。

一つ目は、授業づくりについてです。私は、2年生のクラスで実習をさせていただきました。先生方の授業を見学させていただき、子どもたちから様々な意見や考えを引き出す発問の仕方、子どもたちの意見や考えをもとにして授業を進める児童主体の授業のあり方を学ぶことができました。

子どもたちが考えた様々な意見を自分たちで関連付けたり、比較したりして考えることでまたさらに考えが深まっている様子を見て、これが「学び合い」の授業であると実感することができました。

見学を通して学んだことや先生方からいただいたアドバイスをもとにして「子どもたちと一緒に作る授業」を目指し、実際に授業に臨みました。しかし、予想していなかった意見に戸惑ってしまったり、時間が足りず子どもたちの気づきや疑問を丁寧に取り上げることができなかつたりして、「子どもたちと一緒に作る授業」の難しさを感じました。これらを今後の課題として、改善することができるように努めていきたいです。また、子どもたちの興味や関心、日常生活と結びつけた教材研究にも力を入れ、子どもたちが主体的に学習に取り組むことができるようにしたいです。そして、授業を通して子どもたちと一緒に楽しく学び合うことができる教員を目指したいと思います。

二つ目は、地域と学校の連携についてです。私は生活科のまち探検に同行しました。地域で育てている花の名前や育て方について花屋を営んでいる保護者の方が説明してくださったり、地域で採れる農産物について実際に農産物を育てているビニールハウスの中を見学させていただいたりしていました。実際に体験しながら、地域に関する様々なことを学ぶことができ、子どもたちの意欲も高まっているように感じました。次々と質問が飛び交い、生き生きとした表情で地域の方の話の聞いている子どもたちの姿を見て、学校で働く教員だけが子どもたちの先生というわけではなく、地域の方々も子どもたちにとって先生であり、地域と学校が連携することでより地域に根ざした教育を行うことができることを実感しました。教員を目指す私自身も地域のよさに目を向けて子どもたちに積極的に発信し、地域全体で子どもたちの成長を見守っていきたいと思いました。

私はこの実習を通して、改めて「教員になりたい」と強く感じました。最初は緊張と不安な気持ちでいっぱいでしたが、明るく元気に声をかけてくれる子どもたちと一緒にいるうちに自然と笑顔に

なることができました。また、授業づくりに関して悩むことが多かったのですが、お忙しい中でも一緒に悩み、励ましてくださった先生方のおかげで、子どもたちと一緒に楽しく授業をすることができました。子どもたち一人一人に親身に寄り添い、子どもたちの未来まで見据えながら丁寧な指導をなさっている萩野学園の先生方のようになりたいたいと強く思いました。

最後になりますが、新型コロナウイルスの影響の中で私たち実習生を受け入れてくださったこと、お忙しい中ご指導してくださった萩野学園の先生方や子どもたちをはじめ、新庄市の教育委員会の皆さま、地域の方々、保護者の皆様に深く感謝申し上げます。この実習で学んだことや感謝の気持ちを忘れず、これからも教員という夢に向かって日々学び続けたいです。



## 資料2

地元「新庄」での実習を振り返って

児童教育コース3年 高橋音々

私は今年度、新庄市立本合海小学校で教育実習をさせていただきました。3週間の実習を通して、素直で優しい児童との関わりや大学では学べない実践的な学びを自分が生まれ育った新庄で、安心しながら、できたと感じています。ここでは、特に勉強になった「授業づくり」と「児童理解」「声かけ」について述べていきます。

まず、授業づくりについては、児童の実態に寄り添った授業づくりが大切であることを学びました。実習では、先生方のご配慮から、配属学級の5・6年複式学級以外にも、1～4年生までの授

業の参観やTTでの参加もさせていただきました。そして、先生方の授業は、どれも子どもの生活経験に結びつけて行っている印象がありました。

私も先生方のような授業をしたいと望んだ理科の授業では、もののとけ方の単元の1時間目を行いました。具体的には、食塩は溶け、見えなくなっても、水の中にあることを重さの違いから証明する授業を計画しました。ですが、授業を行ってみると、重さの違いから、食塩は中にあると理解できていたものの、食塩が入る前と後の見た目の変化がないことから、納得出来ていない児童が多いように感じました。この経験から、目の前の児童の実態に合った授業でないと、表面的な理解で終わり、覚えるだけの学習に成り下がってしまうと危機感を抱きました。この時に改めて、授業づくりは、児童をよく知った上で、目の前の児童に適切な授業を作る力が重要なのだと実感しました。

また、道徳の授業では、最後の発問を行った際、考えていた答えにならず、軌道修正しようとその答えを導くための問いかけを行ってしまいました。その後の事後検討会では、答えを探させる問いかけになった途端、授業が失速してしまうこと、児童の思考をアップダウンさせる授業展開の方法など、授業をやったからこそ分かった知識や、現役の先生が持つテクニックを知りました。これらの経験から、授業づくりは、日頃の児童との関わりから実態を把握し、効果的な支援や指導の仕方を行うことで、児童に寄り添ったものができるようになりました。

次に、児童理解については、児童の数だけ適切な指導の仕方があることを実習から学びました。

私が1・2年生学級にTTとして入った際、2年生は、国語の授業で、時系列ごとに、獣医さんの仕事を書き出す活動をしていました。その際、同じところで手が止まっている2人の児童に対して、同じ声かけを行った時がありました。この時、1人の子は、「わかった！」と自分で答えに辿り着けていましたが、もう1人の子は、首をかしげたまま、解けていない様子でした。この経験から、1人に対して通用した説明でも、他の人に通用し

ないことを体験しました。そして、どんな児童にも、分かりやすい声かけが出来るよう、色んなパターンの声かけや支援が出来なくてはいけないことも実感しました。

最後に、声かけについては、主体性・協働性を促す声かけがあることを学びました。実習の際に、先生方の指導の様子を見て、ヒントを与えて間違いに気付かせる声かけや、学び合いを促す声かけがあることを学びました。これまで解き方を説明するような声かけをしていた私にとって、子どもの主体性や協働性を促す声かけを学べた貴重な経験になりました。また、学習を促す声かけ以外に、「一緒に〇〇さんの話を聞いてみよう」など、児童を落ち着かせたり、学びの環境を整えたりする声かけもあることも知りました。

この実習を終えた後も、授業やボランティアなどで、実習で学んだことが使えたり、参考にできたりすることがたくさんありました。その度に、実習での経験が自分の糧になっていると感じます。暖かく迎えてくださった実習校の児童のみなさんと先生方を初め、実習を支えてくださった新庄市教育委員会の方々にただただ感謝の気持ちでいっぱいです。最後になりますが、様々な方が支えてくださったからこそ出来た実習での経験を胸に、自分の夢に向かって頑張りたいと思います。本当にありがとうございました。

### 資料3

教育実習に関するアンケート（地域教育文化学部3年次・もがみ教育実習）結果

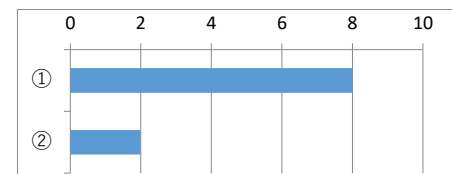
教育実習に関するアンケート(もがみ教育実習)結果 2021(令和3)年度

以下の質問について該当する選択肢に☑してください。

1. あなたはどこで教育実践実習(以下「実践実習」)を行いましたか。

- ①小学校  
②中学校

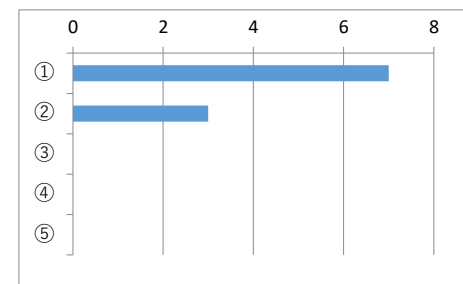
①	8
②	2
計	10



2. 教育実践実習(以下、「実践実習」)体験後の教職への意欲・関心の変化

- ①実習前より大幅に高まった。  
②実習前より少し高まった。  
③実習前とあまり変わらない。  
④実習前より少し下がった。  
⑤実習前より大幅に下がった。

①	7
②	3
③	0
④	0
⑤	0
計	10

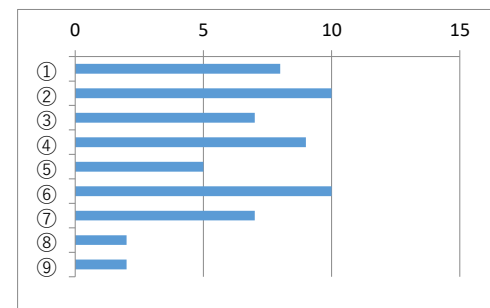


3. 問2で④または⑤を選択した方は、その理由を記入してください。(自由記述)

4. 実践実習を体験してどんなところが勉強になりましたか。(複数選択可)

- ①教科・道徳の指導案の書き方  
②授業の進め方(板書・発問・展開等々の仕方)  
③教材研究の方法  
④学級経営の理解(掲示物の示し方・児童一人一人の理解・児童の関係づくり)  
⑤児童生徒集団の理解の仕方  
⑥個々の児童生徒の理解と受容の仕方  
⑦教具・教育機器の活用の仕方  
⑧特別活動(児童会・生徒会活動・クラブ活動・学校行事)の指導の仕方  
⑨その他

①	8
②	10
③	7
④	9
⑤	5
⑥	10
⑦	7
⑧	2
⑨	2
計	60



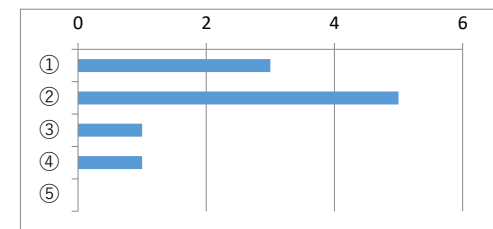
・給食指導

・中学生の英語の課題がどんな物かをじっくり観察できたことで、小学校外国語との接続で重点を置く場所を少し考えられたこと。

5. 実践実習体験後の大学の授業への意欲・関心の変化

- ①実習前より大幅に高まった。
- ②実習前より少し高まった。
- ③実習前とあまり変わらない。
- ④実習前より少し下がった。
- ⑤実習前より大幅に下がった。

①	3
②	5
③	1
④	1
⑤	0
計	10



6. 問5で④または⑤を選択した方は、その理由を記入してください。(自由記述)

・授業にもよるが、大学で学んだことが現場での実践に役に立ったと感じるものが少なかったため。前期で、とても時間のかかる大きな課題をいくつも出されて苦労した授業があったが、そこで学んだことは実習では使う場面がなかった。そういった課題や授業に多くの時間を費やす意味はあるのか、疑問に思った。

7. 大学の授業の効果について

小研・特研を行った教科と、役立ったと思う授業科目名を記入してください。

小研:国語 初等教科教育法Ⅱ(国語)

小研:国語 ごんぎつね 国語教科教育法 初等教科教育法Ⅱ

小研:国語 初等国語科教育法

小研:算数 初等教科教育法Ⅰ、Ⅱ(算数)

特研:国語 初等教科教育法Ⅰ、Ⅱ(国語)

小研:算数 初等教科教育法Ⅰ(算数)、初等教科教育法Ⅱ(算数)

特研:国語 初等教科教育法Ⅰ(国語)、国語科教育法、初等教科教育法Ⅱ(国語)

小研:算数 初等教科教育法Ⅱ(算数)

小研:初等教科教育法算数

特研:算数 初等教科教育法(算数)

特研:英語、英語科教育法

小研:英語 英語科教育法

8. その他実践実習で役立ったと思う授業科目名を記入してください。

生徒指導・進路指導 (4)

教育経営学 (2)

特別支援教育総論 (2)

初等教科教育法Ⅱ(社会) (2)

道徳教育の理論と実践

初等教科教育法(家庭)

教育相談

情報処理

学習開発フィールドワーク

体育の基礎

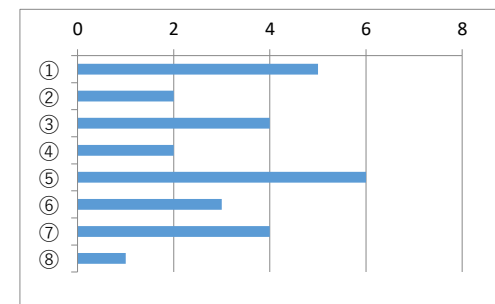
発達心理学

学級経営学

9. それらの授業が役立ったところはどんな点ですか。(複数回答可)

- ①教科の内容の理解
- ②教科・道徳の指導案の書き方
- ③担任教諭の学級経営上のポイントの理解
- ④児童生徒集団の理解の仕方
- ⑤個々の児童生徒の理解と受容の仕方
- ⑥教材研究の仕方
- ⑦授業の進め方(板書・発問・展開等々の仕方)
- ⑧その他

①	5
②	2
③	4
④	2
⑤	6
⑥	3
⑦	4
⑧	1
計	27

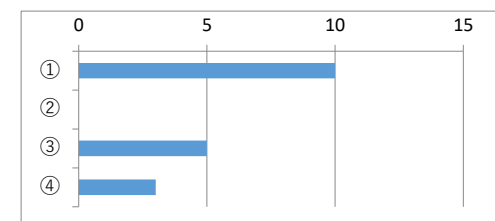


・ノートの取り方

10. 「もがみ教育実習」の内容で、よかったのはどんな点ですか。(複数選択可)

- ①最上地域の学校で実習ができたこと
- ②保護者や地域の人を交えた懇談会
- ③指導主事による学習指導案等への指導
- ④その他

①	10
②	0
③	5
④	3
計	18



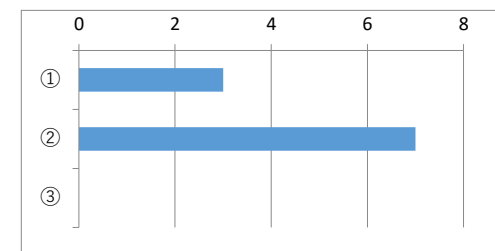
- ・実習校に実習生が1.2人なので、先生方のご指導やサポートが手厚いこと。また、1日担任の経験を1週間まるまる出来る。
- ・実習に集中できる環境
- ・小規模校での実習

11. 「基礎実習」(2年次)の効果について

あなたは、「基礎実習」の経験が役立ったと思いますか。

- ①大いに役立った
- ②少し役立った
- ③あまり役立たなかった

①	3
②	7
③	0
計	10



12. 問11で答えた理由・改善して欲しい点など(自由記述)

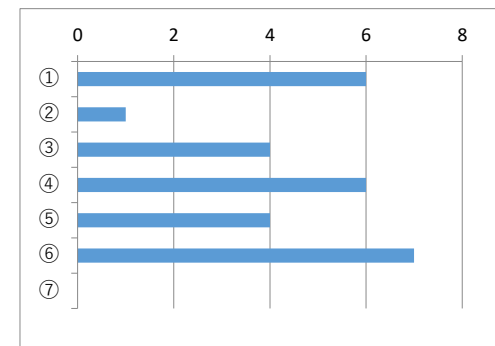
- ・授業をすることに対する緊張感が減ったため。
- ・授業を1回基礎実習で実践していることによって、どういう風に授業を進めていけば良いのがある程度分かっていたため、指導案を簡単に作ることができた。  
また、基礎実習で反省点が見つかったため、そこに注意しながら実践実習Aを行うことができた。
- ・1週間だったため、まだ雰囲気がつかめなかった
- ・授業を一回していたので、指導案の書き方や授業の流れの作り方がわかった。
- ・体育、家庭科、音楽、国語の基礎科目を受けたが、体育と国語以外実習で担当を持つことはないのであまり役に立ったとは言えない。
- ・2年生での基礎実習では、児童との接し方や児童に対する言葉かけ、教師として授業でどんなことを意識するかを学んだので、そこが英語の授業作りの基礎になっていたと感じたから。



13. 「基礎実習」の経験で役立ったところはどんな点ですか。(複数選択可)

- ①教科・道徳の指導案の書き方
- ②学級経営案のポイントの理解
- ③児童生徒集団の理解の仕方
- ④個々の児童生徒の理解と受容の仕方
- ⑤教材研究の仕方
- ⑥授業の進め方(板書・発問・展開等々の仕方)
- ⑦その他( )

①	6
②	1
③	4
④	6
⑤	4
⑥	7
⑦	0
計	28



14. 実践実習の前に、学習・準備しておくことよと思ったことについて自由に記入してください。

- ・既習漢字のチェック
- ・私はその学校で9月に行う単元がどこなのかを教えられていたので、実践実習の前にその単元の部分の教科書を読み、どんな授業を作ろうか想像を膨らませることを行えばもう少しスムーズに授業の流れを考えることができたかなと思った。
- ・担当させていただく授業について(授業時数、教科、単元、教科書の該当するページ等)、打ち合わせの段階で決めておくこと。実習までに授業の流れをある程度考えておくこと。
- ・自身が行う単元の範囲を事前に聞いておいて、あらかじめアイデアを作っておくこと
- ・授業中の声の抑揚、気丈さ等の調整。担当学年で習う漢字。
- ・指導案の書き方を確認しておくこと。
- ・実習前に小研、特研の科目が決まっている場合は正案を作っていて指導修正の時間を多くとってもらった方がいい
- ・指導案の書き方や、ワークシートの作り方などをもう少し練習しておく良かったと実感している。

15. もがみ教育実習について、改善すべき点等があればご意見をお聞かせください。

- ・ホテルの人たちと教科指導などについて相談しながら実習を行うことができたので、楽しく行えた。もがみ教育実習にしてよかった。
- ・日誌の書き方、提出法など、学生によって違うようです
- ・新庄市市役所においてある山大的自転車が古くて重かった。
- ・特には無いです。充実した実習ができました。ありがとうございました。

## 第4章 もがみ活性化事業

### I 大学見学旅行

最上地域の子供たちに、もっと山形大学のことを身近に感じてもらうために「山形大学見学旅行」を開催しております。

児童の皆さんには、身近なものを使った「化学実験教室」として、楽しい実験を体験してもらうほか、校内散策や学食の利用等をとおして大学の雰囲気を味わってもらいます。

令和2, 3年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、来訪を制限又は休止となりました。

#### 【令和2年度】

- (1) 真室川町立真室川あさひ小学校 (4年生 11名)  
10月20日(火)
- (2) 新庄市立新庄中学校 (3年生 18名)  
11月4日(水)
- (3) 大蔵村立大蔵中学校 (3年生 5名)  
11月6日(金)
- (4) 新庄市立八向中学校 (3年生 7名)  
11月12日(木)

#### 【令和3年度】

休止

### II もがみ協力隊

もがみ協力隊は、エリアキャンパスもがみに関連した活動へ参加する山形大学の学生組織です。

令和2, 3年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、活動が制限される中、以下の活動をとおして最上地域の方々と学生が交流を深めました。

#### 1 フィールドラーニング応用編

フィールドラーニングを受講した学生が、授業外で自主的に地域へ訪れる活動を「フィールドラーニング応用編」と呼んでいます。

#### 【令和2年度】

休止

#### 【令和3年度】

山形大学舟形プロジェクト (舟形町)

概要 フィールドラーニング(舟形町のプログラム)を受講した学生有志が、受講後、舟形町の課題「農業人口減少による農村の衰退」をあげ、解決案として「人、特に若者への町の魅力の周知」と考えた。この解決案を実証するため、「若者間での舟形町の認

知度を上昇させ、大学が地産地消のための市場になり得るか否か」について、舟形町の食材を使用したメニュー「舟形野菜かき揚げ丼」の提案と販売、アンケート調査を実施した。

## 第二部 授業記録

### ○「フィールドラーニングー共生の森もがみ」プログラム

1. 地域×バーチャルワーキングスペースの未来構想	27
2. かねやま旅情	31
3. 最上町の人・自然・文化に触れよう	39
4. 里地里山の再生 I	46
5. 子どもの自然体験活動支援講座	52
6. 大蔵村の生活と伝統の継承	61
7. 人と自然と地域をつなぐ環境保全活動	67
8. 里山保全と角川のパワースポット巡り	71

## 地域×バーチャルワーキングスペースの未来構想

### 活動状況

○実施市町村：新庄市

○講師：一般社団法人最上の暮らし舎 吉野優美

○訪問日：令和3年6月19日(土)～20日(日)、7月3日(土)～4日(日)

○受講者：人文社会科学部1名、医学部2名、農学部1名 以上4名

○スケジュール：

1回目	2回目
<p><b>【1日目】6月19日(土)</b></p> <p>8:20 山形駅集合                      8:42 山形駅発                      9:52 新庄駅着                      10:30 のくらし到着                      11:00 集合、オリエンテーション、自己紹介                      11:30 (1)万場町のくらしを知る                          ・のくらしの成り立ち説明                          ・2階ワーキング IWAの説明                      12:00 昼休み                      13:00 (2)商店街を知る                          ・万場町商店街を歩き、何店舗かにお話し聞かせてもらう                      15:00 IWAのメンバーとオンライン交流会                      16:30 まとめ                      17:15 セミナーハウスへ移動</p>	<p><b>【1日目】7月3日(土)</b></p> <p>8:20 山形駅集合                      8:42 山形駅発                      9:52 新庄駅着                      10:45 のくらし到着                      11:00 集合                          前回のおさらい                          ・ワーキングスペースにて作業                          ・『のくらしから生配信』のまとめ                      12:00 昼休み                      13:00 配信準備                      15:00 (5)万場町『のくらしから生配信』                          ・商店街ツアー(IWAの方々にも繋ぐ)                      16:00 配信終了                      17:00 まとめ                      17:30 セミナーハウスへ移動</p>
<p><b>【2日目】6月20日(日)</b></p> <p>9:30 山屋セミナーハウス出発                      10:00 (3)モグラ会員(コーワーカー)と交流                          ・ワーキングスペースの利用について                          ・次回、『のくらしから生配信』するネタを考える                      12:00 昼休み                      13:00 (4)『のくらしから生配信』企画                          ・ワーキングの可能性模索                          ・『のくらしから生配信』のまとめ                          ・アポ取りなど                      14:30 『のくらしから生配信』企画プレゼン                      15:00 次回のやることまとめ                      15:30 終了                      16:14 新庄駅発                      17:23 山形駅着</p>	<p><b>【2日目】7月4日(日)</b></p> <p>9:30 山屋セミナーハウス出発                      10:00 万場町のくらし到着                          動画編集し、youtubeチャンネルにup                      12:00 昼休み                      13:00 この4日間の感想シェア                          今後、山大とコラボできそうなこと構想                      15:00 まとめ                      15:30 終了                      16:14 新庄駅発                      17:23 山形駅着</p>

## 授業記録

### ○活動レポート「私はもがみで考えた！」

#### 人文社会科学部 Fさん

私は今回フィールドワークに参加し、新たな発見があった。1つは、万場町の人々の暖かさである。ゆうみ氏が住民の方に紹介をしてくださったからという面も大きいと思うが、色んな人が歓迎の意を示してくれた。そして、万場町の住民の方々は互いに助け合う意識が強く、なにか困った時があったときはすぐ手を差し伸べるようなローカルの良さを感じた。「のくらし」に飾ってある花や、七夕祭りのときの材料となる紙などを提供しあうようなところからもそのようなことを感じた。

次に、IWAのみなさんとの繋がりだ。フィールドワークが始まった当初はコワーキングスペースの存在、在り方すら知り得ていなかった。しかし、ゆうみ氏の説明や実際にコワーキングスペースを運営している人々の話聞いていく中で、少しずつ理解が深まっていった。そして、コワーキングスペースを運営するにあたっての良かった点や課題を知ることができた。私は、コワーキングスペースを運営する意義は利益にあると考えていたが、実際にはそうではなく、面白さや興味という面が強いのだと改めて感じた。しかし、持続可能なものにしていくには運営するための費用を補わなければならない。その応援のために、「モグラ会員」があるのだと思われる。そして、この仕組みは近年盛んになっているクラウドファンディングに似ているのではないかと思った。モグラ会員による支持を集めているのもオーナーであるゆうみ氏の積極的な活動が大きな要因となっていると考えられる。

これらのことから、人々が価値を見出すのは「もの」から「ひと」に変わっていくのではないかと考える。インターネットによるオンライン化は数年前よりも格段に進展している。また、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、リモートワークやオンライン授業などがここ一年間ほど行われてきた。この経験から、オンラインで十分代用可能なものやオフラインでしかできないものを多くの人々が知ることができたと思われる。そして、今後もオンライン化の進展は進んでいくだろう。そう考えると、需要が高まっていくのは「もの」ではなく「ひと」になると考える。なぜなら、オンラインでは「もの」に触れることはできず、誰かと繋がること、つまり「ひと」を必要とするからである。

今後、オンラインの進展はどのように進んでいくのか予想することは難しいが、他のコワーキングスペースなども利用し、比較して人と人を繋ぐオンラインの良さの活かし方を探求していきたいと考える。



#### 医学部 Tさん

今回のフィールドワークでは、のくらしについて、IWAについて、万場町について多くのことを学んできた。それらに共通する観点がある。「つながり」をどう作っていくかということだ。1日目の活動の中で、のくらしは地域に根差した喫茶店・間貸しとしての在り方を保ちながらも、いろいろな目的を持った人々が集う活動拠点としての場所であるとわかった。その二つの形態は、一見すると客層がかぶっておらずバラバラなものに見える。しかし、地元の人とモグラが偶然に話すこともあるだろうし、そこで新たな活動のきっかけが生まれるかもしれない。のくらしでしか生まれることのない新たなつながりが生まれるのだということを知った。これはのくらしの核をなすコンセプトとなっている。

そののくらしを支えるキーマンがゆうみさんだ。上記のようにのくらしは多様な人とのつながりの中で地域のための新たな活動を推進するという目的があるが、地元の人たちにその目的を積極的に伝えているわけではなく、あくまで表向きの肩書は「喫茶店」である。地元の型にしてみればその方が説教臭さもなく、ニュートラルな立場で話をするのできるのだろう。そしてゆうみさんは商店街の人との世間話やあいさつ回りといったコミュニケーションを楽しんでいるように見えた。このような1つ1つのコミュニケーションを大切に、万場町とのくらし、のくらしと地域の人との関係性の土壌を養っていくことが、今ののくらしの活動につながっているのだと感じた。

今回の活動では、「バーチャルコワーキングスペース」にも触れた。IWAは新しい働き方の探求を目的としており、その手段としてコワーキングスペース間の常時接続を進めている。一方、私たちが体験をした中でのIWAの活動は、むしろ先ほど話題にあげた土壌づくりに近い、ローカル寄りの活動だったように思える。定期的な交流会をしたり、オンライン常時接続の活用を模索したりする中で、さらにその輪を広げるとともに、新しいことを

始めるためのきっかけを探しているように見えた。私はこの点に、のくらしをもっと面白くするための可能性を感じた。完全オフラインのつながりは、つながりを作る場所や人に左右され、大きく広がっていきづらいくローズドなものである。IWAのつながりを利用して、クローズドなつながりを保ちつつも少しずつ外部の人にその輪を広げていけるような仕組みがあれば、持続可能な形で新たな活動に取り組めるのではないかと私は考えた。発表の中で提案する「プレゼン大会」はその足掛けである。

最後に、今回4日間の活動を支えてもらったのくらしの皆さん、IWAの皆さん、万場町の皆さん、市役所の皆さん、そして教職及びサポーターの二人に心から感謝したい。

### 医学部 Aさん

このプログラムでは、「のくらし」という新庄市万場町のハブ（中心）を目指す施設の活動、そして「IWA」という県内の各コワーキングスペース同士を接続させるシステムをどのように活用するかなどについて考えました。

1回目の活動で、のくらしの成り立ちや、コワーキングスペースやIWAを利用する方々、配信者の方のお話を伺って、「オンライン」と「ローカル」という相反するものを混ぜてみれば、未だに活かし切れていないIWAの活性化につながり、そして地域の活性化にもつながると考えました。そのことから、「オンライン」と「ローカル」の融合という目的でIWAだけでなくFacebook Liveも通して万場町の七夕飾りの様子を紹介する「七夕企画配信」を行いました。ただ短冊に書いてある願い事を讀んだり、バーチャルコワーキングスペースの方々から願い事を聞いたりするという形に終始し、個人的にはこれでは配信する側の一方的な配信になっていて、配信を見ている側にとってメリットになる内容ではないと考えました。配信をもっと魅力的なものにして万場町を活性化するには、配信を見る側にも明確なメリットがあり、積極的に介入することができる双方向の交流を実現可能な内容にすることが不可欠だと実感しました。また個人的に、ここで目指していくべきであるのは、「オンライン」と「ローカル」とはあるものの、実際は地域のコワーキングスペース同士、つまり「ローカル」と「ローカル」をIWAのような「オンライン」が媒介して繋げる形だと思いました。Facebook Liveのように不特定多数の方々に配信を見てもらおうというよりも、IWAのように地域のコワーキングスペース同士を繋げれば、双方向の交流、双方の地域の活性化につながりやすく、これがバーチャルコワーキングスペースという場所において適したオンラインの活用方法だと考えました。

発表で提案したのは「プレゼン大会」ですが、この提

案だとまさに「双方向の交流」を実現したものとなり、万場町だけではなく、他のコワーキングスペースがある地域の活性化も期待できると思います。地域のなかでこの活動があることを広められたら、万場町にイベントが一つ増えることになり、それは他のコワーキングスペースがある地域も同様です。のくらしで伺ったお話によれば、娯楽を求めている地域の方が多数いるようであるので、その面でイベントが一つ増えることは効果を持つと考えます。個人的には、このプレゼンを通して、各地域の特産品を紹介して地域に貢献するという形も面白いと考えています。



### 農学部 Tさん

私はこのプログラムで様々な体験をしました。特に印象に残っていることが、山形県内のコワーキングスペースをビデオ電話のようなシステムで常時つないでいるIWAと七夕配信の体験です。最初は、「これって個人でZOOM会議じゃダメなの？」と内心考えていました。しかし、IWAは常時接続することに価値があることを学びました。常時接続することでつないであるコワーキングスペースがまるで一つの空間のように感じられ距離を感じないで交流することが可能なのです。ただ、コワーキングスペースは新しいものを生み出す起業家やフリーランス、社長のような人には価値を見出しやすい施設だと思いますが、一般の会社員の人にとっては価値を見出しにくく、自分に置き換えた場合コワーキングスペースに入ろうと考えるので地域の人を呼び込むというのは難しいと感じました。そこでこの問題を解決するために私は、地域のイベントに近い形でコワーキングスペースを使ってイベントを開催してコワーキングスペースへ足を運んでもらう足がかりを積極的に作っていく必要があると考えました。そうすることで新規の利用者を増やし、地域とオンラインをつなぐことで人口減少が進む地域でイベントの開催が難しい地域においても交流人口は多くなるので様々な形でのイベントができるという利点があります。

次に、七夕配信についてです。七夕配信とは新庄市万場町で軒先に七夕飾りを作ってできた七夕通りを舞台にライブ配信を行うというものです。内容としては、七夕通りを歩きながらコワーカーやFacebookの視聴者、商店街の人から願いを募集して短冊に代筆して笹に飾るというものです。実際に配信をして考えたことは、地域とオンラインをつなぐことは難しいことです。理由は、願いを聞く場面以外コワーカーと視聴者に対してほとんど双方向の交流ができなかったからです。双方向のコミュニケーションが取れない場合わざわざIWAの強みを生かせずコワーキングスペースの利用者の増加も見込めないと考えました。配信をする前は地域とオンラインの交流を生み出せる良いテーマだと考えていたので考えが甘かったことを実感しました。ただ、この失敗を通して双方向によるコミュニケーションの重要性やどういった内容が視聴者に需要があるのかなどに気づくことができたので学んだことが多かった配信にすることができました。



## かねやま旅情

### 活動状況

○実施市町村：金山町

○講師：遊学の森 三上重幸，谷口銀山保存会 井上敬助

○訪問日：令和3年5月15日(土)～16日(日)、6月5日(土)～6日(日)

○受講者：地域教育文化学部1名、理学部4名、工学部3名、農学部2名 以上10名

○スケジュール：

1回目	2回目
<p>【1日目】5月15日(土)</p> <p>8:20 山形駅集合</p> <p>8:42 山形駅発</p> <p>9:52 新庄駅着</p> <p>10:40 遊学の森到着</p> <p>10:00 オリエンテーリング そば打ち</p> <p>12:00 昼食</p> <p>13:00 水辺の観察会</p> <p>15:30 ふりかえり</p> <p>16:00 ホテルへ移動</p> <p>16:30 ホテルチェックイン</p>	<p>【1日目】6月5日(土)</p> <p>8:20 山形駅集合</p> <p>8:42 山形駅発</p> <p>9:52 新庄駅着</p> <p>10:40 遊学の森到着</p> <p>10:50 森の感謝祭2021 ①コケ玉づくり ②もくもくクラフト ③ソバ打ち体験 ④ピザづくり体験 ⑤ぶらっと気ままな自然観察 ⑥新緑ブナシャワートレッキング</p> <p>15:00 終了、ふりかえり</p> <p>15:30 ホテルへ移動</p> <p>16:00 ホテルイン</p>
<p>【2日目】5月16日(日)</p> <p>8:45 ホテル出発</p> <p>9:00 森の恵みを味わう講座</p> <p>12:30 昼食</p> <p>13:00 スポーツ GOMI 拾い</p> <p>15:00 ふりかえり</p> <p>15:20 遊学の森出発</p> <p>16:00 新庄駅着</p> <p>16:16 新庄駅発</p> <p>17:23 山形駅着</p>	<p>【2日目】6月6日(日)</p> <p>8:40 ホテル出発</p> <p>9:00 谷口地区公民館着 谷口歴史講座</p> <p>12:00 昼食(町内飲食店)</p> <p>13:00 谷口銀山見学とボランティア清掃</p> <p>14:30 遊学の森へ移動</p> <p>15:00 ふりかえり</p> <p>15:20 遊学の森出発</p> <p>16:00 新庄駅着</p> <p>16:16 新庄駅発</p> <p>17:23 山形駅着</p>



## 授業記録

### ○活動レポート「私はもがみで考えた！」

#### 地域教育文化学部 Aさん

私は、山形県全体のことや、地元である庄内地方のことしか調べることがなく、山形県の他市町村についてより知りたいと思い、今回のフィールドワークに参加しました。

私は、事前学習で金山町が何に関して有名なのか調べました。その結果、町全体で景観を大切にしている、それを守っていくための取り組みも行われていることがわかりました。特に、白壁と切妻屋根をもつ金山住宅を大切にされているように感じました。金山町は、ロマンチックな雰囲気のある場所として、杉の林と、黒ずんだ木組に白壁の家が自然と調和して立ち並んでいて、人工林では日本一の樹齢250年を超える杉林もあり、「金山杉」の産地として有名であることがわかりました。また、金山住宅の基準である、切妻型の黒または焦げ茶色の屋根と杉の下見張り、白壁の家という基準を満たせば、最高50万円を助成金として交付する、「金山町街並み景観条例」があり「街並み景観づくり100年運動」の進行への効果が表れていると知りました。一回目のフィールドラーニングで金山町に行った際も街並みや景観に目を向けながら活動し、実際に金山住宅や杉林を注意して見ました。

一回目のフィールドラーニングでは、一日目に、そば打ち体験、水辺の観察会、二日目に、森の恵みを味わう講座（山菜採り）、スポーツゴミ拾い大会を体験しました。

そば打ち体験では、冷涼な場所でそば粉に最適な場所でそばを育てていることや、山形県内だけでも三種類のそば粉があり、金山町では水を加えると緑っぽくなるそば粉を使っていることや、そば粉と中力粉の割合でそばの名前が変わることを学びました。また、実際にそば打ちをしてみて、水の加える加減やそばを切るのが難しいと思いましたが、自分たちで打ったそばをおいしくいただくことができました。

水辺の観察会では、金山町の環境の下で生息している動植物について教えていただいたり、池での生き物の観察をしました。ツボスミレ、チゴユリ、ハルサキヤマガラシ、エゾタンポポ、セイヨウタンポポなど、今まで知らなかった動植物の名前や人と植物の歴史や名前の由来を知ることができたり、メダカ取り大会をしたことでメダカ以外にも池に生息している生き物が多いことがわかりました。

山菜採りでは、主にアイコとミズを採取しました。他にも、ウルイ、マガリダケ、シドケなどを採りそれぞれに適した調理法を教えていただいたり、気になったことを積極的に聞くことができました。昼には、自分たちで採った山菜を、天ぷらやおひたしにして美味しくいただ

きました。

スポーツゴミ拾いでは、地域の方々とチームに分かれてごみの量を競争しながらゴミ拾いをしました。

中間学習では金山住宅や景観と金山杉との関連について調べました。金山町は、まちづくりのコンセプトとして「美しい街並み形成」を提唱し、景観を重視した街並みづくりに取り組んだ先進自治体としても知られており、他に見られない樹齢80年以上の長伐期施業という伐採体制を基本とし、より高品質な木材の生産を目指したり、「金山杉」を積極的に活用した「街並み景観づくり100年運動」や「金山町街並み景観条例」により、永続的なまちづくりに取り組んでいることがわかりました。調べてみて、金山住宅は地元産の杉材を主体とした伝統的工法で建築されており、金山住宅や景観と金山杉には深い関わりがあることがわかりました。

二回目のフィールドラーニングは中止になってしまいましたが、一回目のフィールドラーニングでの体験や、調べたことから、金山町について調べてみると金山住宅のことや金山杉についてよく出てくるので、その二つの関連性や素晴らしさをより重点的に広めていくのが大切なのではないかと考えました。

#### 引用参考文献

山形県金山町／景観にとけ込んだ暮らしづくり～杉から波及する100年計画の実践～ - 全国町村会

<https://www.zck.or.jp/site/forum/1035.html>

金山杉とロマンチックな景観——どこにでもあった、小さな町 | 芸術教養学科WEB卒業研究展 | 京都芸術大学通信教育課程

<http://g.kyoto-art.ac.jp/reports/2810/>

#### 理学部 Kさん

私はフィールドワーク共生のもがみ・金山町で主に事前学習・金山町でのフィールドラーニング・中間報告会の活動を行い、その中で金山町の特徴・要望・課題点を理解し、その経験をもとに金山町の要望に応える旅の案の作成を行った。これらの活動を通して、金山町の新たな観光形式を用いてや若者を取り込むことで町のさらなる活性化を図れないかを考えた。

まず事前学習では金山町では林業が盛んであり銘木の金山杉が有名です。年輪が細かく強度の高い建築材料となる特徴があることも分かった。これらを利用した伝統的な金山住宅を建てることを推奨し、自然と調和した街づくりで町おこしを行っていることが分かった。

次に金山町でのフィールドラーニングでは、蕎麦打ちの活動で最上地域の真室川で生産されていることや、成分表示は含有量の多い順で記載されているから蕎麦の乾麺を買う時は注意する必要用があることなど、日常で役立つ知識を学ぶことが出来た。また、ゴミ拾いを通じて地域活動が活発であることや、自然豊かであり星空が

とても綺麗に映ること、山菜の収穫ではおいしいものを食べるにはそれなりの重労働が伴うことが分かった。

中間報告会では、事前学習やフィールドランニングで得た知識をもとに金山町に若者を取り込むための旅の提案を金山町教育委員会の方に発表し、その内容について議論しました。グランピングという流行を駆使することで若者を取り込み、流行に金山町の自然を利用した活動（山菜採りや夏スキーなど）を付属させることで若者に金山町の良さを知ってもらうという旅を提案しました。この話し合いを通して一つの新規事業を行うときの運用コストや初期費用を推測することがリスク管理をする上で重要であり、その他にも設備が老朽化したときのリスクなど多様で複雑な要素を調べる必要があることが判明した。そのため、グランピングを経営している企業にインタビューなどを行うことで運用コストや初期費用を計上した。これらから、一日に4万から5万円で費用が回収できることが判明した。

さまざまな活動を通して、金山町には建築材料として優れている金山杉や多様な植物、プラネタリウムのような星空など豊かな自然という大きな強みがあることが分かりました。これらを、グランピングという形で利用することで若者を取り込み、金山町の要望に応えられるよう、費用面などを綿密に計上することでより現実的で具体的な案を金山町に提案することで、金山町の活性化に寄与したいと考えた。また、町おこしの発案の難しさを学ぶことができた良い機会であったと感じた。



### 理学部 Kさん

僕がこのフィールドランニングに参加しようと思った理由は、山形県のことをもっとよく知りたいと考えたからです。僕は、まだ、山形県に来たばかりで、山形県のことを全然知らないで、少しでも現地に赴き体験した方が、山形県について詳しくなれると思え、この授業を取りました。

まず、第一日程で、僕らは一番最初に地域の方々に「若者呼び寄せのツアー提案」という課題をもらいました。

1日目はそば打ちと、ビオトープ散策をし、そば打ちの技術や、自然について学びました。しかし、他の地域でもできるため、それだけで若者を呼び寄せることは難しいのではないかと考えました。1日目の夜、星空を見に連れて行っていただきました。そこには、360度満点の星空が広がっておりました。僕は長野県の日本一星がきれいに見えるという場所に行ったことがあります。金山の夜景はそこに負けないくらいきれいだったので、これは、若者を呼び寄せるのに使えるのではないかと考えました。二日目では、山菜採りをしました。急斜面の山を登り、山菜を採集したのですが、この体験は、今までにしたことがなく新鮮な体験となりました。第一日程が終わり、僕が考えた金山町の良いところは、やはり自然で、課題は、交通アクセスの悪さと、観光地として一つ大きく押し出していくものがないことです。この課題の解決策を僕たちは、「若者呼び寄せのツアー提案」で考えることにしました。

第二日程はコロナの影響で、zoomで「若者呼び寄せのツアー提案」の発表を地域の方々にする、ということになりました。金山の課題を解決するために、グランピングを提案することになりました。若者にはやりのグランピング施設を作り、それを押し出していくことで、町に若者を集めようという考えです。グランピングと元々金山にある、きれいな夜景や山菜採り、木工クラフトなどを組み合わせ地域と融合したグランピング施設を作り集客するという内容の発表をしました。厳しい意見や、質問などもありましたが、それも僕たちの考えを本気で考えてくれているからなのかなと感じました。発表が終わり、グランピングの人气が下がっていったときの損失など、まだまだ考え切れていない部分もありました。

この、フィールドランニングを通して、最初に言った山形県のことを知るだけでなく、観光業を営む側の意見や、行政側の意見も知ることができました。また、発表の際の資料集めや、話し合い、パワポ作成など、大変なこともありましたが、その分身についていたこともあると思うので、今後の人生に活かしていきたいです。

### 理学部 Tさん

自分らの班はコロナウィルスの影響で、二回の一泊二日のプログラムだったのが二回目はお預けになった。しかし、たった一度の現地調査でも、濃密な体験となった。初日はそば打ちとビオトープ観察をした。普段、あとは茹でるだけの状態のものしか見る事のないそばの麵を一からつくったのはかなり貴重な体験だった。そばにも複数の品種があることを知って驚いた。ビオトープ観察というのは、金山町で人工的につくった絶滅危惧種であるメダカのいる池でメダカや他の生き物を採集し観察した。そのときの散策の途中途中で聞いた森に自生する植物に関する話は興味深かった。二日目は午前中に山菜を採って食べ、午後には地域の方々に混じってゴミ集

めを競争した。山菜採りのときに食べられる食べられないの講義をされ、食べられるものを見分けられるようになるのは楽しかったし、ゴミ拾いが終わった後の分別の手伝いは要領の悪い自分にとっていい特訓になった。

上記の短いながらも多様な体験を通して最も強く思ったのは、山菜採りの環境と知識を絶やしてはならないということだ。自然環境破壊や田舎の過疎化が問題となっていて今既に危機感がある。現代、食材は多くの人がマーケットで手に入れるが、自生する食材を自ら採って食べることで、食べものの命に感謝を覚え、本当の意味でごちそうさまを言えるようになるはずだ。というか、実体験として自分は今体験の山菜採りで採って食べた山菜に対して深い有り難さを感じられた。精神論的で論理性のない話をしているのは承知しているのだが、とにかく自分は、市販の肉は無邪気な生き物を殺して得たものであるということは忘れるべきでない事実であり、そのような命の輝きを奪っている実感を多くの人は忘れていていると思っている。そうした考えのもと、山菜採り体験のような第一次産業を体験できる活動は、なるべく未来永劫残ってほしい。自分らのグループで作ったプレゼンは若者を集めるための金山町への提案であり、その提案がもし大成功だった場合は山菜採りも安泰するだろう。



### 理学部 Hさん

私がこの講義に参加した理由は3つあります。第一に金山のプログラム内容に魅力を感じたこと、第二に山形市にきているんな発見があったように、他の地域についてももっと知りたいと感じたこと、第三に昔は地域の取り組みに対して積極的だったけれど、年がたつにつれて遠くなってしまったので、再度地域との関わり方を考え、自分にできることを見つけたいと思ったことです。

実際に金山町のプログラムに参加して最初に思ったことは、金山住宅の街並みが見られる場所と体験場所が離れていたのも、事前学習で自分たちが調べて想像していたものとの大きな差を感じました。しかし、今回金山

で体験したそば打ちや山菜採りは初めてで、このプログラムに参加しなかったら自分からはやろうとしなかったことだと思うので、自分の視野の狭さを知りました。また、町の4分の3を占める圧倒的な自然を感じることができて、田舎育ちといえど最近意識が都会に向きがちだったので、気づきの多い充実した二日間でもとても良い経験になりました。

フィールドラーニング一回目ではそば打ち体験、ビオトープの観察、山菜採り、スポーツGOMI拾いを行いました。そば打ちで職人との麺の太さの違いに驚かされたり、外来種のタンポポが増えてきている問題に気づかされたり、山菜のおいしさを知ってスーパーで気にかけるようになったり、今まで関心の薄かったものも身近な事柄になって向き合い方を変えるだけで、毎日を充実させてくれるものになるのだと感じました。その活動の中で一番の課題と感じたのは、金山らしさが見えないことでした。今回の体験内容は「こもれび館」という自然とふれあうための施設で開催されている内容で、金山の自然は一つの魅力であるが、それを楽しむため、それに気づくための何かが足りないと感じました。また、事前学習で金山について直接調べたにも関わらず、誰一人として今回のプログラムに関する情報を見つけれなかったことは、大きな問題点であると思いました。

中間学習の期間に「こもれび館」のホームページを見てみると、概要は記載されているけれど、紙媒体の資料でもらった詳しい活動内容に関する記載や楽しそうな写真やコメントが欠けていて、体験した身として、とてももったいないと感じました。また、アピールという点でみると、特産品を専門的に扱っているお土産ブースが少ないのもっと押し出す必要があると感じました。グループでは解決策として「グランピング場の設置」を提案しました。若者のSNS利用を想定したネットでの見つけやすさや、拡散力の大きさ、グランピングはキャンプとは違って用具の準備や技術を必要としないので顧客をしぼることもなく、周辺のアクティビティ施設の活性化につながりやすい上に、地域の食材を使った料理を提供できるため地域の個性を伝えやすく、利点としてはかなり大きいと感じました。一番は、グランピングは自然をメインに必要とし、金山杉を有効的に押し出すことができるため、アピール力の大幅な上昇を狙えると考えました。

フィールドラーニング二回目は中止になりましたが、金山の皆さんとの関係や今回調べて蓄えた金山の魅力に関する知識はずっと残っていく物だと思うので、今度は自分で機会をつくって金山町を訪れたいと思います。また、地域活性化や町からの若者の流出問題、少子高齢化など今まで授業で表面的にしか捉えられなかったことが町の方と交流し、話し合ってみることで自分の問題として受け取れる機会をもてたことがとてもありがたいと感じました。今回の解決策には問題点もまだたく

さんあるけれど、町の皆さんの手助けとなれるような意見となれるよう今後も深めていきたいと感じました。

### 工学部 Kさん

私が金山町を選んだ理由の一つはそば打ち体験やピザづくりの活動、普段食べることのない山菜を食べることができるということでした。しかし、事前学習をしていくうちに、金山には独自の景観・景観を保護する政策があり、金山住宅や白壁・蔵など街並みを大切にしている町だということや、市街地から離れたところには豊かな自然がありキャンプを楽しむこともできると分かりました。

フィールドワークの第1日程では、そば打ち体験をしました。山形にはそば粉の種類が3種類あり、冷涼な環境がそばの生育に適していることを教わりました。二八そば、内二八そばなどのようにそば粉と中力粉の割合によって呼び方や食感が異なることも学びました。同日にビオトープの散策もしました。セイヨウタンポポとエゾタンポポの混種問題、フキの茎だと思っていた可食部分は葉柄と呼ばれる茎とは異なる部分であること、フキの葉はトイレトペーパー代わりに使われていたこと、観察用に一部に植えたものがすぐに池中に広がってしまったことから外来種の威力をも学ぶことができました。夜には星空散策で空一面天の川のようなとても綺麗な光景を目の当たりにし、ほかの人にもこの綺麗な光景を見てもらいたいと感じました。翌日は自分たちで森に入り、山菜採りをしました。今まで見たことのない山菜が実際に斜面に生えているところを見て自然の大きさを感じました。山菜は知識がなければ食べることができません。実際に自分たちで採った山菜をおひたしや天ぷらにして食べるとさらにおいしく新鮮でした。第1日程の最後はスポーツごみ拾いに参加しました。チームでごみを見つけ競うため、それにより街がきれいになります。

中間学習では山菜の栄養素について調べました。近年健康に対する意識が高まっているためです。調べてみると、山菜には食物繊維やビタミンなどの栄養素が多く含まれていることがわかりました。更には、ヨモギのようにリラックス効果を持つ山菜もあることを知りました。このことから、山菜の知識も金山のアピールポイントになるのではないかと考えました。

私は課題として、受け継いできた街並みや文化を如何に受け継ぐかを考えます。そのためにはまず観光という形で興味を持ってもらい、若者に伝えていく必要があります。

中間報告会では若年層の観光客を増やすため、グランピングを提案しました。金山には豊かな自然がありますがそこに行くための交通の便に課題があります。それでも若者を呼び込むための山形には少ししかないグランピング施設が金山にもあれば興味を引くことができま

す。従来のキャンプ場にグランピング施設としての機能を付け加えることで元ある施設を活かすこともできます。このグランピングを主軸とした旅の中でコテージやコースターに金山杉を使用したり、山菜取り体験をしたり、雨の時は郷土料理を味わってもらう機会も作ることができます。議論不足な点のご指摘も受けましたが新たな調査につながりました。

第2日程は中止になりましたが、フィールドラーニングを通して以前より視野を広げることができました。たくさん魅力があっても、発信の仕方その町の知名度が変わってきます。発信のためには熟考すべきポイントがたくさんあります。今回得た考え方を活かして今後も様々なことにチャレンジしていこうと思います。

### 工学部 Hさん

今回フィールドラーニングに参加しようと思った理由は、私は群馬出身のため山形についてほとんど知らないで、これから過ごしていく山形県について少しでも知ることができる良い機会になると感じたからです。

金山町を訪れる前の事前学習として、どのようなことを問題として考えられているのかを調べ、現地を訪れたときにそのようなことも頭に入れて体験しようと考えました。実際に調べてみると、人口が1950年の10,299人をピークに減少に転じ、2020年9月には5,283人まで減少したそうで、人口減少と少子高齢化というのが大きな問題になっているということがわかりました。

一回目のフィールドラーニングで、1日目はそば打ち体験とビオトープの散策、2日目は山菜取りと、スポーツごみ拾いの体験をさせていただきました。そばを一から作るというのは初めての経験で、作る過程でたくさんのポイントがあり、職人さんは改めてすごいなと感じました。また、今後の生活にも応用できるような知識も得ることができました。ビオトープの散策や山菜取りでは、日常生活ではなかなか味わうことのできない、豊かな自然にたくさん触れることができました。これまでは、ただの雑草とひとくくりと考えていたものでも、さまざまな種類があり、実際は食べることができるものもたくさんありました。調理法なども教えていただき、今までの私だったらあまり手に付けられないものでも、この機会に食べてみるととてもおいしくて驚きました。夜に見た星空は今まで見た中で一番きれいで、とても心に残りました。

私はこの貴重な経験で、自然についての学びがたくさんありました。また、金山町の一番の魅力として自然の豊かさというのが強く印象に残りました。

中間報告会というのが私たちの班には設けられ、金山町の方々が「若者を呼び寄せるツアー案」というものを課題として提示していただき、それについて発表しました。私が事前学習で調べた人口減少や少子高齢化の対策にもつながってくると考えました。2日間過ごす中で、金山町は自然という魅力がありますが、それをどのよう

にしたら若者に興味を持ってもらうかという点で、今人気であり、自然を生かせるグランピングという案を提案しました。若者を引き付けるには、自然だけではどうにもできないと思うし、惹きつけるものがないと訪れてもらうことはできないと考えたからです。

2回目のフィールドローニングは残念ながら中止となってしまいましたが、今回の機会に山形について少しは知ることができ、また課題を見つけ探求するという、今後の大学生活で必要なことをたくさん経験できたとても良い機会となりました。

## 工学部 Sさん

山形県は庄内地方、最上地方、村山地方、置賜地方の4つの地方に分けられます。私は、中でも、最上地方に訪問したことが数回しかありません。山形県出身として、もっと最上地方を知りたいと思い、今回のフィールドローニングに参加させていただきました。また、そば打ち体験、ピザ作り体験、金山の美味しい山菜を体験することができることから、かねやま旅情のプログラムを選択しました。

私は、金山町についての事前学習において、金山町の山菜について事前学習を行いました。金山町を含む最上地方は、県内でも有数の山菜宝庫であるということを知りました。その中でも、金山町は、全国的にも「たらの芽」「雪うるい」の名産地であり、高い評価を受けていることがわかりました。

フィールドワークの第一日程では、そば打ち体験、水辺の観察会、森の恵みを味わう講座（山菜採り）、スポーツGOMI拾いを行いました。

金山の郷土料理であるそばのそば打ち体験では、そば粉のについて学ぶことができました。具体的には、気候・温度によって必要な水の量が変化し、その水の量はそば作りにおいてとても重要になってくること、山形県内には3種類のそば粉があり地域によって違うこと、その中でも、金山町では水を加えると緑色のようになるそば粉を使用していること、そば粉と中力粉の割合でそばの弾力・味が違うことを学びました。また、自分たちで実際に体験してみて、練り方・打ち方の難しさを身をもって体験することができ、そばのおいしさを感じることができました。

水辺の観察会では、昔の山菜の利用方法について学びました。昔は、フキの葉はトイレットペーパー代わりに使用していたそうです。ゼンマイを採取するときは子孫を残すために孢子葉である雄のゼンマイは採りませんでした。次に、動植物の在来種・外来種・雑種について学びました。現在は雑種が多くを占めていることがわかりました。また、メダカ取りも行いました。メダカが息できるほど、綺麗な池が存在していることを確認できました。

山菜採りでは、主にアイコとミズの採取を行いました。

一見、道端にありそうに見えがちですが、実際は、おいしい山菜であることがわかりました。アイコとミズの他にタケノコも採取することができました。採った山菜は天ぷら、おひたしにして昼食時においしくいただきました。また、山菜採取時に、案内人の方からのレクチャー、積極的に質問を行うことによってコミュニケーションを取ることができました。

スポーツGOMI拾いでは、地域の方々との交流をすることができました。積雪量が多い地域での冬の遊び方などの会話をするのができ、金山町の人の温かさを感じ、とても楽しい時間を過ごすことができました。また、たらの木になる「たらの芽」の採取をすることができました。

中間学習では、谷口銀山について学習しました。庄内藩の財政を大きくすることに谷口銀山が大きく貢献していたということを知ることができました。『未来に伝える山形のポータルサイト』注1に掲載してある写真を見てみると、当時の状況を自分の肌で感じることができると思いました。ただし、保存会の案内がない限り安全な状況で谷口銀山の見学を行うことが難しいということがわかりました。谷口銀山に訪れた方々が安全に見学できるように、また、谷口銀山を気軽に見学できるように対策を考えていきたいと思いました。

フィールドローニングの第2日程は、残念ながら中止となってしまいましたが、第1日程で充実した時間を過ごすことができ、金山町の自然についての情報、魅力を学ぶことができました。また、協力すること、コミュニケーションの大切さについても学ぶことができました。

## 引用参考文献

注1 未来に伝える山形の宝ポータルサイト

<https://www.yamagata-takara.com/takara/recommend/taniguchiginzan>

四季奏でるまち。山形県金山町 探訪ガイド

<http://town.kaneyama.yamagata.jp/kanko/best-view/entry-506.html>

「山形んまいもの探しの旅：vol. 1 2 金山町

[http://nmai.org/perorin\\_ga\\_iku/080615/index\\_org.html](http://nmai.org/perorin_ga_iku/080615/index_org.html)」

## 農学部 Mさん

私がこのフィールドローニングに参加しようと思った理由は、山形県のことについてより詳しく知りたいと思ったからです。まだ、郷土料理等も詳しくないので、金山町でいろんなことを学びたいと思って参加しました。また、山菜採りをしたことがなくあまり食べたこともなかったので、自分の手で採り味わって見たいと思いましたが参加しました。

一日目の体験では、そば打ち体験と水辺の観察会を行

いました。そば打ち体験ではそばが有名であることやそばの材料の配合の仕方によって名称が違ったりと打つ際の注意点、行程の名前やその行程の名前の由来等を学びました。また、金山町の方々と交流した際に庄内のなまりが話題となり、話が盛り上がりより親睦が深まったのが個人的に嬉しかったです。私たちの作ったお蕎麦まるでうどんのようになってしまいましたが、先生の作ったお蕎麦は細くコシがあり、とても美味しかったです。

水辺の観察会ではメダカ釣り競争を行いました。メダカは少しの物音で逃げてしまいますが、素早く捕まえる金山町の方々はずごいなと思いました。日常生活では、なかなかできない体験をすることができました。また、金山に生息する植物や植物の外来種や在来種、雑種等の問題も学びました。普段何気なく見ているタンポポ等の植物が、より身近に感じられるようになりました。また、夜は星空を見ました。一面に広がる星空に感動を覚えました。まるでプラネタリアムのように、多くの人に見てもらいたい、知ってもらいたいと思いました。

二日目の体験では、森の恵みを味わう講座とスポーツGOMI拾いを行いました。森の恵みを味わう講座では、実際に山奥に入っていき腰にかごをつけて山菜を収穫しました。食べられる山菜と食べられない山菜の違いを学び、気をつけながら声を掛け合いながらミズやアイコという山菜を主に収穫しました。タケノコなども収穫しました。収穫後は、天ぷらやおひたしにして食べました。今まで、苦いとしか思っていなかった山菜ですが自分で収穫したこともあってか、苦みの中に旨味を感じることができました。また、採れたて出来たてのタケノコの天ぷらは格別に美味しくまた、食べたいと思いました。スーパーで山菜を見つけたら買ってみようと思いました。

スポーツゴミ拾いでは、地元の団体の方々と一緒にゴミ拾いを行いました。集めたゴミの量で順位を付けるなどして、ゴミ拾いをスポーツやゲーム感覚で行う取り組みはとてもいいなと思いました。

課題としては、金山町の魅力がインターネット上で伝わっていないことだと思いました。活動を通して、金山町には沢山の魅力があることに気がつきましたが、事前学習ではこれほど理解しておらず、体験することで気づいたことが多くありました。今後、SNS等でより分かりやすく、行きたいと思ってもらえるような情報発信が必要だと思いました。

これらの活動を通して、事前に下調べを行う重要性や、沢山のひととコミュニケーションをとることの大切さを学びました。コロナで人と関わる機会が減っていますが、人と話すことで多様な考え方や、新たな知識を得ることができたりと沢山の利点があることに気づきました。また、山菜は若い世代にあまり馴染みがないと思いますが、こういった自分で収穫するという体験を通して、次の世代へと廃れずに伝わってほしいと思いました。

最後に、私たちが快く受け入れてくださった金山町の皆さん、アドバイスをくださった先生、サポートしてくださった先輩、情報を提供してくださった企業の方々に深く感謝いたします。ありがとうございました。今回の活動を今後の大学や会社での活動に活かしていきたいと思っております。



#### 農学部 Nさん

私がこのプログラムに参加しようとした理由は、今まで東北地方へ行った経験がないため、このプログラムをきっかけに東北の町の雰囲気を感じたいと思ったこと、そば打ちや山菜採りなどの体験に魅力を感じたからです。

第1日程の前に行った事前調査では金山町には金山杉から作られた建築物、それに合わせた景観を守ろうとしている様子が見られました。

第1日程で特に印象に残ったのは山菜採りです、なぜなら、今までタケノコは太くて、そこそこ大きさのあるものと考えていましたが、今回の体験で採れたものは、アスパラガスみたいに細く、小さいものでした。後で調べたところ、正式名称はチシマザサと呼ばれており、地域によって呼び名が変わっているようです。他にも、ホテルの外で見た夜空の星々、そば打ち、遊学の森の探索など普段は味わえない経験をできたと考えています。その中で案内人の人たちから与えられた課題は、いかにして観光客を集めるかでした。

中間報告会に向けて私たちは金山町の自然を活かすためにはどうしていくかを皆で意見を出し合い、その結果、グランピングの案が出されました。既存のキャンプ施設にグランピングの施設を用意することで若者の興味を引くことができるでしょう。そして、グランピングのインテリアに金山杉を使用し、バーベキューの食材には金山発祥の漆野インゲン、米の娘ぶたを利用したりすることで金山町ならではの物も組み込むことができるので、グランピング目的で来た人たちにも金山町の魅力を伝えられ、金山町にも興味を持ち始め、この魅力をよ

り多くの人に伝えようとする流れが作れるのではないかと考えております。

第2日程は残念ながらコロナウイルスの影響により中止になってしまいましたが、その代わりに中間報告会がZOOMで行われ、案内人の人たちと意見を交換し合い、その中で新たに見つかった課題はグランピングが衰退したときの損失、そもそもグランピングの施設を設置するための費用の工面はどうかなどお金の面での問題が中心でした。金山町を訪れる人を楽しませるだけでなく、地域対しての負担の面も考慮の必要性が見えてきました。

私は今回のプログラムで、観光業で人を集めることの難しさと直面することで、今まで旅行を観光客の立場でしか考えていなかった私にとっては非常に貴重な体験をすることができたと考えています。複数の目線から案を提案する体験をこれからの人生の中で活かす機会があったら積極的に活かしていきたいと思っています。

## 最上町の人・自然・文化に触れよう

### 活 動 状 況

○実施市町村：最上町

○講 師：NPO法人山と川の学校理事長 伊豆倉勝行

○訪 問 日：令和3年5月29日(土)～30日(日)、6月26日(土)～27日(日)

○受 講 者：人文社会科学部2名、地域教育文化学部1名、理学部1名、医学部2名、工学部3名、農学部1名 以上10名

○スケジュール：

1 回 目	2 回 目
<p><b>【1日目】5月29日(土)</b></p> <p>8:20 山形駅集合</p> <p>8:42 山形駅発</p> <p>9:52～ 新庄駅着</p> <p>11:00～ 最上町中央公民館 到着 昼食</p> <p>12:30～ アスパラガスについての説明</p> <p>13:00～ アスパラガス収穫体験</p> <p>15:00 (齊藤 和広さん畑) ①</p> <p>15:00～</p> <p>16:00 旧有路家住宅「封人の家」見学② ※①と②の順番が逆になる可能性あり</p> <p>16:30～ 宿 到着</p>	<p><b>【1日目】6月26日(土)</b></p> <p>8:20 山形駅集合</p> <p>8:42 山形駅発</p> <p>9:52～ 新庄駅着</p> <p>11:00～ 最上町中央公民館 到着 昼食</p> <p>12:30～ 前森へ出発 次の日の畑作業準備など</p> <p>15:00～ 前森高原にて乗馬体験 前森高原周辺散策</p> <p>16:30～ 宿 到着</p>
<p><b>【2日目】5月30日(日)</b></p> <p>8:30～ 最上町中央公民館 着 放課後子ども教室ワイルドエドベンチャー スクールに参加 (田植え作業)</p> <p>12:00～ ワイルドエドベンチャースクール終了 終了後、昼食</p> <p>13:30～ 中央公民館 到着後 まとめ作業</p> <p>15:00～ 中央公民館 出発 新庄駅へ</p> <p>16:16 新庄駅発</p> <p>17:23 山形駅着、解散</p>	<p><b>【2日目】6月27日(日)</b></p> <p>8:30～ 最上町中央公民館 着 放課後子ども教室ワイルドエドベンチャー スクールに参加 (野菜植え&amp;トレッキング)</p> <p>15:00～ ワイルドエドベンチャースクール終了 終了後まとめ作業</p> <p>16:30～ 中央公民館 出発 新庄駅へ</p> <p>17:22 新庄駅発</p> <p>18:35 山形駅着、解散</p>



## 授業記録

### ○活動レポート「私はもがみで考えた！」

#### 人文社会科学部 Kさん

私は最上でたくさんのご経験してきました。第1回目、第2回とも普段経験できないようなことをさせていただきました。第1回、第2回を含めた活動で印象に残った活動は3つあります。

1つ目は、アスパラ農家を訪れたことです。私はアスパラガスがどのように作られているか知りませんでした。また、なぜ最上町でアスパラガスが有名なのかも知りませんでした。その理由が過去に冷害に襲われどうにかしてみんなで乗り越えようと試行錯誤した結果最上の気候ときれいな水に適していたそうです。私たちは実際アスパラガスの収穫を行いました。アスパラガスの成長速度にも驚きましたし、アスパラガスの親株がふさふさで面白かったです。アスパラガスの漬物をいただき、とてもおいしかったです。

2つ目は、封人の家を訪問したことです。恥ずかしながら、最上町について調査するまで松尾芭蕉が訪問したところがあるとは思いませんでした。実際訪問してみて日本古来の伝統がつまった素敵なおところだなと感じました。昔の建物を大切に保存しているのが良いと思いました。

3つ目はワイルドエドベンチャースクールに参加して小学生と交流したことです。第1回、第2回とも感じたのは地元の方が子供たちのために田んぼなどの体験できる場所を用意してくれて地元を盛り上げようとしているところです。田植えでは経験のある方が近くでやり方を教えてくださいました。地域内でたくさん交流が行われて地元のすばらしさを共有するのはとても素敵なことだと感じました。

この活動で感じたのは最上町はただ自然があるだけでなく自慢できるアピールポイントが山ほどあることです。しかし課題はそれが地元でしか知られていず、世界的にはあまり知られていないという所です。それを改善するため最上町のアスパラガスを用いて町おこしを行うことを提案したいです。まず多くの人にアスパラガスについて知ってもらうためブランド化を目指したいと思います。それだけでなく、ブランド名などを実際に応募してより関心を持ってもらえるようにしたいです。そうすることでひとりでもアスパラガスの魅力に気付いて好きになってもらえたらうれしいと感じます。実際に最上を訪れたことで今まで見えてこなかった魅力や課題を発見することが出来ました。また、最上町の方が地元を素敵なものにしていこうと全員で活動している点も最上町の魅力だと感じました。このフィールドワークは自分の世界を広めてくれた活動となりました。

#### 人文社会科学部 Rさん

外国人として、身をもって日本町の自然や文化を体験した。最上町は小さい町ながらも意外な魅力があり、この活動のある部分はまるで幼い頃に戻った気がしており、馴染み深いとか、懐かしいとかと感じている。第一回、第二回を含めた活動の中で、印象深い部分は3つある。

一つ目は、アスパラガスの栽培基地に見学し、かつてアスパラガスは体に良い、栄養価が高いと印象付けられ、今回身近にアスパラガスの栽培原理、栽培に適する理由、特にアスパラガス栽培のきっかけに驚いた。それは平成15年最上町が大冷害に襲われたことにより、コメ収穫量に大打撃を受け、町の人々はみんな一丸になり、県や町、専門家が集い、最上の気象特徴、現有資源（水田）の有効活用や、十分な堆肥が供給できる環境などを分析し、アスパラガスの大産地を目指すことを決めたからだ。最上町は平成16年から栽培し始め、翌年集出荷施設完成、平成30までアスパラガスの売り上げ年収5億を突破し、現在、アスパラガスは最上町の特産品となった。最上町の人々はピンチに乗り越え、農業振興のターニングポイントとなったことに非常にインパクトを与えている。今後、最上のアスパラガスはどのように盛り上がるのかも期待している。

二つ目は、マイタケ、シイタケを栽培するとき、収穫後の廃菌床を廃棄することではなく、バイオマス燃料としての利用や、畜産農家の堆肥となり、特に特産品アスパラガス畑の堆肥にも構成されており、資源の有効活用していることにも感嘆させる。

三つ目はワイルドエドベンチャー活動である。地元の大場さんは自身冒険家として有名で、次の世代の育て方にも責任を持って取り組んでいる。彼は今回も田植えや泥団子種投げを通して、AI時代には、子供に大自然を親しむべきであり、人間は自然とともに生きている考え方を持たせるように、さらに、将来的に子供は最上町の魅力を発信するようになってほしいと語っていた。今回の田植えの項目によって、20年前家族と一緒に田植えの思い出が出された。大場さんの紹介を通して、普段さりげなく食べている草餅の素材の一つはヨモギ草であることが分かった。また、山のことにたくさんの桑の木を見かけており、マルベリーも賞味し、懐かしい味が味わった。その時、家近く池畔に桑の木があり、夏の時、私以外の仲間たち泳いだり、（桑の実）マルベリーをとったり、ずっと池畔に待っている私に渡した。だが、最上町の子供はマルベリーがそれほど馴染み深いではない、初めての味だった。

4日間の活動を通して、最上ならではの田舎の素晴らしい風景を眺め、アスパラガスのうまさ、まいたけ、シイタケ栽培において、最上町々は自然資源を大切に利用し、人々は最上の魅力を発信している。自然の緑の世界

に彷徨い、グループの人との出会い、地元人の親切さや子供たちの笑顔はいつも浮かんでおり、都会の忙しさからも切り離され、心が癒されるほど魅力な最上を感じている。

この活動を通して、今後の課題として考えてみる。調べたところ、小国は天保13年から養蚕産業が始まり、養蚕業も最上の特産業であり、第4回、第8回蚕糸絹業提携確立技術・経営コンクールにおいて、最上出身の下山菊夫・貞子夫妻が農林水産大臣賞を受賞されている。養蚕の桑の葉っぱを活性化しているように、現在山の奥のマルベリーにも着目すれば、品種を改良し、将来は最上町の代表的な果物になるかもしれない。マルベリーを栽培データによると、「桑は耐寒性に非常に強く、保水性、排水性がよい、肥沃な土壌を好む」と書かれている。それはアスパラガスのように、マルベリーの栽培に適していると考えられる。まだ周知されていないかもしれないが、マルベリーは食後の血糖値の上昇を抑える働きがありデオキシノジリマイシンを多く含むことで注目されており、マルベリーは単なる果物になるのではなく、マルベリーお酒や、ジャムにも作られ、日常生活には健康な食品であると思われる。これによって、マルベリーの栽培するのは地域活性化のプロジェクトになるのではないかと考えている。

#### 参考文献

- 1、『シルクレポート 2020.10月号』  
<http://silk-teikei.jp/pdf/silk67.pdf> (2021年7月2日参照)
- 2、最上町(山形県)『最上町史 下巻』(最上町 1984)
- 3、小林隆行 『果樹の育て方』(日本文芸社 2012)

#### 地域教育文化学部 Hさん

私はフィールドラーニング共生の森もがみにて、最上町の自然と最上町の人々とのコミュニケーションについて学習した。一回目に関しては、最上町の農業を代表する特産品「アスパラガス」の収穫体験とアスパラガスについて地元農家の方からお話を伺った。最上町のアスパラガスは、東北地方の農作物に大きな影響を及ぼす「やませ」による冷害への対策作物として十数年前に導入された、比較的新しい作物である。また、最上町の子供たちと一緒にもち米の田植え体験も行った。手作業による田植えは大学生ですらかなりの体力を持っていかれるほどのかなり負担の大きい作業であった。二回目に関しては、最上町にあるまいたけ、しいたけの製造工場の見学に加えて前森高原にて乗馬体験を行った。また、最上町の子供たちといっしょに山菜をとりトレッキングを行ったりした。

もがみフィールドラーニングの活動を通して、私はアスパラガス産業に着目した。最上町を支えているアスパラガス産業であるが、生産者である農家の方々は80%が

60代の高齢者に加えて、残りの20%も40代50代の方であるため、後継ぎが必要となる。しかし、最上町の人口は約9千人と少なく、若者は都会に働きに行ってしまうため地元での跡継ぎを探すことが困難であるという。実際に最上町に行ってみて思ったことは、最上町は交通の便が著しく悪く、地元外の人がわざわざ通勤してまでアスパラガス産業に着手するとは考えにくい。そうした問題に着目して、自分は、最上町に永住する人を増やすことで、地元のアスパラガス産業に着手してくれる生産者数を確保できるのではないかと考えた。そのためには、公共の交通網を整備するのはかなり骨が折れる。そこで、最上町の国道沿いにかなり多くの空き地がみられたので、そこに住宅を増やすことで、車による移動がある程度楽に行え、なおかつアスパラガスの畑に近いアスパラガス産業に着手しやすいのではないかと考える。



#### 理学部 Hさん

私は4日間のフィールドラーニングで人や農業など、様々な面から最上町を見ることができた。

まず、1日目は、最上町でアスパラガスを栽培するようになった経緯の説明を聞いたのち、実際にアスパラガスを栽培している農家さんを訪れ、アスパラガスについて詳しい説明をしていただき、収穫体験をした。私は初めてアスパラガスに春芽と夏芽があることを知った。春芽は5月ごろに収穫し、甘く、やわらかく、色も濃いことが特徴として挙げられる。一方で夏芽は春芽とくらべ、固く、色も黄緑であるということも教えていただいた。また、最上町は冷涼な気候で、アスパラガスの栽培を始める以前は5年に一度に冷害に襲われ、米の収穫が大幅に減るということが起きていたという。そこで、平成16年から冷涼な気候に適したアスパラガスの栽培をはじめ、年々生産は増えているとう。しかし、生産者の高齢化が進み、担い手不足が懸念されているという。

2回目の1日目には、マイタケの生産量が東北一のキノコ工場を訪れた。最上町の豊富で綺麗な地下水や、澄んだ空気がキノコ栽培に適していると聞いた。また、栽

培が終わった菌床をアスパラガスの肥料にしたり、畜産における牛舎の敷き藁に再利用されたりと、町内での資源の循環の流れを知ることができた。

このほかにも封人の家に訪れたり、小学生と共に田植えやトレッキングをしたり、前森高原で乗馬体験をしたり、2回4日間のフィールドラーニングで様々な体験をし、最上町の魅力と課題を様々な形で知ることができた。

中でも私は「循環型」「環境を生かした農業」が印象に残ったことから、その代表であるアスパラガスの担い手不足について考えるに至った。

この問題の解決のためには、若い担い手を見つけ、定住してもらうことが必要だが、そのためには多くのステップを踏むことが求められる。まずは第一のステップとして、「最上町のアスパラガスを知ってもらう」ことから始める。最上町のアスパラガスを広く知ってもらうために、ブランド名を決めたり、パッケージを工夫したりすることが案として挙げられる。また、そのブランド名やパッケージを一般に募集することで、話題性を作り、SNS等で宣伝する等して、より多くの人に知ってもらうことができる。

失礼ながら、私は最上町がアスパラガスの産地であることを今回のフィールドラーニングで初めて知った。しかし今回、最上町のアスパラガスに加え、最上町の人々の優しさや自然豊かな環境を知り、私自身、とても素晴らしい土地だと感じたことから、アスパラガスをきっかけに最上町を知ってもらうことは、担い手を見つける大きな一手になると考える。

### 医学部 Iさん

計2回の最上町でのフィールドラーニングを通して私は最上町が魅力にあふれる自然豊かな地域であることを知った。そして自分の知らない地域を訪れて、その地域特有の食材や文化を体験することは新鮮でとても楽しいことなのだと改めて思い知ることができた。

第一日程の活動ではアスパラガスについての説明を受けて実際に収穫体験をし、封人の家を訪れ、ワイルドエドベンチャースクールという小学生の団体の活動に参加した。最上町は過去に大規模な冷害による米の不作に悩まされた結果、代替案としてアスパラガスの栽培を開始した。はじめは慣れないアスパラガスの栽培に農家だけでなく県の職員も協力して試行錯誤を重ねたが、最上町はもともと涼しい気候と分水嶺によるきれいな水、肥沃な土壌に恵まれていたため、生産面積と生産人数は右肩上がりに上昇していったとのことだった。見学の最後に収穫したてのアスパラガスのお漬物をいただいたが、あれほど甘くて色鮮やかなアスパラガスは過去に見たことも食べたことがなかった。ワイルドエドベンチャースクールでは地域の小学生たちと一緒に田植えと看板作りを行った。初めて顔を合わせたときは少し緊張しているように見えた小学生たちだったが、大雨の中全員

びしょ濡れで田植えをしているうちにだんだんと口数が増え、大学生を翻弄するほどの元気の良さを見せた。

第二日程の活動ではキノコの収穫、前森高原での乗馬、ワイルドエドベンチャースクールの活動を体験した。私たちが見学したキノコ農家ではマイタケとシイタケを栽培していたが、廃棄されたシイタケがアスパラガスの肥料となっていることを知り、一見関係がなさそうに見える二つの野菜が意外なところでつながっていることに驚いた。そして自宅に戻ったらさらに深く最上町の野菜作りについて調べてみようと思った。2回目のワイルドエドベンチャースクールには前回と同様にたくさんの小学生たちが参加していたが、大学生たちの顔や以前私が話した内容を覚えていてくれたことが一番嬉しかった。

沢山の体験の中でも特に印象に残ったことは農家の担い手がなかなかいないために新規就農者の育成が問題になっている、と現地を案内してくれた方がおっしゃっていたことだ。最上町にある農家の80%が60歳以上であるため、若い人たちが農家に興味を持ってくれることが最優先かつ最重要課題であるがそう簡単に解決する問題ではない。今後も根気強く向き合っていかななくてはならない問題なのだと感じ、自分なりに解決策を練ってみようと思った。

### 医学部 Oさん

・フィールドラーニングのまとめ

2回のフィールドラーニングでは主に、農業体験と小学生の自然体験教室（ワイルドエドベンチャースクール）の支援という2つの経験をしました。

農業体験では、もがみ産のアスパラガスの魅力を学び、また東北一の生産量を誇るきのこ生産工場を訪問してきのこの人工栽培の方法を教わりました。

小学生の自然教室支援は、第1回は田植え体験、第2回は高原トレッキングに同行しました。1回目は子どもとの接し方に戸惑いを感じたり、何をどう話せば良いかわからず心残りな点がありました。しかし、中間学習で子どもとの接し方について調べて臨んだ2回目では、子どもたちにとっても2回目ですごく慣れたということもあって、1日中会話を楽しむことができました。2回目の最後に、一緒にいた子どもから「毎回大学生がいてくれたら毎回自然教室に参加するのに」と言われ、とても嬉しかったです。

・課題設定

2回のフィールドラーニングを通して、私が課題として設定したのは、アスパラガスの担い手不足の解消・アスパラガスの購買促進です。ただ、このテーマはかなり広範な問題を扱っており、大学生の私が授業の一環として扱うには少々大きいテーマです。そのため、私はこの2つのテーマを、アスパラガスを知ってもらう・好きに

なってもらふ、というテーマに落とし込み、上記の課題解決の第一歩とすることにしました。

#### ・解決策の提案

アスパラガスを好きになってもらふ方法を模索するために、様々な視点から追加調査を行ないました。その中で、いくつかの商品・作物がブランド化によって知名度が上昇し、商品価値が高まったという事例を発見しました。特に、高級マンゴー「太陽のタマゴ」はブランド化が最も成功した例の一つです。

この事例を知り、アスパラガスも同様にブランド化したら上記の課題の解決策になりうるのではないかと考えました。ブランド化の大前提として、商品の品質が重要ですが、もがみのアスパラガスはその点は十分にクリアしていると考えています。必要なのは、知名度の向上です。方法としては、愛称やロゴの募集などを提案します。愛称？と思うかもしれませんが、最も有名ないちごの一つである「とちおとめ」（栃木にちなむ）のように、愛称とブランドイメージというのは意外と密接な関わりを持っているのです。

愛称やロゴなどが決まり、ブランド化への第一歩を踏み出せたら、次はブランド・アスパラガスの知名度向上が必要です。この点については、ブランド・アスパラガスを使った料理コンテストの開催を提案します。このコンテストを毎年、少しずつ規模を拡大して開催し、SNS等でも発信すれば、自ずとブランド・アスパラガスの知名度が向上します。

#### ・総括

2回のフィールドラーニングを通して、最上町の自然の豊かさや地元の方々の暮らしに触れ、多くの学びがありました。一方で、最上町の良さが外に十分に伝わっていないという残念な点も浮かび上がってきました。今回、私が提案したアスパラガス産業活性化の解決策が最上町の良さを伝えられる機会になれば良いと考えています。



#### 工学部 Yさん

私は、一泊二日の日程で二度最上町へ赴き、この町の人・自然・文化に触れてきた。

第一回の実習は五月二十九日、三十日に行われ、一日目にはアスパラガスの収穫体験と封人の家見学、分水嶺の観察を行った。このレポートでは第一回目の一日目に行われた活動にかかわる、最上町でのアスパラガスの栽培とその課題について学んだこと、そしてその課題に対して私たちが提案することについて述べる

アスパラガスの収穫体験は、事前に最上町役場の結城さんにアスパラガスの収穫高や売り上げ、最上町でアスパラガス栽培を始めた経緯について説明を受けた。

まずその経緯のあらましについて述べる。幾度となく冷害に見舞われてきた最上町は、当時の基幹産業であった稲作の収量が冷害によって不安定であることと、国内での米需要の減少から、水田を畑地に転換した。畑地ではキュウリや町花であるリンドウが栽培されたが、平成十六年に県、町、JAが集ったステージ会議にてより寒冷的な気候に強いアスパラガス栽培することが決まった。ゼロから始まったアスパラガス栽培だったが、県の農業技術普及課および農業振興課職員の協力もあって順調に進展していき、三年目の平成十九年には売上額は一億円を突破した。こうしてアスパラガス栽培は、最近では毎年四億円以上売り上げる町の一大産業となった。

次に、アスパラガス栽培の課題について述べる。結城さんが言うには、アスパラガス農家の高齢化が進んでいる

という。今アスパラガスを栽培している農家の八割が六十歳以上であり、残りの二割も大半が四、五十代となっており、このままでは近い将来最上町のアスパラガス産業は著しい担い手不足に陥ってしまう。しかし、私たちにこの問題を直接的に解決する手立てはない。そこで、私たちの班はこの問題を解決する手助けをすることを目的として、最上町のアスパラガスについて広く知ってもらうことを手助けすることを目標に、パワーポイントの制作をはじめた。

私たちが提案するのは、アスパラガスを地域ブランドとして売り出すことで最上町のアスパラガスについて知ってもらうということである。地域ブランド化したところで本当に効果があるのか疑う人もいるだろう。しかし、これには歴とした成功例がある。私はその成功例として福島県の桃であるあかつきを挙げる。前述の通りあかつきとは福島で開発された桃である。シャキシャキと小気味よい食感と豊富な果汁、強い香りと優しい甘さが特徴のこの品種は、福島県が桃の生産量で全国第二位なのにもかかわらず、品種別作付面積では堂々の一位に輝き、トップクラスのシェアを誇っている。このように地域ブランドとして売り出すことは、その地域の生産量にかかわらずある一定の知名度を生み出すのだ。また、最上町のアスパラガスには他の地域で栽培されたものと

差別化できる要素がいくつもあるとアスパラガス農家の斎藤さんは語る。最上町とは分水嶺に位置する町である。これはすなわち、最上町の水は山がろ過したばかりのとても綺麗な水だということである。このことはアスパラガスに一定の価値を与えるだろう。さらには、最上町ではアスパラガスを栽培する際肥料として町で生産し売れ残ったり商品にならなかつたりしたキノコを用いている。このような循環型の農業は昨今の潮流であるエコ意識に合致しており、消費者の購買意欲を高めるはずだ。したがって私たちはこれらの特徴を活かし、最上町のアスパラガスをブランド化して世間に知らしめること提案する。

### 工学部 0さん

2回のフィールドラーニングで、最上町の自然豊かな環境と地元の素敵な方々と関わることが出来た。

1回目の活動では、アスパラガスについての説明と収穫体験、封人の家への訪問、ワイルドアドベンチャースクールに参加し田植え作業とペンキ塗りをした。その中でも、特に印象に残ったことは、アスパラガスの説明である。アスパラガスには、春芽と夏芽があり、春芽は貯蔵根といわれる根っこにひと冬の間じっくりと蓄えられた養分を糧に生育し、夏芽はアスパラガスの木を人が作ってあげるにより日々行われる光合成で作られた養分で育成するといった違いがあること、温度が35℃を超えると成長が緩くなり20℃ぐらいがちょうど良いこと、アスパラガスを切った根本は腐りむしろ根元が病気の原因になるので、切るときはぎりぎりまで切り最後はバーナーで燃やすことなど他にもたくさんの知識を身に着けることができた。また、アスパラガスは担い手が不足しているという課題も知った。

2回目の活動では、マイタケについての説明、乗馬体験、ワイルドアドベンチャースクールに参加しトレッキングをした。特に、印象に残ったことは、マイタケの説明で、使用後の菌床を畜産農家で使ったり、アスパラ畑の堆肥の一部になったり、林間での露地栽培をして資源の循環へと繋がるといった廃菌床の有効利用をしていることを知った。

さらに、2回行ったワイルドアドベンチャースクールへの参加を通して、小学生が森のことや田んぼのこの知識や葉を使った遊び方などを想像以上に知っていたので、住んでいる地域によってその地域ならではの知識を小さい頃から身に着けることができると学んだ。また、2回目のワイルドアドベンチャースクールへの参加で1回目よりも小学生と深く関わることができ、小学生との関わり方や小学生と関わることの楽しさを学んだ。

2回の活動を通して、私は担い手不足のアスパラガスに注目した。アスパラガスの担い手不足を解決するために、まずはアスパラガスを好きになってもらい、知ってもらうことが大切だと考えた。そのためには、ブランド

化する必要があり、ブランド化するために愛称やパッケージの募集をし、その後ブランド化したアスパラガスを使って料理コンテストをし、最終的にSNSで広める。このことで、最上町のアスパラガスを今以上に知ってもらうことができると考えた。

今回の活動で最上町の魅力に触れることができたので、その魅力を、アスパラガスを通して全国の人々に知ってもらいたい。

### 工学部 Sさん

私たちは最上町を二回フィールドラーニングに行き、最上町の良いところを体験させてもらった。1回目、5月に訪れた際にはアスパラガスについての収穫体験、旧有路家住宅「封人の家」の見学、ワイルドアドベンチャースクールと題した子ども教室に参加し、地元の小学生達と田植えを行った。

また、2回目の9月に訪れた時には舞茸と椎茸の生育の説明を受け、前原高原での乗馬体験、子ども教室では前回交流した子供たちと再び会い、山菜採りやダム見学を一緒に行った。

これらの沢山の経験をやる中で、私は最上産アスパラガスについて着目した。最上産アスパラガスは「担い手不足」、「買ってくれる人が増えて欲しい」という課題がある。その課題を解決するために私は、最上産アスパラガスが今よりも高い知名度を持つべきであること、その存在を多くの人に知ってもらうことが重要だと考えた。

最後に感想となるが、今回のフィールドラーニングを通して、学んだことが2つある。1つ目は、地域の魅力や暮らしやすさは単純に人口や産業というものとは比例しないということである。最上町の人口は約8000人であり、決して多いとはいえない。しかし、アスパラガスやキノコと言ったその土地の良さを最大限生かした特産品、山菜と言った自然の恵み、何より4日間お世話になっただけだが、人々の温かさがあることがよく分かった。私の出身地は人口が比較的多い土地だが、上記のものはないため、全てが物珍しく楽しい体験だった。そのため、これらを最上町以外の人々に伝えることで、産業が衰退するのを防ぎ、次の世代まで繋げるためのお手伝いがしたいと切に思いました。2つ目は、自分の行動が全体に確実に影響するという点である。フィールドラーニングは集団行動であり、また、一つ一つの工程が予め決まっている。そのため1人遅れるだけで班のみんなを待たせるだけでなく、お世話になる最上町の人々にも迷惑をかけてしまうということだ。小中学校での修学旅行と違って先生やガイドさんがついていないのでつい時間を忘れて質問をしすぎたりしたが、もっと時間に対して気を使うべきだったと思った。地元の人に「次があるからそろそろ終わりで…」と言われた時、申し訳ない気持ちになったからだ。この教訓を日々の生活で活かしたいと考える。

そして、私が考えた最上町を盛り上げる方法は、「最上産アスパラガスブランド化する」ということである。全国の多くの特産品において、ブランド化することで売り上げを大きく向上させた例が複数ある。例えば、新しい愛称を作ることでスーパーで見かけた際の親しみやすさを向上させる、というものだ。これらの取り組みによって山形県内外の多くの人に知ってもらい、最上町に対する関心を強めてもらおうと私は考えた。

## 農学部 Sさん

### （活動報告）

フィールドラーニングを通して、2度最上町を訪れた。まず、到着してすぐ感じたのは自然の豊かさだ。四方八方どこを見渡しても自然にあふれ、その壮大な景色に圧倒された。

### 《1回目》

1日目は、アスパラガス収穫、封人の家の訪問、分水嶺の見学をした。アスパラガス農家には事前に公民館のスタッフの方に説明を受けてから行った。作り始めてからまだ日も浅いこと、以前は稲作を盛んに行っていたが、やませという冷害に悩まされ、米の需要が低下していることが栽培を始めるきっかけになったことを学んだ。初めの年には40人ほどの農家の方が集まり、現在は生産者数、生産面積は共におよそ3倍、売り上げは5億円にも上り、年々上昇しているようだ。何も知識のないゼロからのスタートで不安もある中、ここまで成長させられていることに農家の方たちの熱い思いを感じた。実際に栽培している所を見て、地面からニョキニョキと生えているスーパーで見かける姿の脇にはフサフサとした親株があることは、小さな発見だった。

2日目は、ワイルドエドベンチャースクールの子供たちと交流した。田植え、看板作り、有機農法の泥だんご作りをした。田植えは初めての経験で、何度も足が沼にはまって抜け出せなくなった。苗をまっすぐ植えることも難しかったが、田んぼで一步前に歩くだけでも四苦八苦して農作業の大変さを身をもって実感した。イノシシやクマよけに笛を吹いたり、爆竹を打ったり、田植えのコツ等子供たちからはたくさんの最上町で暮らす知恵を教えてもらった。大人から子供へ脈々と暮らし方や工夫が受け継がれていることを感じた。

### 《2回目》

シイタケ・マイタケ作りの工場を見学した。一つ驚いたのは、廃棄するシイタケやマイタケを再利用していることだ。アスパラガス畑の堆肥の一部にもなるということだった。また、「professionalきのこ山形」という団体を立ち上げ、フードロスを減らすため、商品にならないマイタケを代替肉を使えないか試す等、環境に配慮した取り組みがたくさん行われていた。ほかにも前森高原での乗馬体験や1回目と同様子供たちと関わる機会があり、一緒にトレッキングを楽しんだ。

### 《まとめ》

今回の活動を通して最上町の魅力を存分に存分に味わうことができた。豊かな自然のもと、人とのつながりを大事にしながら生活している素敵な町だと感じた。中でも、注目したのは、アスパラガスだ。今、アスパラガス農家は担い手不足と売り上げを向上させたいという二つの課題がある。既に、農業をやりたい人を呼ぶ取り組みはされているため、違う視点から考えてみた。そこで思いついたのは、まずはアスパラガスに親しみを感じてもらおうことだ。具体的には、愛称を付け、ロゴのデザインを作成してもらいブランド化する。その時に、最上町は、環境にやさしい循環型の取り組みをしていることもプラスできるとより最上町の良さをPRすることにつながると考えた。



## 里地里山の再生 I

### 活動状況

○実施市町村：舟形町

○講師：堀内ファーム会員及び地域住民

○訪問日：令和3年5月22日(土)～23日(日)、5月29日(土)～30日(日)

○受講者：人文社会科学部2名、理学部1名、医学部2名、工学部2名、農学部1名 以上8名

○スケジュール：

1回目	2回目
<p><b>【1日目】5月22日(土)</b></p> <p>8:20 山形駅集合</p> <p>8:42 山形駅発</p> <p>9:44 舟形駅着</p> <p>10:10～ 開講式(農村環境改善センター) 活動説明</p> <p>10:50～ 野菜の定植体験活動</p> <p>12:00 昼食</p> <p>13:30～ 野菜の定植体験活動</p> <p>18:00～ 夕食</p>	<p><b>【1日目】5月29日(土)</b></p> <p>8:20 山形駅集合</p> <p>8:42 山形駅発</p> <p>9:44 舟形駅着</p> <p>10:00～ 野菜の定植体験活動</p> <p>12:00～ 昼食</p> <p>13:00～ 野菜の播種体験活動</p> <p>18:00～ 夕食</p>
<p><b>【2日目】5月23日(日)</b></p> <p>7:00 起床</p> <p>7:30 朝食</p> <p>9:00～ 野菜の定植体験活動</p> <p>12:00 昼食</p> <p>13:30～ 野菜の定植体験活動</p> <p>16:50 農村環境改善センター発</p> <p>17:29 舟形駅発</p> <p>18:35 山形駅着</p>	<p><b>【2日目】5月30日(日)</b></p> <p>7:00 起床</p> <p>7:30 朝食</p> <p>8:00 体験実習館 出発</p> <p>9:00～ 野菜の定植体験活動</p> <p>12:00 昼食</p> <p>13:30～ 野菜の定植体験活動</p> <p>16:50 農村環境改善センター発</p> <p>17:29 舟形駅発</p> <p>18:35 山形駅着</p>

## 授業記録

### ○活動レポート「私はもがみで考えた！」

#### 人文社会科学部 Kさん

私は舟形町でのフィールドラーニングを通して、農業の大変さとやりがいを味わいつつ、講師の方からお話を伺い、活動前には知らなかった舟形町の魅力をいくつものことも知ることができた。

第1日程の2日間では主にきゅうりの定植活動を行った。私はこれまでに農業の経験がなかったので、腕や肩、足腰をフル稼働させる単純作業の繰り返しを体験し、農家の方のハードな仕事に驚きと尊敬の念を覚えた。体験を通して感じたのは苦勞だけではない。苗を植えているうちにだんだんきゅうりへの愛情が生まれ、ついには苗に声をかけていた。第2日程の活動から1週間が経過する現在も、自分たちが植えた苗の成長が気になり、畑へ行きたくてうずうずしている。私はこのような農業の手間と、自然に湧き出る作物への愛情を、できるならば全人類に体感してほしいと感じた。農業体験は、日々食べている食物とその生産者へのありがたみを身にしみて感じることができる食育の機会である。食育が促進されると、食品ロスの改善や、人々がより食事を楽しむことができる社会づくりに結び付くと考えられる。

第2日程では、講師の方に舟形町の気になったことをたくさん聞き、町の魅力をたくさん知り、そのうえで町の課題を自分なりに明確にすることができた。私が見つけた舟形町の課題は、舟形町へ興味を持つきっかけが町の外にほとんどないため、舟形の魅力があまり外に知られていないことである。現地講師のお話から、農家の方は労働力削減のために農業の機械化を進めたいが、最新型農業の導入を進める資金や人材がなく、現状では機械化を進めてくれたり、農地を引き継いでくれたりする若者が必要だということがわかった。しかし、舟形町に興味を持って農業や新しい事業を始める若者はなかなか現れない。そこで私は、舟形町に親近感を持ってもらうためのきっかけをつくるべきだと考えている。具体的には、少人数でも参加できる舟形町満喫体験会の実施を提案したい。舟形町では、過去に学校単位での舟形町体験活動の受け入れを行ってきたが、さらに個人単位での体験の受け入れ態勢を整えれば、自然に触れる機会を求める人々が外部から集まり、現地の魅力を感じて舟形町に思い入れを抱き、将来舟形町に移住したいと望む若者も出てくるはずだ。また、このような取り組みをすることで企業の目に留まりやすくなり、企業誘致もできるかもしれない。土日や夏休み期間、農作業がそれほど忙しくない時期だけでも舟形町体験会を開くと、将来の舟形町の発展につながるのではないだろうか。



#### 人文社会科学部 Kさん

私は今回のフィールドワークを通して舟形町の現状や問題、魅力について学ぶことができた。第一日程ではミーティングのみの参加となったが、メンバーの話や様子から農作業の大変さが垣間見えた。その中で農作業へのやりがいや貴重な経験を得られた実感、感謝とともに疲れによる集中力の欠如などが話題にあがった。大学生でさえ疲れを生じる作業を毎日欠かさず続けることは、高齢の農業従事者にとってはより辛いものであるのではないかと感じられた。第二日程では、第一日程の振り返りや事前・中間学習を通して生まれた疑問について質問をし、様々な施設の視察や講師の方からのお話によって、より深く舟形町について知ることができた。

舟形町の問題は、人手不足と資金難であると思われる。日本全国で問題になっている少子高齢化は舟形町にも大きな影響を及ぼしており、農業従事者数の減少や後継ぎ不足が問題となっている。加えて、舟形町の若い年代の人々が町外へ流出してしまっている。これは進学・就職・結婚などが主な要因として挙げられている。高校や大学がなく、就職先が少ないためである。農業のみで生計を立てることは厳しく、兼業の必要性を考える上でも就職先の少なさは問題となっている。また、労働力を補う機械の導入やその他施策も資金不足により難しいと推測される。日々の農業に追われ、新たな情報や技術を得にくい現地の人々にかかわって、現状を打開するための新たな意見や考えを生み出す人材や機械などの技術面において理解のある人材が求められている。労働力不足の解消の為に、結局は人を必要としているのである。したがって人口減少や人手不足の解消のためには機械等の設備の充実も必要だが、資金力に乏しい現在は農業や舟形町に興味関心を抱く人材を集めることに注目していきたい。

そのために必要だと思われるのは、町や町の特産物に関する情報発信の改善である。舟形町には豊かな自然環境と特産物が存在する。特にマッシュルームは国内生産



量の約二割を占めているにも関わらず、舟形は有名であると言いきることができない。それは現在、情報発信において「舟形」が強調しきれていないからだと推測される。パッケージやサイトの内容構成変更や特産物のレシピの添付、農作物のブランド化などの工夫の他、団体による農業体験会を増やすことでより舟形町を知り、魅力を感じてもらえるのではないかと思う。さらに全国各地から来ている多くの大学生にも舟形町について知ってもらう切掛けとして、学食などでの舟形町の特産物の提供を考えている。これらの取り組みなどによって舟形町に興味関心を持ち、その魅力を知る人材を増やすことをまずは大切にしていきたい。

### 理学部 Kさん

私は2回の舟形町でのフィールドラーニングを通じて、舟形町の特性や魅力、農業の現状について知ることができた。私は実家で祖父母の農業の手伝いをしたことがあるが改めてやってみると番線の巻き付けなど細かい作業から苗の運搬の繰り返しなど、体力勝負でありながら雑にならないように集中力を保つのは大変だった。

第1日程の2日間では、きゅうりの定植作業を行った。最初にやった番線の貼り付けは弛まないように引っ張りながら巻き付けるのは最初はうまくいかず苦戦したが午後は操作が安定し早く作業を進めることができた。そして私が特に苦労した作業がきゅうりの苗の運搬である。ただ苗を運搬するだけならそこまで苦労しないが一度苗を液肥に漬けてから運搬する必要がある。土壌もぬかるみ足を取られないように気を付けながら苗を持って行っては置いて新たな苗をもらいにいくことの繰り返しはかなりの重労働であり汗をかくものであった。しかし作業を終えた後の達成感は農業を実際にやってみないと味わえないものだと思えた。是非ともこの農業体験を舟形にきて多くの人に体験してほしいと思った。

第2日程では第1日程で見つけた疑問と事前学習で出てきた課題を講師の方々に質問をし、気になっていた雪室施設や野菜の直売所などの施設の見学もすることが出来た。舟形町では農業の人手不足が問題となっていて農業を営む人の高齢化が進んでいる。現地の方々は若者の労力の獲得と機械化を進めることの両方を求めている。そして舟形町が町の外に発信する魅力があまり知られていないことも大きな課題である。そこで町の外の人々が舟形町に対して興味を持ってもらうためには舟形の特産品である蕎麦やマッシュルーム、雪室野菜のブランド化を進めるべきだと考えた。実際、舟形のマッシュルームは全国のシェア率は2割を超えているが知名度は全く足りてない。そういった理由で売り上げが伸び悩んでいると考えられる。ブランド化を実現できれば機械化に必要な資金を集めることが可能になりより農作業の効率を上げることができる。農業以外にも鮎釣りの

のために全国から人が集まってくることや若あゆ温泉を求めて他県から人が来ることも判明したため、これら全てを楽しむことができる体験会を計画するのも舟形町の魅力を発信していくものになるのではないかと考える。少しでも魅力を感じてくれれば舟形町に移住する人も出てくるかもしれない。舟形町にしかないという利点を最大限に活かせることが若者の労働力獲得へのカギとなると思う。

### 医学部 Uさん

私はフィールドラーニングで舟形町に行き、農業体験をして雪室などの施設の見学をした。これによって雪室に野菜を入れると野菜が甘くなるなど具体的な農業についてのことを学ぶことができた。また、これと同じくらいもしくはより勉強になったのは当日引率をしてくださった大山さんに様々なことを聞くことができたことだ。特に印象的だったのはほかの地域でも見られるボトムアップ型の6次産業化を大山さん自身が進めていらっしやっていたことだ。私は一回目を休んだため、事前学習のためにかなり情報収集をした。農林水産省の統計データや舟形町の発展計画書を見て、現地に行った同じ班の仲間の話を聞いて、おおよそんな感じなのだろうと現地の実態の予想を立てていた。そしてそれに合わせて事前に六次産業化を促すために山大生との交流会などを設けることを提案しようと考えながら二回目に臨んだ。しかし、実際に現地に行くのと全く予想と異なりすでに六次産業化は進んでいて、自分の提案はするまでもなかったということが分かった。つまり、事前学習で調べることができなかつたのは、舟形町の人たちがどのように自発的かつ具体的に地域の課題を解決しようとしているかということだった。その反面、事前学習はフィールドラーニングで得られるものを増やし、事前学習のおかげで、現地で分析するときには多くのヒントを得ることができた。別に事前学習で調べていたことが全く無関係だったわけでもなく、同じ班の人の話も踏まえていてもやはり現地に行かないとわからないことはたくさんあるのだと感じた。このような経験から私は改めて実体験や現地を実際に見に行き現地に住む人の話を聞くことの大切さがわかった。自分は将来研究者の道に進みたいと考えているため、キャリアデザインのための示唆を多く得ることができた。今後実際に自分の取る行動としてはまず舟形町に直接関係することとして舟形町の野菜やそばを学生食堂で提供してもらうよう提案すること、自分自身のためにはまず現地・現場を意識して何かを提案するときや分析するときは机上の空論にならないよう意識することだ。

フィールドラーニングを通じて農業についての具体的な知識を得ることができたが、キャリア形成にも役立つような普遍的なことを学ぶことができてよかったと感じている。



### 医学部 0さん

私は今回このフィールドラーニングを通して初めて農業体験をした。主にキュウリの定植を行い、ニンニクの栽培やグリーンハウスでの作業の手伝いも体験することができた。しかし舟形町に訪れ、農業を単に経験するだけでなく、舟形町の抱えている問題について深く考えることができたと思う。農家の方々と4日間一緒に過ごしていくなかで、地元の方々の声や希望を聞けし、それに対して私たちが携わって問題解決に向けて考えられた。大山さんがおっしゃっていた通り、舟形町には人手も機械化も足りていない。今回第一日程で5人の学生が2日間でやっとキュウリの定植が進められたというのに、これを高齢な農家の方々が行うには時間も労力もかなり必要になると感じた。また、水やりや植え付け、グリーンハウス内での温度調節を機械で一気に行えたらいいのに、ということも何度もフィールドラーニング中に耳にした。確かに、前述したように複数の学生でも大変な作業を、ボタンを押しただけで自動でやってくれるなんて農業をする人々の憧れである。私たち学生を前にして、何か便利なものを開発してくれよ〜とか、お金さえあればな〜とおっしゃっている大山さんを見ると、本気で機械化を進めたいと思っているのだと感じた。これからの課題として、若者や機械化を進めるための前段階として、舟形をできるだけ多くの人に知ってもらい、興味を持ってもらうことが大切だと思う。そのために私たちはまず、自身で舟形の魅力を理解し、その魅力を人を舟形に引き付けるためにどう発信していくのが重要である。単に発信して情報を広げるのではなく、実際に舟形町まで足を運んでもらうためにどの層をどのような方法で引き込むかを考えなければならない。そこで私たちの班は沢山ミーティングを重ね、山形でも多くの若者の集うこの山形大学内で宣伝をしていく方向に決めた。舟形を代表するマッシュルームを使った商品やそばの提供など、大学内で可能なことを模索してできる限りの努力をする。舟形の認知度が上がり、

食材以外にも若あゆ温泉や鮎釣り、キャンプやコテージなどの舟形の魅力を多くの人に体験してもらい、その上で舟形町の抱えている問題だったり現地の方々が困っていることを理解してもらうことで町全体を盛り上げていくことができるのではないかと感じた。

### 工学部 Iさん

私は今回のフィールドワークで、農業体験や、舟形町の方の話の聞き、自分の目で実際に見ることで、舟形町の雰囲気や特色、課題を知ることができました。私は一週間目の活動に、参加することができませんでしたが、班員の話によると、集中力と体力を消耗する若い大学生でも大変な作業だったようなので高齢の方にはもっと大変なのではないかと思った。

第二日程の活動では第一日程の活動で生じた疑問を解消するために質問を行った結果、雪室貯蔵庫や産直市場などを見学することができた。雪室貯蔵庫は比較的少ない投資で野菜やコメにさらなる価値を付加することができたが、本格的に販売するには大規模な設備が必要なので、多額のコストがかかるそうだ。

農作業ではハウスでのきゅうりの誘引作業の手伝いと液肥をきゅうりに与えるためのパイプの配管作業を行った。

キュウリの誘引作業は単純な動作を繰り返す作業だったが、慣れてくると気が緩んできゅうりを傷つけてしまいそうになることがあった。キュウリの誘引作業は収穫量を多くするための工夫で、使用するテープは光分解性のものになっているなど、環境にも配慮されていた。また、講師の人はハウスの気温管理などの作業を機械化できる人がいれば一言っていた。

移動で用いたバスからの景色では、昔は農地だったと思われるが今は荒れてしまっている場所があった。もしかしたら農家の高齢化による離農者の増加の影響なのかもしれないと感じた。

フィールドワークを通して私が感じた課題は高齢化による離農者の増加と魅力はあるが、知名度がないことだ。

それに対して私たちの班は舟形町のために何が提案できるか話し合った結果、舟形町を知ってもらうきっかけとして、マッシュルームやそばなどの舟形町の特産品を厚生会館の学食などで販売してもらうという結論に至った。

舟形町には知られていないだけでマッシュルームやそばなどの農作物や美しい自然などのたくさんの魅力があるので、知ってもらうことさえできれば興味を持ってもらえるのではないかと感じた。

### 工学部 Sさん

私は舟形町でのフィールドワークを通して、農業と農村の実態について学び、舟形町の発展のために、学生として何が出来るかを考えることができた。

第一日程では主にきゅうりの定植を行った。畑の整備から始まり、マルチへの穴あけ、苗植えまで、全部で800本以上のきゅうりを定植した。食事では山菜を中心とした料理を振る舞っていただいた。第一日程の二日間ともに肉体労働が多く、単純作業でこの作業自体に楽しさを見出すことは容易なことではないだろうと感じた。しかし、苗を植え終わった際に得た達成感や、苗に対する思い入れが生まれたことに関しては、この労働の対価であるのだろう。さらに、農業には思っているよりも理解するには頭を使うということに驚かされた。液肥の配合や誘引テープの光分解、ハウス内の空調管理、畑の栄養の活かし方、一目見るだけではわからない工夫がそこにはあった。我々は農業を行ったわけではなく、ただ農作業を行っただけである。農業＝単純作業ではなく、様々な知識を使い考察し、それを実行し、農作物を販売し、収入とする。ここまでで農業なのであると、認識を改めさせられた。

第二日程では、舟形を知るということに重点を置いた活動が多く目立った。舟形の様々な主要施設を巡らせていただいた。産直まんさくから始まり、マッシュルームスタンド、若鮎温泉など、舟形の魅力を外部に伝えていくために視察を行った。その後、第一日程と同じように農作業を行った。

活動の中で、これからの舟形がどうなっていってほしいのか。現地の人達の声を聞くということを積極的に行い、これからの舟形町へ私には何が出来るかを話あった。その中でも目立ったのが労働力不足、跡継ぎ不足による農村の衰退を心配する声である。舟形町は農村であり、農業とともにある村だ。しかし、農業だけで生計をたてていくのは現実的ではないそう。会社に務めるほうが収入の安定が見込めるため、教育の過程でも実家の農家を継ぐことを奨めないといった家庭が多いそうだ。舟形町には会社勤めができる職場がほとんどなく、義務教育終了後、必然的に町を出ていくという形になる。少ない人手でも農業をするために、機会化も積極的に行いたいとは思っているそうだが、如何せん多額の資金が必要であり、その確保は容易ではない。農村である以上農業がなくなったらただの村になってしまうといった町の人言葉が強く響いた。

我々の班では、農作物をとおして舟形町の魅力を知ってもらうという結論を出した。舟形町を様々な人の目に触れさせることによって、まず認知してもらい、舟形町を何かを始めるきっかけにしてほしいと考えた。生協コンビニや厚生会館で舟形町の農作物を提供し、魅力を広めていこうという提案をしていく。(2021/6/7時点)しかし、この結論にたどり着くまでにたくさんの意見が出

てきた。私達が知った舟形の魅力を発信する方法として、ツアーの企画や、ポスター広告、メニュー考案等、様々なやり方がある。魅力があり、伸びしろもある舟形町は何かを始めるにはうってつけの町である。地域の方々とともに、学生だからできることを存分に生かして、ここ舟形町から始めることにこだわっていきたい。



### 農学部 Sさん

私は、今回のフィールドワークを通して舟形町の現状を知れた。二週間の活動から舟形町の魅力や問題を見出せた。最初の週では、キュウリの定植体験をした。番線を使って、マルチの土を掘ってから定植を行った。二週間目は、雪室施設やマッシュルームハウスや若鮎温泉などの施設巡りをした。また、現地の人に直接質問して現地の人が抱えている問題なども詳細に知れた。その結果、もっとも問題として上がったことは人工不足であることがわかった。舟形町には高校や職場が無く、若者が地元を離れていっていることが主な原因である。また、今の教育として若者は農業をしないで会社で働かなければいけないという考えに変わっていることも原因として考えられる。そもそも舟形町は農村であるため、農業をしなければなんの特徴もない過疎地域になってしまう。そのため、農業を切り離してしまうことはできない。では、どうすれば舟形で農業をする人が増えるのかが課題としてあげられる。実際、自分もキュウリの定植活動を行なって農業の大変さを感じた。若者である自分たちでも、パイプの骨組み作業がとても過酷に感じた。つまり、舟形町のほとんどを占める高齢農家の方にとっては、とても過酷な作業になっていると考えられる。また、今回の体験日はちょうど雨降りの日が多かった。農業は特に天候に左右せれやすい仕事なので、作業が安定してできないことが大きな課題だと感じた。一部ではハウス栽培を行なっていたが、ハウスの設置費や限られた面積でしか栽培できないことを考えると画期的な方法とは言えない。なので、効率を上げるためには、機械化を進めるべきだと思う。そのために、資金をもっと増やさな

ければならない。そこで、作物のブランド化が必要だと考えた。実際に舟形に行ってみて魅力は十分にあると感じた。例えば、全国で最も生産されているマッシュルームや付加価値をつけやすい雪室野菜などである。素材を見れば、他の場所と要素では劣っていないと感じた。しかし知名度が全く足りてない。そうした要因から、売上げがあまり伸びていないのだと思う。なので、今の自分たちにできることは舟形のことを多くの人に知ってもらうことだと考えた。そのために、学食で提供したり地元に戻った際に地元の人にも舟形の魅力を伝えるなどである。全国から生徒が集まる大学だからこそ情報を拡散しやすいというメリットを最大限に活かしていくことが大切だと思う。

## 子どもの自然体験活動支援講座

### 活動状況

○実施市町村：真室川町

○講師：山形県神室少年自然の家職員

○訪問日：令和3年6月12日(土)～13日(日)、7月3日(土)～4日(日)

○受講者：人文社会科学部3名、地域教育文化学部4名、医学部3名、工学部4名、農学部1名  
以上15名

○スケジュール：

1回目	2回目
<p>【1日目】6月12日(土)</p> <p>8:20 山形駅集合 8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着 10:10 新庄駅発 10:40 自然の家着 11:00 オリエンテーションで真室川町について学ぶ 12:00 昼食 13:00 自然体験活動実習 17:30 夕食 18:30 体験活動の意義についてのワークショップ 19:30 ふりかえり</p>	<p>【1日目】7月3日(土)</p> <p>8:20 山形駅集合 8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着 企画事業「わんぱく探検隊」活動支援 自然体験活動支援 12:00 昼食 自然体験活動支援 17:30 夕食 自然体験活動支援</p>
<p>【2日目】6月13日(日)</p> <p>6:00 起床、朝の集い 7:30 朝食 9:00 打合せ(指導員・ボランティア・学生) 10:00 企画事業「めんごキャンプ」活動支援 自然体験活動支援 12:00 昼食 自然体験活動支援 わかれのつどい 14:30 後片付け・FLミーティング 15:20 自然の家バス発 16:14 新庄駅発 17:23 山形駅着</p>	<p>【2日目】7月4日(日)</p> <p>6:00 起床、朝の集い 7:30 朝食 9:00 自然体験活動支援 12:00 昼食 13:00 ふりかえり(参加者) 14:00 わかれのつどい 14:30 後片付け・FLミーティング 15:20 自然の家バス発 16:14 新庄駅発 17:23 山形駅着</p>

## 授業記録

### ○活動レポート「私はもがみで考えた！」

#### 人文社会科学部 Nさん

フィールドラーニング共生の森もがみでは、子どもの自然体験支援講座のプログラムに参加した。子どもと関わりたいと思い参加したが、実際子どもの自然体験支援は自分が考えていたより大変で、今回この活動を通して学ぶことが多くあった。

1回目のフィールドラーニングの活動は「めんごキャンプ」の活動支援だった。対象が年長～小学1、2年生であったため、面倒をたくさん見なければいけないと考えていた。しかし、子どもたちは思ったより自分の意志をもって行動できていて、自分ひとりでできることが多かった。トレッキングは大学生でも疲れて大変な思いをしたが、子どもたちは元気に登っていた。生き物探しでは、私たちは全く生き物を見つけられなかったのに対し、子どもたちはたくさんの生き物を見つけていた。これらからは子どもたちのパワーを感じた。子どもが成長するためには、私たちは見守り子どもに判断をまかせることが大切だということ学んだ。私が担当した班の中に人見知りで最初の方は全く話さなかった子がいたが、最後には班のメンバーと仲良くなり積極的に行動する姿が見られた。たった1日で急激に成長する姿にとっても驚いた。日常生活から離れて初対面の子らと自然を通して協力すること、自分の判断で行動することを経験できるこの活動は短期間であることに意味があり、子どもを大きく成長させるものであると実感した。2回目のフィールドラーニングの活動は「わんぱく探検隊」の活動支援だった。対象は小学3、4年生であったため、めんごキャンプの経験も踏まえて見守ることに専念しようと考えていた。しかし、小学3、4年生となると自分でやりたい、できるという考えが強く勝手に行動する子が見られた。そのため、私たちはいけないことをしっかりと注意し、班で協調する行動を積極的に促さなければいけないと学んだ。時に強く注意するときもあったが、それは信頼関係が築けて近い間柄になっていたからだと思う。

めんごキャンプとわんぱく探検隊の2つの子どもの自然体験活動支援を経験して年齢の違いが対応の違いに大きく影響するということを学んだ。それぞれの活動支援で学ぶことが違い、子どもへの対応の仕方からだけでなく、子ども自身の言動から学ぶこともあった。1日2日で子ども同士、子どもと私たちの信頼関係を築くことができ、非日常的な様々な体験をできる子どもの自然体験活動は子どもにとって今後ものすごく力になるものだと感じた。また、間近で子どもの成長を見守ることができて、私自身本当に良い経験をした。

#### 人文社会科学部 Hさん

1回目のめんごキャンプの活動支援で感じたことは、子供たちは思っていたよりもずっと自立していて、大人はその自立を促すことが大事だということです。施設の方もおっしゃっていましたが、私たちがすべきことは、子供にあれをやれこれをやれということではなく、子供たちがしたいことをサポートする目線を持つことだと分かりました。最初は、どのように子供に接すればよいかかわからず、話しかけてみたりもしましたが、今回のキャンプの目的である子供同士のコミュニケーションを深めることを思い出し、自由に遊ばせる方向に変えました。次第に子供同士で仲良くなっていくのを見て、楽しそうな様子が直で伝わってきて嬉しくなりました。もちろん、頼ってくれた時にはアドバイスをして助けてあげることがはしましたが、こちら側から近づいていくよりも、どういう行動をしたらよいかを子供に考えさせることが重要なのだと学びました。

2回目のわんぱく探検隊では、1回目よりも班員同士で関わる時間が長く、子供一人ひとりの個性を感じました。例えば、場をまとめるのが上手な子やまわりを観察するのが好きな子、盛り上げるのが得意な子、などです。色んなタイプの子がいる中で、どのように声掛けをしようか悩みました。私たちを含め7人程度の少ないメンバーでも個性があるメンバーが集まっていて、この経験はこれからの人間関係でも、相手の個性を理解することに役立つと考えました。また、活動の最初は子供と大学生が1対1になって話すことが多かったのですが、時がたつにつれて、グループを巻き込んで全員で仲良くなるという意識が出てきたのが良かったです。特に班の中の自分の役割を理解し、特に子供の年上メンバーが次にすべき行動を伝えているのを見て、その変化に感動しました。

全体を通して、子供たちとのふれあいや自然での体験の中で、様々な感謝が生まれました。子供たちの教育という意味では、自分を育ててくれたたくさんの人への感謝。シュラフで寝たときに非日常を感じ、自分が暮らしている環境の豊かさへの感謝。そしてそれらに気づかせてくれた子供たちへの感謝です。この純粋な気持ちを忘れないようにしたいです。子供たちと一緒に私たちも色々なことを試行錯誤して、新しい学びを得ることができました。また、今回の活動で緊張感を持って子供たちを見守ったことを、今後の別な活動の際にも、周りを見て行動する力や多角的に物事を考える力として発揮していきたいです。

#### 人文社会科学部 Oさん

今回神室少年自然の家で、自然体験学習の支援を行った。支援は、年長から小学2年生までを対象とした「めんごキャンプ」と小学3、4年生を対象にした「わんぱく

探検隊」の二回で行った。どちらも大学生は子供のサポートをするという位置づけであったが、めんごキャンプは見守ることが主な役割でありわんぱく探検隊では子供たちと関わるということが主な役割であった。

二つのフィールドワークへの参加を通して考えたことは、子供が毎年自然の家のプログラムに参加することは子供の心身の成長に有効であるということだ。

まず、神室少年自然の家では様々な自然体験プログラムが存在しているが、基本的にはプログラムによって参加できる年齢が決まっている。（小学校低学年向けや小学四年生以上など）そして年齢が高くなるにつれプログラムの難易度も上がっている。つまり、プログラムが年齢にあわせて適切な難易度になるように考えられているということである。簡単すぎることや難しすぎることなく自分の年齢に適した難易度で成功体験を積むことができるのだ。成功体験を得ることは自己肯定感を高めることにつながるのだからこれは有意義なことだと考えられる。ちなみに実際に参加して分かったことだが神室少年自然の家のプログラムは確かに苦労なく達成できる物ではない、山登りやトレッキングでは大学生でも息切れすることがあるほどだった。そして子供たちに山登りの終了後に感想を聞いたが「疲れたけど楽しかった」という感想が多かった、そこから実際に達成感を感じてもらえる内容であると感じた。

次に山登りでの出来事だが、頂上付近まで登ってきたあたりで立ち止まり周りの音を聞いてみようという時間があつた。子供達が最初は何も聞こえないと言っていたが、静かにして少したつと複数の種類の鳥の鳴き声や、木の葉のそよぐ音が聞こえてきた。それが分かるとうれしそうに聞いていた。また途中で木漏れ日が差し込むあたりで山の中の色がきれいだという感想があつた。このことから自然体験学習には多くの五感に即した学びがあるということを理解した。

他にも子供同士が非常に打ち解けやすいということがあつた。めんごキャンプでもわんぱく探検隊でも初対面だった子供同士が帰り際には名前でも気軽に呼び合うほどに打ち解けていた。同じ班として長時間活動していたことと共通のワークにとともに取り組んだことが仲良くなることのできた理由だと推測できる。

以上のことにより、自然体験型学習は成功体験の得やすさ、五感を用いた学び、人との関わり、この三つの観点から子供の心身の成長に非常に有効であると考えられる。

### 地域教育文化学部 Kさん

2回のフィールドラーニングでは子どもの自然体験活動支援を行った。自然が豊富な環境で子どもたちと一緒に山登りや川遊び等の活動をした。私は子どもの活動支援をするのは初めてで、楽しみであると同時にうまく出来るか不安だった。だが、4日間という短くて濃い時

間の中で班のメンバーや子どもたちに助けてもらいながら、多くのことを学ぶことが出来た。

2回の活動を通して、私は子どもへの伝え方を学んだ。特にこのことを感じたのはフィールドラーニング2回目、2日目の早朝であった。予定されていた時間より早く起きてしまった子どもたちが活発に走り回ったりして遊んでいるのである。1日目の活動はハードだったので早く起きて遊んでいる光景は私自身すごく驚いた。だが、周りにはまだ寝ている子どもたちがいるため、静かにしていなければ周りの子どもたちを起こしてしまう。そこで、遊んでいる子どもたちに「眠りたい子もいるから約束の時間までは静かにしていようね」と注意をした。しかし、子どもたちには私の意図が完全には伝わらず、「静かに」また走り回って遊び始めてしまった。一方で、自然の家の職員の方は「時間までは自分の場所で静かにしていなさい」と注意をされていた。すると子どもたちは素直に、それぞれ自分の寝ていた場所に戻って静かに過ごすようになったのである。私はここで伝えるときの重要な点を学んだ。私はただ「静かにする」という漠然とした状態を指示したのに対し、職員の方は「行動を指定して」静かにする」という、具体的な指示をしたのだった。たしかに、私の注意の仕方では子どもたちは今後どうしていいかわからなくなったと思う。簡単な言葉を必要とする子どもとのコミュニケーションにおいて、具体的に指示することは大切なのだと感じた。

今回の活動を通して、山形の自然や子どもとの接し方などを学んだ。1回目と2回目で年齢の違う子どもを相手に活動することで、子どもの成長に合わせた活動支援のポイントや年齢ごとの特徴もより深く学ぶことが出来た。4日間の活動の中で、よりよい支援をすることが出来なかった時もあったので同じような経験を多く積んで、よりステップアップしていきたい。また、ビバークや川遊びなど、私自身初めての経験をたくさんさせていただいた。自然体験活動を通して日々生活している環境がどんなに便利だということと、自然の雄大さに改めて気づかされた。



**地域教育文化学部 Sさん**

小学生の子どもたちとふれあうことを通して、私が小学生だった頃の周りの大人たちの目にはどのように見えていたのか、どう考えていたのかということを知る良い機会になった。また活動の中で、私が思っていた以上に子どもたちとの間にギャップがあるということを感じた。そのため、実体験を得て自分の考えを改めることに繋がったのではないかと思う。

子どもたちとの間にギャップがあると感じたのは、めんごキャンプでの活動がきっかけである。山を登っている途中で「ここの道、行けそう」という子がいた。私にとってそこは道には見えそうにもない場所だったため思わず、えっ、という表情で見ってしまった。しかしその子の言ったことに、「確かに」と言う子が出てきたことにも驚いた。後に、何でそう見えたのだろうかと考えた時、私の思っている見方や感じ方よりもずっと、子どもたちが感じるもののほうが幅広く、発想が豊かなのではないかと思った。様々なものへの知識や考え方を身につけるようになると、子どもたちが抱くような新しい見方や感じ方の部分が欠けてしまうということを感じさせられた。そのため、子どもたちがあっ、と気づいたことに大人が共感してあげることが難しくなっている部分があり、そこで大人と子どもの感じ方に差が生まれてしまうのではないかと思う。

差が生まれてしまうことは、子どもたちがどのように感じたり考えたりするのかということを大人が見えなくなってしまうことに為りかねない。そのため、子どもたち自身が自由な体験から学びができるようにするためにも、子どもを見守る姿勢を持つということ強く意識していく必要があると感じた。

私が体験したことや神室の職員の方からのお話より、大人の目線で見ているものに子どもたちを引き込んで子どもたちの可能性を無くすのではなく、子どもたちに体を使って自由に体験してもらい、できたこともできなかったことも自ら学ぶことができるように、大人が考えて子どもと接することが大切だと考えた。大人が子どもに教えるということよりも、子どもたち自身で発見ができるような、そのような経験をさせてあげることのできる人になりたいと思う。

**地域教育文化学部 Oさん**

私は、山形県の真室川町で計4日間にわたって子供の自然活動体験の支援講座に参加してきた。1回目は「めんごキャンプ」に参加し、年長さんや小学1、2年生を対象とした自然体験の支援を行った。自由遊びやトレッキング、生き物探しなどを通して子どもと触れあった。2回目は「わんぱく探検隊〜夏〜」に参加し、小学3、4年生を対象とした自然体験の支援を行ってきた。4日

間で幅広い世代の子供たちと関わり支援することができ、自分の将来に生かせるような貴重な体験ができた。

今回の真室川町で自然活動を通して子供と触れあう中で、子供の成長を直に感じることができた。それは、一番最初、子供たちと初めましての段階とイベントが終わったあとでの子供たちの様子が格段に違っていたことだ。短時間、短期間で子供はこんなにも成長し変わってしまうのかと驚かされた。これは普通の学校生活や教室内での活動ではめったにみられない光景であるように感じ、自然の中での活動によって生まれたものなのではないかと考察した。そしてそこに自然体験活動の意義があるのではないかと考えた。

文部科学省が出しているデータによると、「子供の頃に自然体験や地域での活動が豊富な人は大人になってからの人間関係能力や自尊感情、意欲、関心といった資質・能力が高い傾向が見られる」といっています。今回行われたイベントに参加してくれた子供たちの多くは、初めて親元を離れての活動ということもあり、緊張している様子だった。しかし、自然の中で活動をしていくうちに、他の参加している友達や大学生に対して自然と心を開いていき、よくしゃべるようになったり、たくさん触れあったりと活発に活動するようになったのだ。そうした集団行動を経験したり、自然の中という普段とは違った環境での活動を通して子供たちは大きく成長することができ、それが大人になったときに生きるのではないかと考えた。大学生や職員さんが手厚く介入しなくても、子供たちでの交流も増え、「次はこれをやろうよ」「あっちに行こうよ」「これって何なの？」と自分たちの関心のあるままに考え行動している様子がとても魅力的だった。そういう経験を通して、他人と関わる力、自分の関心を見つけ伸ばしていくこと、いろいろなものに興味を示し探求していくこと、これら総じて「生きる力」が大きく育まれて行くように感じた。自然が豊かな真室川や最上地方、そして山形県でこうした自然体験活動の輪が広がっていくように今後、何か貢献できたらいいなと思い、考えながら生活していきたいと感じた。

**地域教育文化学部 Sさん**

この真室川町で行われたフィールドワークに私が申し込んだ理由は、子どもたちと関わるができるからだ。私は児童心理学に興味があったため、このプログラムを通じて、考えを深めることができるのではないかと思い、参加したいと感じた。

私たちは、最上地方、真室川町の「神室少年自然の家」が主催する、子どもの自然体験活動に大学生ボランティアとして参加した。二回に亘る活動では、それぞれ異なる年齢の子どもを対象としたイベントに関わった。一回目の活動では、年長から小学校低学年を対象とした「めんごキャンプ」に参加した。山でのハイキング、沼での生き物探しなど、自然を身近に感じることでできる活動



が用意されていた。二回目の活動は、小学校3，4年生を対象とするものであった。トレッキング、川遊びなどが行われた。就寝時は、芝生の上でビバーク泊をした。普段触れることのない、貴重な体験をすることができ、有意義な活動となった。

この活動を通じて学んだことは、「見守る」ことの大切さである。特にそれを感じたのは、第一回目の「めんごキャンプ」での活動の時だ。参加者の子どもたちは、それぞれ異なる地域から参加しているということもあり、始めは一人一人がバラバラに行動していた。一人でいる子に声をかけようと思ったが、職員の方から、声をかけたりするのは我慢してほしいというお話を頂いた。一人でいるのだから何か困っているに違いないと思ったが、その子は「一人で遊んでいる」だけであった。年長から小学校低学年の子どもたちは、何がしたいかなど自分の意思を自覚する力を養う年齢にあるのだと知った。そのため、無理に集団の輪の中に入れる必要はなく、本人の意思を尊重すべきだと学んだ。しかし、二回目の小学校中学年を対象とする活動では、積極的に関わり、指示などを出してほしいとあった。これは、年長の子どもには個人の意思を確立させる力を求めているのに対し、小学校中学年の子どもには集団で調和する力を養ってほしいからであると考えた。最初は、個別に指示を出さないと次の行動に移ることができなかった子どもたちが、段々と、周りを見て行動することができるようになっていった。子どもたち自身も、今回の活動を通じて、考える力を身に着けていったのだと感じた。

子どもの活動を支える大学生ボランティアとして参加したが、子どもたちから学ぶべきことが多くあった。また、支援者としての振舞い方、接し方についても多くの新しい発見を得ることができ、充実した活動にすることができた。今回学んだことを、自身の学びたい分野に応用し、さらに考えを深めていきたい。



#### 医学部 Sさん

私は今回真室川町で行われた子どもの自然体験に参

加して、子どもたちの年齢に合わせて接し方を変える必要があることを学んだ。年齢によって自然体験を通した子どもたちの成長の仕方には違いがあることに気がつき、子どもたちに合わせた適切なサポートとは何なのか考えるきっかけになった。

幼稚園の年長から小学校1，2年生の子どもたちと行っためんごキャンプでは「見守る」ということがキーワードになった。子どもたちも班で行動するというよりは個人個人で興味のあることを見つけて遊んでおり、大人が介入することで子どもたちの世界を邪魔してしまう事に気がついた。子どもたちへの関与を「見守る」だけにすることで、子どもたちの創造性や個性をのばすことに繋がるということがわかった。しかし、実際にやってみると子どもたちを「見守る」ということは凄く難しかった。一人で遊んでいる子について話しかけすぎたり、私が良いと思う方向に進むように遊びを誘導してしまったりした。この自然体験に参加してはじめて子どもたちに過保護になってしまう自分に気がつくことができた。

小学校3，4年生と行ったわんぱく探検隊では「積極的に関わる」ということを大切にしたい。めんごキャンプとは違い、子どもたち同士のつながりを子どもたち自身が作っていて驚いた。大人が積極的に関与し目的を提示してあげることで、子どもたち同士で協力し合い目標を達成しようとしていた。しかし、「積極的に関わる」ことの難しさも実感した。危ない行動を制御するために時には強く注意することが求められたのだが、他者に注意することに慣れていない私にとってはとても難しいことだった。

以上のように、子どもたちと自然体験に参加したことで、子どもたちの年齢によって関わり方を変える必要があり、どちらの関わり方にも違う難しさがある事を体感することができた。普段、子どもたちの成長を身近に感じる機会も、適切な関わり方について考える機会も無いため、今回の自然体験はとても良い経験になった。

真室川町の豊かな自然の中で行われる自然体験は子どもだけでなく一緒に参加した私たち大学生も成長させてくれるものだった。

#### 医学部 Sさん

今回のフィールドラーニングでは、子供とともに自然体験をする機会が多く様々な発見ができた。その中でも自然体験をしていく中で他の子供たちを手助けしたり、一緒に考えたりするようになるという場面が多く見られた。この発見から、子供たちは自然体験をしていくなかで協調性という面で大きな成長を遂げていると感じた。一日や二日だけの間しかともに活動していないはずなのに目に見える成長を感じたということはかなり大きいはずだ。

この成長について、特に感じたのは二回目のフィールドラーニングのビバーク野宿体験の時である。最初は自然体験学習を開催していた神室少年自然の家のスタッフがシュラフの作り方を解説し、その後実際に外で作ってみることになった。作り始めは子供たちと我々大学生が一緒になって教わった作り方を確認しながらシュラフの組み立てに取り組んでいた。そうする中で早めに組み立てが終わった子供たちと組み立てに時間がかかっていた子供たちに分かれるのだが、そこで早めに終わった子供たちがまだ組み立て途中の子供たちを大学生や自然の家のスタッフの力を借りずに手を貸す光景がみられた。この体験会に参加した子供たちは体験会が始まる前の面識がない子供が多く、最初はほとんど話すこともなかったり協力する光景も見られなかったりした。しかし、日中ともに活動するだけでシュラフ作りの助け合いのようなお互いを意識し合うような場面が多く見られた。またトレッキングの際にも、疲れてしまって途中で歩くことを断念しそうになる子供が出てきてしまうこともあったが、そのときは他の子供が最後まで頑張ろうと応援したり水分をとって一回休んでから歩き始めようと自主的に提案したりすることがあった。

これらの経験から、子供たちはかなり早く新しくできたコミュニティに溶け込むことができていたと感じた。それは共同作業という側面が大きい自然体験が大きな要因になっていると考える。自然体験会の活動一つ一つには大きなテーマや目的があるのだがそれを意識して活動していく中で子供たち同士での仲間意識が大きくなっていき互いに助け合うというような協調性が求められる行動ができるようになる。このことから、自然体験というのは子供たちに協調性や仲間意識の重要さやその発展のさせ方を体感させることのできる有効な手段だと考える。

### 医学部 Kさん

私の今回のフィールドラーニングは「子どもの自然体験支援講座」というもので、舞台は真室川の神室少年自然の家で行われました。最初に選んだきっかけとして、子供と触れ合うのが楽しそうだな、というありきたりな理由な上にこのものが私の授業自体をあまり大変ではないだろうと正直甘く見ていた部分がありました。しかし、2日間で2回、計4日間のフィールドラーニングを通して学ぶこと、考えることは大きかったと今改めて思います。

一回目の年長から小学校低学年までを対象とする「めんごキャンプ」では、活動にあたっての大学生含むスタッフの大きな指針として「見守る」ということ、「大人や大学生達と子供のつながりより子ども同士のつながりを大事にすること」を最初に所長さんからアドバイスを頂きました。活動内容としてトレッキングと生き物探し、そして自由遊びがあり、1日目は大学生が先に体験

し、2日目に子どもたちが実際に体験するというものでした。トレッキングでは思った以上に高低差があったり、生き物探しでは結構な深さがあったり、生き物が本当に見つかるかどうか不安に思ったり、自由遊びでは子どもたちがそれぞれで遊びを見つけて楽しめるのかと心配になったりして、初日のミーティングではそのような意見ばかりが飛び交っていました。しかし、実際に子どもたちが来てみると杞憂だとわかるくらいの活力でした。大学生たちもそれぞれの持場や役割をこなしていたように思えます。

二回目の小学3、4年生を対象にした「わんぱく探検隊」では「めんごキャンプ」のときはうってかわって、「子どもと積極的に関わり、時にはきつい言葉をかけなければならぬ」というお言葉をまた所長さんから頂きました。活動内容としてトレッキングとシュラフで野外泊、川遊びという以前よりも更に濃い内容でした。今回は事前に大学生も体験したわけではなかったので、特に川遊びは万が一のことがあったら怖いと思う部分もありましたが、小学3、4年生の底知れないバイタリティでそういった不安はありませんでした。以前の反省を踏まえて大学生も子どもたちを見守る目が着実にレベルアップしていました。

ここまで、良かったことを淡々と述べてきましたが、反省すべき点、改善すべき点はそれぞれの活動にありました。「めんごキャンプ」では最初に所長さんが仰った「見守る」ということが出来ず、積極的に関わってしまうことが多く、私自身ももう少し子どもたち同士のつながりの方を大事にすべきだった、あるいは、一人の時間を大切にさせるべきだったと反省しました。また、「わんぱく探検隊」では、歯止めが効かなくなった子どもたちに指示を聞かせようと促すことができませんでした。

子どもたちと触れ合うことの楽しさを味わった一方で、その難しさも肌を通して実感できました。このもがみで学んだことをこの授業で終わらせてしまうのではなく、次に生かせるように、それは自然体験の知識だったり、子ども達とのふれあいなど様々あると思います。また、真室川を発展させようと試みた今回の取り組みは今後も役に立つと思います。この経験を忘れないようにしつつ、日頃の授業や活動につなげたいです。

### 工学部 Uさん

私がこの真室川町の子どもの自然体験支援講座への参加を決めたのは、子どもと関わるのが好きであるということと、山形県出身だが山形市在住のため最上地方に訪れたことがあまりなく、真室川町についての知識がないため活動を通して様々な情報を得たいという理由からだった。1回目は、年長～小学2年生対象の「めんごキャンプ」の活動支援に参加した。私たち大学生は「見守る」をテーマにハイキングや沼での生き物探しを行った。想像していたよりも体力的にとってもハードで、子ど

もと一緒に行った活動は1日のみだったがその中でも自分自身の行動について考えさせられたことや学ぶことがたくさんあった。特に、自然体験活動は子どもの発育の面で大きな影響をもたらすということを感じた。2回目は、小学3・4年生対象の「わんぱく探検隊～夏～」の活動支援に参加した。今回は「積極的に」をテーマに1泊2日でトレッキングやビバーク泊、川遊びの活動を行った。その活動の振り返りの際に、神室少年自然の家の所長さんの「1回の活動で山も川も体験できるのはめったにない」というお言葉を聞いて、子どもの自然体験活動において活動場所である自然の家や活動をサポートする自然の家の方々の存在はとても大きいと感じた。そこで、子どもの自然体験活動における自然の家の存在について考えた。

山形県は県域の大半を山地が占めており、川も海もある自然豊かな土地である。私はこの山形県の豊かな自然の良さを最大限に引き出すことができるのが自然体験活動であり、その活動を行うためには自然の家という施設や、活動をサポートするプロフェッショナルの方々の存在が必要不可欠であると思う。山形県には県内に5つの自然の家があり、それぞれの自然の家でその場所ならではの地形を生かした自然体験活動が1年を通して行われている。私たちが活動を行った神室少年自然の家は、「自然体験、生活体験、科学体験を通して、感性を高め、いのち（自然）、学び（科学）をつなぎ、地域（生活）とつながる好青年を育てる。」ということを活動目標としており、学校などの団体での自然の家の利用貸し出しだけでなく、子育て支援としての活動などを企画・運営している。私は山形県出身だが、県内に5つも自然の家があることや自然の家主催の自然体験活動があるということを知り、実際に体験してみたい。たった数日の活動でもそれらは今後の人生において貴重な体験となり、普段の生活では得られない学びや新たな発見を通して成長することができるだろう。



## 工学部 Kさん

私がこのフィールドラーニングで学んだことは子供の成長への手助けの方法である。この講義に参加しようと思った理由は単純であった。山形県に18年間住んでいるが、最上町について知らないことばかりだったので興味があったことと子供たちと触れ合うことが好きだったので楽しそうだと思ったことが理由である。そんな軽い気持ちで参加したフィールドラーニングだったが、参加していくうちに子供たちとの接し方をしっかりと考えるようになった。

1回目は年長～小学2年生までを対象とした「めんごキャンプ」に参加した。活動内容は自由遊び・トレッキング・生き物探しだった。3つとも共通して子供たち自身で何をするか、どうすればよいかを考えるものであった。2回目は小学3・4年生を対象とした「わんぱく探検隊～夏～」に参加した。連峰トレッキング、野外で1夜を過ごすビバーク泊、川遊びなどの活動をした。

この活動を通して私の子供たちへの考え方は大きく変化した。きっかけとなったのは「めんごキャンプ」の前に神室少年自然の家の職員の方から子供たちを「見守って」ほしいと説明を受けたことである。参加以前は、子供たちをなにか手伝ってあげないという気持ちだった。しかし、職員の方からの指示通り手助けしたい気持ちを抑えていると子供たちの成長を感じることが出来た。トレッキングの際、地図を見て自分たちで進路を決めて登る活動だったので子供たちに地図を渡しても、誰も言葉を発さず、しまいには地図を見ることさえもやめてしまった。私たちが何とか声をかけ進むことはできたがこのままで見守るだけで本当に大丈夫なのかという心配しかなかった。しかし、少しずつ子供たち同士での会話が増え、下山の際にはおとなしかった女の子2人が自分から地図貸してと声を出し、ぐんぐんと道を探して進むようになった。このとき、「見守る」ということを行っていたからこそこの成長を見ることが出来たのだろうと思った。また、2回目の活動では見守りつつ前回より積極的にかかわることを意識して活動した。班で行動するように最初は呼びかけていたが、次第に自分たちで整列したり「○○君がいない」と自分たちでまとまろうとしたりしていた点で成長を感じた。

2回のフィールドラーニングを通して、子供の成長のためには「見守る」姿勢が大切だということを学んだ。私たち大人が介入して行う支援もあるが、その行為は本当に子供たちの成長につながるのかを考えるとそうではないのだと気づいた。子供たちから見ると突き放したようで酷にも思えるが、成長のためには自分で少し難しいことにチャレンジすることが必要でありそのためには「見守る」ことが大切になってくるのだと学んだ。この学びは実際に経験しないと気が付けなかったことで

あり、そのきっかけになった自然の家の職員の方に感謝したい。今後、子供と関わる際にはこの「見守る」ということを意識しながら接していきたいと思った。

### 工学部 Sさん

一泊二日、計4日間子どもたちの支援を行った。自然豊かな真室川町の神室少年自然の家で、トレッキング、生き物探し、川遊び、ビバーク泊など、日常生活ではなかなかできない体験をすることができた。また、班員や子供たちと過ごす中で、たくさんの学びを得ることができた。

私は、この2回の活動の中で、子供の成長に沢山驚かされた。例えば、1回目のトレッキングでは、登りで遅れてしまって、弱音を吐いたり、下り坂が怖くて私の手を握り締めるように取っていた子が、昼食を食べ、山を下りるときには自らずんずん進み、弱音を吐かず、疲れているにもかかわらず笑顔でいる姿にとっても驚かされた。また、2回目の川遊びの際に、前日までは私たち大学生との交流が多かった子供たちであったが、同じ学年の仲間と絆を深め、お互いに手を取り合って川遊びをしている姿を見たときは、1泊2日での心と体の成長が見えた瞬間だった。他にも、リーダーシップをとるような子ではないのかなと思っていて子が、みんなを引っ張っていたり、苦手な食べ物が出たけれど、「今日は頑張ってみよう」と言って、苦手な食べ物を克服した子がいたり、自然を介して子供たちは私たちが想像していた以上の成長を遂げていた。これは、普段の生活とは違う境遇に立たされ、自分で何とかしなければいけないという力が大きく働いたことが一番大きなポイントではあると思うが、もう一つ、初めて出会った班の仲間と協力することが子供の成長を大きく促したことだと思う。最近では外に出て遊ぶ子供が減り、協調性に欠ける子供が前よりも増えてきていると思う。しかし、自然に囲まれた中で、知らない人と過ごすことで、相手のことを認め合うと同時に、「この子ができたなら自分にもできる」といったライバル心や、一人ではできないことをみんなですべて達成するという達成感が生まれることで、協調性が育まれたと感じる。このことが、短時間で子供が大きく成長したことなのだと思うと、サポートしていた私たちもとてもやりがいがあった。

今回の活動を通して、私は子供たちと接することの難しさを改めて感じた。子供との距離感、かける言葉など、どこまで突っ込んでいいのかわからないこともたびたびあった。しかし、神室少年自然の家のスタッフの方々が私たちに丁寧に教えて下さるのはもちろんのこと、子どもたちにそんな心配を忘れさせてくれるほどたくさん笑顔にさせてもらった。また、4日間様々な学年の子供たちと過ごしたことで、子供の成長に合わせた接し方を学ぶことができ、それを実践することもできた。しかし、子供たちの成長は見届けることができたとしても、

自分自身の成長は、まだまだ甘いと思った。なぜなら正直、始めの方は自然と向き合うのが精一杯だったからだ。普段とは違う環境で、慣れていない子供の支援をすることは、やりがいがあると同時にもっとこうすればよかった、ああすればよかったという後悔は生まれてくる。だから、またこのような経験を積んで、自分自身をもっと成長できるようにしたいと思う。自然は、子どもだけでなく誰もが成長できる大きなフィールドだと思う。

### 工学部 Sさん

私は全四日間の活動に参加して、たった二日、あるいは数時間程で子供たちの成長を促し、自立に向かわせることができる「自然の家」の活動の可能性について大きな興味関心を持った。また、活動の支援を行った私たち自身にも大きな変化がみられた。

まず、一回目の活動で子供数人と共に山登りをおこなったとき、一人の男の子が班員から遅れて最後尾にいたのだが、中盤から年上の子たちと一緒に地図を読み、逆に先導するようになった。私たちはずっと見守っていたのだが、そのように積極的になったきっかけは外部（私たちが促す、他の子供たちに呼ばれる etc...）には特にみられなかったため、「自然体験活動」自体が、その子の普段隠れている積極性や勇気、判断力を引き出したのだろうと考えた。また、スタッフの私は「子供は見守り、その子自身に判断を委ねる」という支援のやり方を通して、子供への偏見（手助けしないと危ない、わからないだろう）という固定観念を消すことができたと感じた。子供たちは教えなくても大人のまねをしてコツをつかんでおり、自分たちで考えて行動できていることを私は改めて思い知った。さらに、子供にとって親しい大人というのは親や親戚、学校の先生などに限られるが、子供と大人の境目である学生がスタッフとして参加する支援は、子供に様々な影響を与えられたのではないかと考える。子供からしたらある年齢以上はみな同じ大人と思いがちだが、今回大人側の大学生が学校や遊びなどの子供側の話題を出したことで、子供たちの中にある大人の認識が変化すると思った。大人はみなしっかりしていて、注意や指摘をしていくというイメージを持つ子は多いため、私たちとの関わりを通して、意外と大人も失敗し、直すところもあり、楽しもう遊ぼうとしたりする、子供と同じように一人の個性ある人間なのだというイメージを、子供たちには持ってほしいと感じた。

「支援」は子供たちの自立・成長を促す、考え方を变えるだけでなく、支援する側の大人たちと、参加する子供たちの親の固定観念も変えるものだと思う。また、学校では一人一人に向き合う時間はなく、大人も「大人」として子供たちと接する必要があるため、子供たちの改善点はすぐに直そうとしがちだが、支援では改善点は子供自身で探させ、それを自分で直しているところを見ることができると、学校ではめったに気づくことができ

ないことに気づける機会を得る、貴重な体験が「支援」なのだと感じた。

### 農学部 Sさん

自分がこのような子供達と関わりながら自然を学んでいく体験は初めてではありませんでした。子供の時に同じような活動に参加していたり、中学生になってもジュニアリーダーという役職で子供たちを見守ったりしていました。しかし、今回のこの体験で初めて考えさせられたことがいくつかありました。

まず、1回目の「めんごキャンプ」は幼児から小学2年生を対象にした活動でした。初日に活動内容の体験を大学生、大人のみで行いましたが、急斜面を歩く山登りや、なかなか生物の見つからない生き物探しに対して正直不安な気持ちになりました。さらに「めんごキャンプ」の運営方針が、「基本は見守り、子供がやりたいことを引き出させてあげる」であったのですが、自分は「これだけ大変そうな活動ならば手伝いをしたほうがいいのか」とその時は考えていました。

しかし、2日目を通して自分の考えは変わりました。まず、自分の班の1人が準備に時間がかかってしまい、最初の活動についての話を聞いていませんでした。この後何をするのか本当に言わなくてよいのかと思いましたが、その子はすぐに周りの子供たちの様子を見て行動を起こしました。また、生き物探しでも、開始数分で自分が見つけられなかったヤゴやザリガニを見つけていて、とても驚かされるとともに、自分とどう違うのだろうかと考えさせられました。子供の目線で活動をしたと思っていたのですが、ただ視線を低くしただけでは見えないものが見えているとしか思えない発想力や行動力、そして好奇心についていけていなかったところに悩まされました。

2回目の「わんぱく探検隊」は小学3、4年生を対象にした活動でした。初日の子供達とのトレッキングでは自分の班で誰一人「帰りたい」という言葉を言わないどころか、トレッキング途中の休憩地点で、鬼ごっこで走り回るほどの体力と精神力の強さにまたも驚かされました。また、その日はシュラフをビニールシートで包んだ「ビパーク」で寝たのですが、自分は全く寝ることができず、次の日の活動に影響があったにもかかわらず、子供達は前日と同じかそれ以上の元気さで川遊びの活動を行っていました。自分がこんな元気さを昔は持っていたのが信じられず、どこになくしてしまったのかと考えさせられました。

今回の活動を通しての反省は、「子供と遊ぶときは全力で付き合えないと子供が楽しんでもくれない」と言われていたにも関わらず子供の元気さに自分が最後までついていけなかった点です。何度もこのような活動に参加することで、子供の行動の先読みをしたりしてついていけるようになりたいと考えました。また、2回目の活動

時に子供を優先にした結果、集団の迷惑になってしまった点があったので、次回からは子供と自分との距離感を考えながら状況にあった行動をとりたいと考えました。



## 大蔵村の生活と伝統の継承

### 活動状況

○実施市町村：大蔵村

○講師：地域住民の方々

○訪問日：令和3年5月29日(土)～30日(日)、6月5日(土)～6日(日)

○受講者：人文社会科学部5名、地域教育文化学部1名、医学部2名、工学部1名 以上9名

○スケジュール：

1回目	2回目
<p><b>【1日目】5月29日(土)</b></p> <p>8:20 山形駅集合                      8:42 山形駅発                      9:50 舟形駅着、送迎バスで移動                      10:10 赤松生涯学習センター着                      10:10～11:20 オリエンテーション                      11:20～12:20 昼食                      12:20～12:50 移動(肘折温泉)                      12:50～15:00 村の歴史と文化を伝え残す活動                      「肘折地区の歴史」                      15:00～16:00 伝統工芸「肘折のこけし」見学                      16:00～17:00 肘折温泉療法・入浴(いでゆ館)                      17:00～17:30 移動(赤松生涯学習センター)                      17:30～18:00 休憩                      18:00～19:00 夕食                      19:00～ 入浴・レポート記入・自由時間                      22:00 消灯</p>	<p><b>【1日目】6月5日(土)</b></p> <p>8:20 山形駅集合                      8:42 山形駅発                      9:50 舟形駅発(送迎バス)                      10:10 赤松生涯学習センター着                      10:10～11:00 オリエンテーション                      11:00～11:30 笹採り                      11:30～12:30 昼食                      12:30～14:00 食文化の保存活動(笹巻き作り)                      14:00～14:20 移動(中央公民館)                      14:20～17:00 若者グループの産業・地域活性化                      「大蔵トマト見学」                      17:00～17:30 移動(赤松生涯学習センター)                      17:30～18:00 休憩                      18:00～19:00 夕食                      19:00～ 入浴・レポート記入・自由時間                      22:00 消灯</p>
<p><b>【2日目】5月30日(日)</b></p> <p>6:30 起床                      7:30～8:30 朝食                      8:30～9:00 準備                      9:00～9:30 移動(四ヶ村地区の棚田)                      9:30～11:00 棚田田植え体験                      11:00～11:30 棚田保存活動について                      11:30～12:30 昼食                      12:30～13:00 移動(中央公民館)                      13:00～14:30 村の歴史と文化を伝え残す活動                      「清水・合海・白須賀地区」                      14:30～14:45 移動(赤松生涯学習センター)                      14:45～15:30 レポート記入                      15:50～赤松生涯学習センター発送迎バスで移動                      16:10 舟形駅着、電車で移動                      17:23 山形駅着、解散</p>	<p><b>【2日目】6月6日(日)</b></p> <p>6:30 起床                      7:30～8:30 朝食                      8:30～9:00 準備                      9:00～9:30 移動(升玉地区)                      9:30～11:30 大蔵わさび収穫・加工体験                      11:30～12:00 移動(赤松生涯学習センター)                      12:00～13:00 昼食                      13:00～14:00 大蔵村伝統芸能について                      「合海田植え踊り学習・体験」                      14:00～15:30 レポート記入                      15:50～ 赤松生涯学習センター発                      16:10 舟形駅着(送迎バス)                      17:23 山形駅着、解散</p>

## 授業記録

### ○活動レポート「私はもがみで考えた！」

#### 人文社会科学部 Sさん

私は大蔵村の特産品であるこけしとトマト栽培に興味を持ったため、それらについて考えたことを述べたいと思う。

まず、肘折こけしの継承について考える。肘折こけしは個性的な目や口、鮮やかな色彩などの特徴を持っており、最盛期には50人近くの職人がこけしを制作していた。しかし、現在肘折でこけしを作っているのは鈴木征一さんしかおらず、後継者不足という課題に直面している。また、こけし作りの技術を競うこけしコンクールなども新型コロナウイルスの影響で中止になったり、人々の生活に経済的余裕が無くなると、工芸品などへの出費が削られてしまうため、売り上げが減少したりするなどの課題も生まれている。このままではこけし職人の仕事が減少し、それに伴いこけし文化もどんどん衰退してしまうと考えた。そこで、私はこけしをより身近なものに感じられるような商品を作ることが良いのではないかと考えた。その一例として、誰もが使う消耗品のパッケージにこけしのデザインを使用するというものがある。鈴木さんがおっしゃっていた「若い女性は小さいものが好き」という言葉を参考にして20～30代の女性をターゲットとし、手鏡やあぶらとり紙などの製品にこけしの絵を使用する。このように女性にとって身近で、毎日使用する化粧品に関連付けることでこけしに対する愛着が生まれるのではないかと考えた。他にも付箋や靴下、おせんべいなどお土産としても買える消耗品にこけしのデザインを使用することで、こけしに対する興味や、認知度が上がるのではないと思う。この方法でより多くの人にこけしを伝えることで、木から作った本物のこけしを広める方法ではないものの、こけし全体の認知度を上げ、愛着をわかせることに有効だと考えた。

次に、トマト栽培の後継者を増やすための方法を模索した。その結果、大学と大蔵村がより深い連携を図るのが最適ではないかと考えた。私個人の見解として、フィールドラーニングに行くまでは将来の進路として会社員や公務員になることしか選択肢になかった。以前から自然や農業に興味はあったが、実際に自分が大学卒業後に農業に従事するという考えは全くなかった。しかし、ZOOMで「メンズ農業」の話を聞き、自治体からの金銭的補助の存在や、就農1年目からも安定した収入を得られることを知ってから、就農に興味湧き、将来の職業選択の幅が広がった。そこで、この農業の良さを知ってもらうためには大学でのフィールドラーニングの規模拡大が有効ではないかと考えた。自分の車を所有しておらず、金銭的に余裕のない大学生は交通費のかかる大蔵村には訪れにくいと考える。そこで山形大学の「共生の森

もがみ」プロジェクトで引き続き農業体験の場を提供していくことで、地域の課題を考えたり、私のように将来の職業選択に農家という候補が入ったり、趣味や旅行として大蔵村を訪れるようになっていたりするなど、大学生という若者が地域貢献について考えるきっかけとなるはずだ。また、山形大学には1年生だけでも約1600人が在籍しているが、「共生の森もがみ」に参加した人数はたった75人しかいない。そのため、コロナウイルスが収まったら、人数を増やすなど規模を拡大してより多くの若者に山形について考える機会を与えることが重要だと考える。このように大学生に実際に体験させることで地域への興味を持つ人や、移住の決心をする人が増えるのではないかと考えた。

#### 人文社会科学部 Aさん

私はこの講義を通して、大蔵村の現状や課題を知ることができた。その中で、確かにインターネット等で情報は得られるが、やはり現地に行き当事者のお話を聞いてこそわかることも多くあると改めて強く感じた。

まず、大蔵村の資源は文化や自然などとても豊かである印象を受けた。合海田植え踊りなど独自の資源もあった。また、今回説明をしていただいた方は地元愛が溢れ、自らの役割に誇りが感じられたほか、課題にひたむきに向き合っている熱心な方ばかりで驚かされた。私の地元では、そうした人はわずかしかなかったためとても羨ましく感じ、そうした人たちがいれば住民の意識も変わるだろうとも考えた。

次に、大蔵村の抱える課題としては交通の不便さ、情報の不足が挙げられる。一つ目の交通の不便さについて、特に肘折地区が実質的に行き止まりとなっていることなど、寄り道をする感覚での観光ができないことが大きい。また、地区間の距離や高低差を考えるとバスか車での移動に限られる。公共交通機関として村営バスがあり、肘折地区へは各旅館の送迎バスがあるが時間的な制約が多い。二つ目の情報不足について、棚田や肘折温泉などに特化したパンフレット、肘折温泉独自のサイトがある。しかし、多くの人はインターネットから情報を得るとみられ、改めて情報発信についてサイトの新設や改善が大切となる。

以上から、情報発信が特に必要と考え、交通手段やイベント等をわかりやすく示すことで誘客に繋がる可能性がある。大蔵村は温泉など現地で楽しめるものだけでなく、トマトや温泉の素など自宅で楽しめるものも多い。これらは多くがふるさと納税の返礼品となっているが、積極的な一般販売も提案したい。ふるさと納税はサイトも充実しており、発信力があるため商品情報も得やすい。ふるさと納税で気に入った商品の商品単体で購入したり、ふるさと納税で気に入った商品をお試しに単体購入したりといった相互作用が考えられる。他にも大蔵トマトは商品としても魅力的であるが、実際に栽培すること

もPRすると就農の契機ともなりうる。またトマト栽培を体験する旅行パックなど、より深くトマト栽培や仕事として十分に成立することを知らせたいという思いが大事である。そして大蔵村は資源が豊かなため、農泊の形で大蔵村の生活を感じられる観光が良いと考えた。

今回の活動から、一見課題はどれも同じと思っていたがその要因は地域で異なること、関係者の熱意の大切さ、他の自治体を知る面白さを知ることができた。今回の貴重な体験は多くの方の協力があってこそのものであるため、そうした方々への感謝も忘れてはならないと感じた。

### 人文社会科学部 Hさん

大蔵村に来て最初にお言葉を頂いた際、「体験すること」でしか得られないものを学んでほしいという内容を特に強調されていたのが印象に残り、常に頭の片隅に置きつつ活動した。大蔵村に出向く前に、事前学習として村のホームページで情報収集するなど概要はわかっているつもりでいた。しかしながら、生の声を聞き、実際に身体を使って触れていくなかではホームページでは得られない情報、想定していなかった感想に溢れていた。それは特産品の魅力、人や土地のぬくもりであり、少子高齢化を始めとした地域課題、地方の現実であった。これらの学びから、現地に行き、体験することの重要性を強調したいと思い、大蔵村の魅力を詰め合わせたセットの製作・販売による魅力発信を行い現地にきてもらうという案を班として提示した。

今回のフィールドラーニングの中から特に関心を持った、文化の継承と大蔵村のトマト栽培について考えたことを記載する。大蔵村の文化の継承についての学びの一つに肘折こけしがあった。職人が現在1人しかおらず、継承者がいない現状から存続が危ぶまれる状況だろうと推測した。しかしながら、地区の方の話を知ると、肘折こけしの根幹は削り方にあり、その技術を持つ木地師は多くいるためこけし職人が途絶えても肘折こけしは存続できることを知った。文化の伝承にはその文化の根幹である重要な部分があることを事柄ごとに見極めて保存方法を模索する必要があると考えた。また、大蔵村のトマト栽培を通じて、時代に合わせた作物の改革、新規就農者への支援の拡大、食育による人口流出や農業離れへの対策といった様々なアプローチで産業や地域の活性化を行っていることを知った。私は地元が仙台市中心部で、育った環境から農業にとっても疎遠であったため、農業がとても踏み込みにくい業界に感じていた。そして大蔵村で行われている新規就農者向けの制度やサポートについても勿論知らなかった。だからこそ私は、現在食育をはじめとした大蔵村内に向けて行われている活動を私の地元のような他地域とも連携し、農業から縁遠い子供たちにも広めるべきと考えた。農業への抵抗感やハードルの高さを払拭する一助となり、大蔵村自体の周知

にも繋がるのではないだろうか。

実際に体験しなければ得られないものがある。今回の活動でその魅力を知った一方で、地域の温度感を遠く離れた不特定多数に画面や紙面越しに伝える難しさも痛感した。人口や観光客の減少への対策、伝統や文化を継承は生易しいものではないと肌で感じたからこそ、体験によってその土地と人を結びつける愛着の輪を地域外にも広げることが地域に関心を持ってもらう一歩になると私は思う。



### 人文社会科学部 Sさん

私はこの大蔵村のフィールドワークを通して学んだことが3つあります。

1つ目は、実際にその場に行き、体感することの大切さです。フィールドワークの醍醐味といっても過言ではありませんが、1番にこれを感じることが出来ました。私たちは、大蔵村に行く前に大蔵村についての情報を調べてから伺いましたが、現地に着いた瞬間にネット上で調べた情報が信憑性を増しました。SNSがあるこの時代だからこそ、ウェブ上だけで情報を受け取るだけになっている人が多い中で、このような機会は非常に貴重であると思いました。

2つ目は、人の温かさです。大蔵村の方々には本当に人柄が良く、笑顔で私たちを迎えてくださいました。そこには、ただ人の性格の良さが出ているだけではなく、大蔵村への愛情が関わっていると感じます。自分のいる地域が大好きでなければ、その場所を訪問する大学生を嬉しくは思えないはずですが、私たちに説明して下さる大蔵村の方々には、自信満々に目を輝かせて歴史を語って下さり、歴史と共に愛を感じることが出来ました。大蔵村を素敵だと感じた理由はこの部分が大きいです。また、自分の地元を思い出し、もっと知りたくなりました。地元を誰もが来たいと思えるような説明をする為に、地元についての知識をより身につけようと感じました。

3つ目は、情報発信の工夫をすることが必要であるということです。大蔵村は、最寄りの駅から自家用車やバ



スで時間がかかり、気軽に訪れにくい場所だと、実際に行ったことにより実感しました。しかし、フィールドワークをするうちに来てよかったと心から何度も思いました。たどり着くことが出来れば確実に魅力の詰まった素敵な村です。人通りが多い駅に大蔵村の情報をまとめたパンフレットを置いたり、SNSで大蔵村の観光として観光ガイドを公開したり、私たちが提案できることはまだまだたくさんあると思います。高齢化が進んでいる大蔵村ですが、私たち大学生が提案したアイデアと、先人たちが積み上げそれを伝承する村の人々のアイデアを組み合わせることにより、今までになかった提案が生み出せると考えました。山形大学の学生と大蔵村の方々の共同作業で、大蔵村を活性化させていくようなプロジェクトを立ち上げ、まずは特産品の歴史を自らが学び感じます。それによって、自分たちが伝えていく中での熱量を生み出すことが出来ると思います。

まとめとして、大蔵村はもの人も全てが温かく本当に魅力的な場所です。このフィールドラーニングの講義に参加することが出来て、心の底から良かったと思います。この大蔵村の魅力をもっと多くの人に伝えるために、講義に参加出来る人数がより多くなれば良いなと感じました。ご協力してくださった大蔵村の皆様、本当にありがとうございました。機会があったら是非もう一度訪れたいと思います。その日が来るまで楽しみにしています。

#### 人文社会科学部 Yさん

今回のフィールドラーニングに参加したことで、大蔵村の温泉や歴史、食べ物、景観など多岐にわたる魅力を発見することができた。それ以前までは肘折地区が豪雪地帯である、といった程度の知識しか無かったものが実際に現地へ赴くことで様々なことを学ぶことができた。

大蔵村では人口の減少や高齢化が進み、様々な分野で後継者不足に陥っているとのことだった。また、観光客の減少も大きな問題であるとのことだ。しかし、それぞれの分野の人々がどうしたらこの実態を認知してもらえるのか、どうやったら後継者を増やせるか、どうしたら観光客が村に来てくれるのかと考え、大変積極的に活動しており村への愛にあふれているなど感じた。

しかし、現地に直接赴いたことで魅力が分かったということは、行かないと分からないような魅力も多くあるということだ。そういった魅力が村を訪れる前から伝わると、大蔵村に行きたいと思う人が増えると私は考える。そこで私は、現地に行かなくとも様々な情報を発信可能であるSNSの活用が鍵になると考え、現在大蔵村の情報を発信するアカウントがあるかどうか調査してみた。すると、肘折地区の各旅館やお土産屋さん、四ヶ村の棚田米をPRするTwitterやInstagramのアカウントが確認できた。また、それ以外にもトマト栽培農家の伊藤さんが運営しているとおっしゃっていたYouTubeアカウント、

肘折地区の方々が配信しているポッドキャストラジオなどがあることもわかった。しかし、大蔵村のホームページを一見しただけでこれらのアカウントにたどり着くというのは難しい。

そこで、こういったSNSアカウントなどをまとめたページを作製することを提案する。今回見つけることができたようなSNSアカウントなどでは大蔵村のひとつひとつの魅力について掘り下げていたり、直近の情報を手に入れることができたり、現地の人々のリアルな生活の様子をのぞくことができたりする。ホームページや観光まとめサイトを見ただけでは分からないような、本来なら現地に行かなければわからない雰囲気や空気を伝えることができるだろう。そして、一つのサイト内に多くの情報がまとまっていることで、現在は細かく検索をかけないと見つけられないような情報も見つけやすくなる。また、大蔵村の地図上に各アカウントなどを掲載する形をとって、デジタル大蔵村としてみるのはいかがだろうか。大蔵村の地理や各エリアの見所、お土産などが視覚的に理解でき、非常に便利になると考える。



#### 地域教育文化学部 Sさん

「自分の地元と似ている点が多い」というのが、私が大蔵村のフィールドワークを選んだ理由だ。特に歴史的な観光地が多くあること、充実した特産品、田植え踊りといった伝統芸能を継承していることなどだ。しかし地元の現状はよいとは言いがたい。2回のフィールドワークを通して私が大蔵村と地元の一番の違いと感じたことは、村民が自分の村の魅力だけでなく課題点も理解し、解決に努めているということだ。私の地元では町づくりは行政がするものと捉え、自分の町について知っているようで実は全く知らず、課題意識がないことが大蔵村との決定的な違いだと考えた。特にも肘折温泉は県内有数の温泉地であるが、観光客の減少や歴史資源への無関心といった課題に目を向けている。その結果、若者をターゲットとしたコワーキングスペースを設置するなど、歴史や伝統を残しつつも新たな変化を続けて

いる。これは村民が誇りをもち、歴史や文化を愛しているからこそできる、大蔵村ならではの魅力だと感じる。

しかしながら、1回目のフィールドワークを通して感じた大蔵村の課題がある。それは観光地を見つけにくいことだ。私達は講師の方に説明していただきながら、清水城址や巖神権現杉、夏山塚などといった多くの観光地を巡った。大蔵村といえば肘折温泉や四ヶ村地区の棚田米が有名だが、歴史的な観光地の多さも魅力だと感じ、村のPRに生かしたいと考えた。だが私達は説明があったからこそ楽しく巡れたが、観光となると1人では見つけにくく、わざわざ立ち止まって訪れようとは思わない。

そこで私が提案するのは駐車場の設置だ。大蔵村は新庄駅からバスで55分かかり公共交通機関は充実していない。そのため自動車が主要なアクセス手段であり、今後観光振興を進める上で自動車交通の影響を軽視してはいけなと考えた。駐車場を設置するポイントは2点ある。1つ目は駐車場を設置すると同時に看板の設置も考えられるため、場所も分かりやすく、観光地を知らない人には興味をもってもらえる。2つ目は駐車場があることでより観光地が観光地化し、「なにかあるのだろうか」と思わせることができる。それによって車から降り、大蔵村の歴史や自然を堪能していただけるのではないだろうか。清水・合海・白須賀地区には歴史的な観光名所が多くあるので、駐車場を設置することでドライブツアーも考えられる。

まだ現実性のない内容だが、大蔵村の広い土地を利用した駐車場の設置は観光地の観光地化や新規観光客の獲得に繋がり、大蔵村の歴史や自然を堪能するきっかけになると提案する。

### 医学部 Kさん

私は、大蔵村のフィールドワークに参加した。一回目の活動では、大蔵村に訪れ、現地の方々から直接大蔵村の歴史や文化、伝統工芸「肘折こけし」、肘折温泉の湯治文化について学び、棚田での田植えを体験した。二回目の活動では、オンラインで大蔵村の方々とながり、大蔵村のトマト栽培や大蔵の伝統芸能である合海田植え踊りについて学んだ。今回は、特に興味を持った、大蔵村のトマト栽培について述べる。

まず、大蔵村のトマト栽培の歴史、現状、取り組みについて学んだことを述べる。大蔵村のトマト栽培は、約30年前に始まり、当時は加工用トマトを栽培し、露地栽培が主流であった。しかし、海外からの輸入トマトの影響を受け大きく生産が伸び悩んでいた。その後、ハウス栽培による生食用の生産に転換し、安定した生産が可能となった。現在では、安定した生産量や品質の高さから、市場で「大蔵ブランド」として認められるようになった。現在、大蔵村の小学生や中学生に向けた食育活動を積極的に行い、「農業の魅力」や「やりがい」を伝え、次世

代の育成に取り組んでいる。

上記のことを学んだ上で、考えたことを二つ述べる。

一つ目は、私は、大蔵村のトマトをもっと広い地域の家庭へ届く方法を考えたい。なぜなら、実際に大蔵村のトマトを買おうとした時、どこで購入できるのかが広く伝わっていないと感じたからだ。大蔵のトマトは、主に、大手チェーン店で提供され、ふるさと納税の返礼品などとなっている。しかし、ふるさと納税は、関心のある一部の人の目にしか届かないであろう。私は具体策として、既に存在する宅配サービスを提供する企業や団体と連携し、そのツールで広範囲の地域へ発信できたらよいと考える。このことにより、大蔵村のトマトの魅力が多くの人に伝わり、大蔵村のトマトの安定的な需要がさらに増えることを望む。

二つ目は、大蔵村でのトマト栽培を始める若者を増やすことに対して、私は、他地域の若者を呼び込むよりも、大蔵村にいる若者に地元に残ってもらう方がよいのではないかと考えた。なぜなら、都会に住んでいた若者が、新しい土地で農業を始めるには、沢山の支援があってもやはり抵抗や難題があると考えた。大蔵村のトマトの安定的な需要がさらに増え、大蔵村のトマト栽培がさらに活気づき、大蔵村の若者たちが、安定した職の一つとして、大蔵村でトマト農家へとなることを選択してくれる環境が整うことが大切であると考えた。

最後に、大蔵村の方々との交流を通して、大蔵村の方々への地元愛が伝わってきた。さらに、大蔵村の方々の、大蔵村の伝統や文化を守り、継承しようとする努力、課題の解決に向けた対策を考え、積極的に活動し、大蔵村を活性化させようとする努力を感じ、感銘を受けた。今回のフィールドワークで学んだ学習姿勢を心に留め、これから、様々なことへ関心を持ち、実際に自分の目で見て、体験し、確かな知識を身につけていこうと思う。このような貴重で、学びの多い活動を支えてくださった多くの方々への感謝を忘れずにいたい。

### 医学部 Tさん

私たちは、フィールドラーニングのプログラムを通して伝統、観光産業、農業など幅広い視点から大蔵村について学び、大蔵村にはこけし、田植え祭り、肘折温泉、四ヶ村の棚田米、トマト栽培など沢山の魅力があると身をもって感じることができました。私はその中でも、トマト栽培に興味を持ち、レポートの題材に選びました。

まず、これまでの大蔵村トマト栽培の経緯を整理します。大蔵村では、30年ほど前に加工トマトの栽培が始まりましたが海外からの輸入トマトに押され生産が伸び悩んでいました。平成に入ってから加工用トマトから生食用トマトの生産へと切り替え、生産方法も露地栽培からハウス栽培に変更することで、儲からないと言われていたトマト栽培で、安定して収入を得ることができるようになったそうです。そして夏に雨が降らず、他の地

域からほとんどトマトが出荷されなかった2010年に、大蔵村では、それまでに培った栽培技術と気候風土を活かして、トマトを市場に送り出し続けたことから「大蔵ブランド」としてブランド化に成功し、大蔵村トマトの品質やおいしさが広く知られるようになりました。

今後さらに市場を拡大していくための方法として、「ポケットマルシェ」というシステムの活用を提案させていただきます。「ポケットマルシェ」とは生産者と購入者がオンライン上で直接やりとりして、商品を注文することができるサービスです。生産者と直接コミュニケーションがとれ、温かみを感じられるところや、味には影響はないが傷がついてしまった訳ありブランド品や、規格外の商品がお安く手に入るところが魅力です。販売者は、コロナの影響で飲食店が休業になって余った食材を売ることができ、購入者は自炊に必要な食材を外売せずに入ることができるため、現在では、コロナ禍前に比べ、利用者数が5倍近くに増加している、ホットな販売方法でもあります。

この「ポケットマルシェ」というサービスで、規格外もしくはキズがついてしまった大蔵村トマトを販売してはどうでしょうか。サービス利用者は「高品質のものを手に入れたい」という考えをもっている人が多く、ブランド化に成功している大蔵村のトマトはこのサービスに向いています。また、ポケットマルシェで商品を購入した人の約8割が、もう一度同じ商品を買っていることから、リピーターを獲得しやすいといえますし、日常的に買い物に行くスーパーでも親近感を持って、大蔵村のトマトを手取る可能性が高まると考えられます。このように、破棄していた野菜に値段をつけて売り、無駄を減らすことができ、継続的な大蔵村トマトの購入者も獲得できるため、さらなる市場の拡大につながると考え、「ポケットマルシェ」の利用を提案します。

#### 参考文献

【産直SNS「ポケットマルシェ」の2020年利用動向を発表】コロナ下で買い物に変化、農家・漁師から直接購入が利用数4.5倍増

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000031.000046526.html> (2021/07/11参照)

「ポケットマルシェ」<https://poke-m.com/> (2021/07/11参照)

#### 工学部 Kさん

私は大蔵村でのフィールドラーニングを通して様々なことを学び、体験させていただきました。私たちを暖かく受け入れてくれてありがとうございました。今回の活動を通して村の現状を学び、様々なことを考えるきっかけとなりました。

大蔵村の歴史や文化、魅力などについて多くのお話を聞くことができました。私は山形出身でしたが講師の先生方がお話になった歴史や文化、魅力について知らな

いことがたくさんありました。その中で一番興味深いと思ったお話は、肘折地区の歴史についてです。約一万年前にカルデラ噴火が起きた後、火山湖の水が抜けて今の地形になりました。肘折の開湯伝説では西暦800年くらいに見つけ今に至りました。このお話を聞き非常に長い歴史があるのだと実感しました。その他の活動でも多くのお話を聞く中で大蔵村には魅力がたくさんあると実感しました。

私が大蔵村で考えたことは、四ヶ村地区の棚田についてです。四ヶ村地区では後継者不足、米自体の価値が低いことなどを課題に挙げ、トマト栽培では技術の伝え残すこと、高齢化などを課題に挙げていました。その中で私が特に考えたことは、四ヶ村地区の棚田についてです。講師の方の話によると、中山間地域には国から補助金が出るが誰かが米を買ってくれないと棚田を守るのは難しいと話していました。そのため、消費者を増やすために四ヶ村棚田米を宣伝すれば良いのではないかと考えました。しかし、山形県はブランド米のつや姫や雪若丸といった一部だけのブランド米しか宣伝しておらず四ヶ村棚田米が隠れしまっているという苦悩を抱えていました。実際の取り組みとして首都圏に出向き、消費者に対して棚田米を直接販売など行っています。そこで私が考えたのは海外進出です。「コメ海外市場拡大戦略プロジェクト」というプロジェクトを農林水産省が行っています。また、日本食が海外に広がっているため海外での需要はこれからも上昇すると考えられます。国内だけでなく国外での宣伝、販売を行うことで消費者を増やすことができると考えました。

この活動を通して様々な歴史や文化、村の魅力、地域の課題について様々なことを教えていただきました。現地での人の言葉の重さも実感し、深刻な問題であることを知ることができました。今回のフィールドラーニングで学んだこと感じたことをこれからの大学生活に活かしていきます。大蔵村の皆さん3日間ありがとうございました。



## 人と自然と地域をつなぐ環境保全活動

### 活動状況

○実施市町村：鮭川村

○講師：鮭川村自然保護委員会会長 高橋 満  
NPO 法人ネイチャーアカデミーもがみ代表理事 矢口末吉

○訪問日：令和3年5月15日(土)～16日(日)、6月19日(土)～20日(日)

○受講者：医学部2名、農学部3名 以上5名

○スケジュール：

1回目	2回目
<p><b>【1日目】5月15日(土)</b></p> <p>8:20 山形駅集合</p> <p>8:42 山形駅発</p> <p>9:52 新庄駅着</p> <p>11:00 開講式 ギフチョウ属生息環境調査</p> <p>12:30 昼食</p> <p>13:30 ギフチョウ属生息環境調査</p> <p>17:30 宿泊場所着</p>	<p><b>【1日目】6月19日(土)</b></p> <p>8:20 山形駅集合</p> <p>8:42 山形駅発</p> <p>9:52 新庄駅着</p> <p>11:00 自然環境保全活動・調査 ・保全池観察木道整備準備</p> <p>12:00 昼食</p> <p>13:00 自然環境保全活動・調査 活動のまとめ(30分程度)</p> <p>17:30 宿泊場所着</p>
<p><b>【2日目】5月16日(日)</b></p> <p>8:30 宿泊場所出発</p> <p>9:00 自然環境調査 ・湿原観察しながら水棲昆虫調査</p> <p>12:00 昼食</p> <p>13:00 自然環境調査 活動のまとめ(30分程度)</p> <p>15:00 米地区公民館発</p> <p>16:14 新庄駅発</p> <p>17:23 山形駅着、解散</p>	<p><b>【2日目】6月20日(日)</b></p> <p>8:00 宿泊場所出発</p> <p>8:30 自然環境保全活動 ・湿原整備(葎刈り等) ・観察木道整備</p> <p>12:00 昼食</p> <p>13:00 自然環境保全活動 感想発表(30分程度)</p> <p>15:00 米地区公民館発</p> <p>16:14 新庄駅発</p> <p>17:23 山形駅着、解散</p>

## 授業記録

### ○活動レポート「私はもがみで考えた！」

#### 医学部 Tさん

1回目のフィールドラーニングでは、現地に足を運ぶことはできませんでしたが、オンラインで鮭川村の方々から「環境保全の取り組み」について説明していただき、その後図書館で調べ学習を行いました。水生昆虫の再生についてというテーマで、色々なことを想像しながら調べ、最終的にはパワーポイントで自分たちの見解を発表しました。鮭川村を訪れる前に、保全活動の具体的な内容や生物についての知識を深めることができました。また、保全活動には人力・時間・資金がかかりとても大変なことを学びました。

2回目のフィールドラーニングでは、鮭川村を実際に訪れました。主な活動内容としては、水生生物の調査・米湿原での動植物観察と葦刈り・米大平山の登山・小杉の大杉の見学です。水生生物の調査は、米公民館の近くの池で行いました。水生昆虫やカエル、イモリなど多くの生物を野生で観察することができました。想像よりも、多くの生物が生息していて驚きました。米湿原での葦刈りの際には、なぜスパイクのついている長靴を履いてはいけないのかが分かりました。それは、湿原の中に入る際に植物を傷つけてしまうからでした。また、獣道になるのを防ぐため、一度通った場所を往復してはいけないなど色々なことを学びました。植物はノハナショウブや、トキノソウを観察できました。2日目には、米大平山に登りました。時期が終わってしまったのでギフチョウは見られませんが、食草であるカンアオイの生息地を確認しました。植物もたくさん生息していたので、次は植物の種類を学んで行きたいと感じました。頂上からは、鮭川を見渡すことができました。最後に小杉の大杉を見に行ったのですが、何本かの木が合わさってできているのかと思いきや、あの大きな杉の木は1本でできていることを知りました。

このフィールドラーニングを終えての自分の課題は、環境保全の取り組みをもっと知り、自分にできることを実践することです。そのために、これからは意識的に環境保全の情報をニュースなどで得ようと思いました。加えて、自然が残っている湿原や里山などに積極的に足を運び、今回学んだことの理解を深めたいと感じました。また、直接鮭川村の環境とは関係ありませんが保全活動を通して、環境に優しい製品を選択しようと思いました。地域への提案としては、大学生で環境保全に興味を持っている人は多いと思うので、今回のようなプログラムをこれからも続けていただきたいと感じました。そうすることで、環境保全の大切さや大変さを感じ、多くのことを学び、保全活動を通して役にたてるのではないかと考えました。



#### 医学部 Tさん

第一回フィールドラーニングでは、新型コロナウイルスの影響で鮭川村を訪れることができなかつたため、図書館での調べ学習となった。調べ学習では、ゲンゴロウ、コオイムシ、タガメなどの水生昆虫の生態を調べ、これらが鮭川にあまり見られない理由について考察した。直接現地に赴けなかつたのは残念だったが、班員たちと話し合いながらさまざまな可能性を検討して自分たちなりに解決方法を模索し、良い経験ができた。調べていく中で、水生昆虫の生息できる環境の貴重さ、そのような環境を整えることの難しさを学んだ。第二回フィールドラーニングの前に理解を深めることができ、有意義な時間を過ごせたと考えている。

第二回フィールドラーニングでは、鮭川村にて貯水池の水生生物の調査、米湿原での芦刈り、米太平山での登山、小杉の大杉の見学などを行うことができた。貯水池ではヤゴ、イモリ、カエル、エビなどのほかにも、ゲンゴロウの幼虫やガムシ、ホトケドジョウなど貴重な生物も見ることができた。米湿原の芦刈りでは、貴重な植物を刈ったり、同じ場所を集中的に踏んで植物を傷付けたりしないよう気を付けるのに苦労した。また、長時間中腰で作業するため腰への負担が大きく、広大な湿原の環境を守ることがどれだけ大変なことか実感した。一方で、ボランティアの方々と共に作業するのはその苦労を上書きするほど楽しいもので、この楽しさがもっと広まれば、多くの人が手伝いに来て一人一人の負担も減るのではないかと考えた。他にも、米太平山では、貴重な動植物が見られただけでなく、鳥が種を運んで芽生えたアスパラガスや、狸のフンなど、自然に住む生き物の営みを間近に感じられたり、山頂から辺り一帯を一望したりすることができた。

私は、今後の自分の課題は、この体験を周囲の人に伝えていくことだと考える。今回の活動で、私は鮭川村の魅力が沢山知った。私がこの活動の話をし、魅力を伝え

ることで皆が鮭川村の保全活動に興味を持ち今後の保全活動に参加してくれれば、鮭川村の力になれるはずだし、実際そのようにして他地域の環境保全活動を支援している人を大学で見かけた。これは実際に鮭川村に行った私にしかできないことだと思う。自分を起点として、授業関係なしに鮭川村の環境保全活動に参加する人を増やしていきたい。

### 農学部 Hさん

私は鮭川村のフィールドワークに参加した。活動内容として、一回目は新型コロナウイルスの影響で中止となり、現地に行くことができなかったため、水生生物が生息できる湿原にするにはどうすればいいかという疑問に対し、班員で協力し図書館で調査した。二回目は現地に赴き、水生生物取りや米湿原の環境保全として葦刈りをした。

鮭川村にはホトケドジョウという絶滅危惧種が生息していた。また、1回目のフィールドワークであまり生息しないとされていたゲンゴロウの幼虫などが生息していた。希少植物であるトキソウをはじめミズドリ、キンコウカ、ノハナショウブなどの様々な植物が生息していた。四季折々の植物が咲くということでもとても自然豊かな場所であった。これらを守るために環境保全活動である葦刈りをした。葦刈りをする事自体は楽しかったが、若者である私にとってもきついものであり、腰を痛めてしまった。雨に打たれたり、太陽に照らされたりする状態で屈んだ姿勢を維持しながら葦を刈るのは相当の体力が必要となる。炎天下においてこの作業を行うと熱中症で倒れる可能性も十分にある。また、葦はノハナショウブと似ているため見分けるのも一苦勞であった。もちろん他の植物にも注意を払わなければ葦と一緒に刈ってしまうので目にも疲労が溜まった。これを高齢の方が率先して行っているという事実に驚いた。二十人程度のボランティアの方々と共に米湿原の葦刈りをしたが、それでも全ての葦を刈れなかった。これらの活動は毎年二回行われているが、私はそのことを知らなかった。これらのことから私は以下の課題を発見した。

今現在、地球では気候変動、森林破壊が起こっている。また、これらのことが起こることによって動植物の減少も起こっている。これらを少しでも和らげるために環境保全をすることはとても重要だ。しかし、実際に保全活動をしてみて、特に若者の興味が環境保全に向いていないこと、情報（開催場所や、内容について）が手に入りにくいことが課題だと感じた。

このことを解決するために、若者の文化であるSNSなどに環境保全ボランティアのポスターやチラシを載せたり、参加賞として地元の特産品を提供し、地元のPRに繋げたりする方法も考えられることを提示したい。若者は体力があるので戦力としては十分であり、多くの若者が集まればその分一人の作業量が減少するため一人

一人の負担を軽減させることができる。また、「友達と気軽に参加してね」という文を掲載することで、参加しやすくなると考える。そして、SNSに掲載する際は、具体的に若者が魅力を感じやすい工夫をするとなおよい。長ったらしい文章は見ない。

最後にももちろんボランティアとして私が行った葦刈りなどの環境保全をすることも大事だが、自分自身がお金を減らすなどの工夫をして身の回りから行動することも環境保全に繋がっていくので周りの人にも声をかけて参加を促したい。



### 農学部 Tさん

近年、自然保護の推進が声高に喧伝されています。私たちの年代は、その声に呼応するように、自然は守る方が良いという風に教育されてきました。実際、多くの情報を精査してみても、保護はしていくべきだと思います。では、何故、自然保護はこんなにもなおざりにされているのか、このことが、このフィールドワークを通して実感し、課題の発見に繋がりました。

まず、活動内容を軽く説明します。一回目は新型コロナウイルスの影響で、現地に行くことができませんでした。そのため、鮭川村が抱える問題の一つ、水棲昆虫の種類の減少を食い止める方法を、図書館などで資料を探し、自分たちなりに考察しました。二回目は現地で水棲昆虫の調査をし、湿地での植生や生態系を学びました。加えて芦刈りをし、環境保全活動の一部を体験しました。

二回の体験を通して見つけた私の課題、「自然保護の推進が後手にまわってしまうのは何故か」ということについて、掘り下げていきたいと思います。

一番の要因は、費用対効果に乏しいという事だと考えられます。私たちの班は芦刈りを体験してきました。貴重な花（ノハナショウブなど）を守るために、生育の障害となる草を刈り取る作業でした。達成感は有りました。ですが、疲労も大きく、利潤の生まれにくいこの活動。資本主義社会において人気が無いのは、仕方ないのかな。と思いました。

二番目の要因は大きな問題になりにくく、問題を問題として認識できないという事です。自然を守ることで得られる恩恵や、失うことで受ける打撃が少ないように思います。打撃が積み重なると、致命的になります。一つ一つの事象の与える影響が微小なものです。例えば、湿地を守ることで得られる恩恵というのは、水の浄化、生物多様性への貢献、災害時の緩衝帯となる、といった具合です。果たして、多様性の損失が起きたとて人々が早急に対応しなければならないのでしょうか。災害時に緩衝帯となる湿地を失ったとて、災害の原因を湿地にだけ求められるのでしょうか。多くの人がNoと答えると思います。現代社会では、人々が自然から引きはがされ、都市に住む人々が多いです。そのため、自然を守るということが生きる上で、大きな意味を持たない人の割合が大きいのだと考えられます。また、自然を保護することで恩恵を受けられる世代というのが、未来の世代だというのも致命的です。私たちがどんな生活を送ろうが、私が生きている間に困ることは無いでしょう。尻拭いをするのは後から生まれた人たちです。極論であります。こういった思想の積み重ねが後に尾を引く結末をもたらしていると考えられます。

以上から、人々がより環境保全に取り組むために、何かしらの利潤を生み出す構造を作るべきだと、私は思います。鮭川村での現状はそれとは程遠く、一部のマニアにしか響かないようなものでした。利潤が発生すると分かれば一般の企業がより参入し、より大きな力を行使できます。また、問題解決意識を高めるのにも一役買ってくれると思います。この点に焦点を当てて、活動報告会に向けて準備をしていきたいと考えています。

#### 参考文献

「湿地：なぜ大切にしなければならぬのか？」  
[https://www.env.go.jp/nature/ramsar/conv/leaflet2016/wwd2015\\_fact\\_sheet1.pdf](https://www.env.go.jp/nature/ramsar/conv/leaflet2016/wwd2015_fact_sheet1.pdf)  
 2021/6/23参照

#### 農学部 Yさん

私は鮭川村での活動を通して保全活動が希少な生物の生存の大きな助けになっていること、またその活動には地元の方々の協力が必要不可欠であることを学んだ。

鮭川村での活動には二回目のみ参加することになり、一回目は水生昆虫についての調べ学習を行うことになり、予定されていたギフチョウの生息環境調査は行うことができなかった。二回目は実際に現地へ行き、網などを使って水路や池での水生生物の調査と湿原の整備を行った。

一回目の活動では実際に行くことはできなかったが、班員全員が鮭川村の水生昆虫の問題について考え意見交換を行うことで自分たちが二回目のフィールドラウンジで何をを知りたいのか、確かめたいのかをはっきり

させることができ、二回目の活動につながる調べ学習ができた。またギフチョウの成虫は、時期的に二回目の活動の時には観察できないということで生き物を調査することの難しさも学ぶことができた。

二回目の活動の水生生物の調査では水田の横の水路で簡単にイモリやヤゴ、さらには希少な生物であるホトケドジョウやモリアオガエルなどを採集することができた。これらの種はいずれも水田に散布される農薬や水路のコンクリート化などにより生息数を減らしている種であり地元の方々の環境保全への理解と協力によって生息地が守られていることを感じた。湿原の整備では希少な植物がその湿原で増えることができるように周りにある葦などを刈る活動をした。湿原はぬかるみ、作業は鎌を使って手作業で行い、希少な植物を間違えて刈り取らないように集中して行うため大変な重労働になった。しかし、説明や案内をいただいた地元の方は毎日見回りと作業を行っているようで、環境保全活動の大変さを改めて感じた。

これらの活動を通して環境保全の活動には地元の方をはじめとするたくさんの労力、資金が必要であることがわかった。そして今後もこの活動を続けて行くための労力と資金を得るために、活動を体験してもらうツアーの実施を考えた。用具などを貸し出し参加者が気軽に参加することができれば村の方々の負担も減り、参加者には鮭川村の自然に関心を持ってもらうこともできるのではないだろうか。

最後に観光客のモラルについても触れていきたい。活動の途中でのお話の中で、湿原に生息している希少な植物を盗掘する人がいるということを聞いた。湿原は地元の方の毎日の大変な作業で守られている。希少な生物は周りの整った環境だけでなくそれを維持する人たちがいて初めて行くことができるということをしっかりと理解し今後もその生き物たちの生存のために一人一人が環境と活動を行っている方々に配慮して行動しなければならぬと感じた。

## 里山保全と角川のパワースポット巡り

### 活 動 状 況

○実施市町村：戸沢村

○講 師：NPO法人田舎体験塾つのかわの里事務局員及び地元インストラクター

○訪 問 日：令和3年5月22日(土)～23日(日)、6月12日(土)～13日(日)

○受 講 者：地域教育文化学部1名、理学部4名、医学部3名、工学部5名、農学部1名  
以上14名

○スケジュール：

1 回 目	2 回 目
<p>【1日目】5月22日(土)</p> <p>8:20 山形駅集合            8:42 山形駅発            9:52 新庄駅着            10:00 新庄駅発            10:30 農村環境改善センター着            オリエンテーション            10:50 蕎麦打ち体験            昼食            13:20 山菜採り            16:00 振り返り            17:00 宿泊先へ移動</p>	<p>【1日目】6月12日(土)</p> <p>8:20 山形駅集合            8:42 山形駅発            9:52 新庄駅着            10:00 新庄駅発            10:30 農村環境改善センター着            オリエンテーション            10:45 杉の間伐            12:30 昼食            13:30 木エクラフト            16:00 振り返り            17:00 宿泊先へ移動</p>
<p>【2日目】5月23日(日)</p> <p>9:00 農村改善センター集合            オリエンテーション            9:10 山菜料理            昼食            13:00 キノコの菌植え            14:50 振り返り            15:30 農村環境改善センター出発            16:00 新庄駅到着            16:12 新庄駅発            17:23 山形駅到着</p>	<p>【2日目】6月13日(日)</p> <p>8:00 農村環境改善センター集合            8:10 農村環境改善センター出発            8:35 御池へ            9:55 浄の滝へ(杉の台登り口)            11:30 浄の滝到着            昼食            12:30 浄の滝出発            14:10 杉の台登り口            14:30 改善センター到着            振り返り            15:30 農村環境改善センター出発            16:00 新庄駅到着            16:12 新庄駅発            17:23 山形駅到着</p>



## 授業記録

### ○活動レポート「私はもがみで考えた！」

#### 地域教育文化学部 Mさん

##### 1. はじめに

私がこのフィールドラーニングに参加しようと思ったきっかけは、自然いっぱいな戸沢村で地元の方々と交流しながら普段経験することができない貴重な体験をすることができると思ったからだ。また、埼玉県出身ということで山形県について多くのことを知らないののでこの活動を通して山形のことを深く知れるのではないかと思い参加した。

##### 2. 戸沢村訪問1回目

1回目の訪問では「そば打ち体験、山菜採り、山菜料理作り、キノコの菌植え体験」を経験させていただいた。そば打ち体験では、普段何気なくお店で食べているそばを自ら手作りすることで、そばを打つことの難しさや大変さが分かった。山菜採りや山菜料理作りでは、自然に囲まれた戸沢村ならではの自然の恵みをいただいたような気がした。はじめは山菜と野草の区別もつかなかったが地元の方々に丁寧に教えていただくことで見分けることができた。山菜は下処理など時間と手間がかかり食べられる状態にするまではとても大変だが、どの山菜料理もおいしくいただくことができた。和の味付けが多かったが、山菜は思っていたよりも味にくせがなかったので、トマトやガーリックで炒めるなどイタリアン風の味付けにもあいそうだったと思った。

##### 3. 戸沢村訪問2回目

2回目の訪問では「杉の間伐、木工クラフト作り、浄の滝へのトレッキング」を経験した。杉の間伐体験を通して、間伐の地域における役割を知ることができた。間伐することは地域の防災につながることにとても驚いた。地元の方々の命を守るためにも間伐をすることは必要不可欠なことだと思ったので定期的な手入れをするため、人材を確保する必要があると考える。そのためには、村のPRなども必須となるので、ポスターを山形駅や大学に貼ったり、WEBを活用したりする必要があると思う。また、浄の滝への道のりは長く大変だったがきれいな滝をみたとき、疲れが飛んでいった。パワースポットといわれるわけが分かった気がした。

##### 4. 課題と解決策

どの体験場所も自然がいっぱいで素敵であったが足下が悪く、小さなお子さんやお年寄りの方が気軽に体験することは難しいのではないかと思った。滝に行く際の道では足下が悪いところにはロープが張られていたが、とてもたるんでいてつかんだほうが危ない状況であ

った。観光業を盛り上げるためには道の整備が必須となってくると考える。自然の地形を生かしつつ、石や材木、砂利などを使い、歩きやすい道作りが大切だと感じた。また、泥っぽい道も多かったので水はけを意識した設計が重要となってくると考える。

##### 5. まとめ

このフィールドラーニングを通して、戸沢村の魅力や課題を発見することができた。実際に地元の方々と交流することでインターネットだけでは分からない戸沢村の魅力や様々な知識を得ることができた。この経験を通して戸沢村について深く知ることができたので、たくさんの人に戸沢村の魅力を伝えたい。また、提示した課題を解決する機会があれば、ボランティアとして参加したいと思う。

#### 理学部 Kさん

##### 1. はじめに

私は、そば打ち体験やパワースポット巡りなど自分が今まで経験したことのないことを体験できるところに魅力を感じ、このフィールドラーニングに参加した。今まで1度も行ったことのないところで、ほとんどの人とは初対面ということではじめはかなり不安だったが、班員とも親睦を深められたし、戸沢村で貴重な体験もさせていただき、とても有意義な時間となった。

##### 2. 活動1回目（5月22日、23日）

1回目の活動では、そば打ち体験、山菜採り・料理、キノコの菌植えを行った。そば打ち体験では、たくさんの工程があり、どれも難しいものばかりだった。特に水の量を1滴単位で調整するのはとても苦労したが、初体験の割にはおいしいそばができたと感じた。山菜採り・料理では、山菜ごとに様々な処理方法があり、とても時間がかかったが、どの料理も美味しくできた。キノコの菌植えでは滑りやすい急斜面で重い原木を使って作業したので、安全面に細心の注意を払う必要があり、周りの土地の整備が必要だと感じた。

##### 3. 活動2回目（6月12日、13日）

2回目の活動では、杉の間伐・木工クラフト・浄の滝へのトレッキングを行った。杉の間伐はなかなかの重労働で、日常にあふれている木材もたくさんの人の力で利用できているのだと感じた。林業の担い手が減ってきているのはとても大きな問題だと感じた。木工クラフトは作業こそ細かく大変だったが、木材を利用した工作はとても楽しいものであった。木工クラフト以外にも間伐材の有意義な活用方法はないのか模索していきたいと感じた。浄の滝へのトレッキングでは片道で徒歩約2時間かけ移動したが、その疲れも吹き飛ばすほどの素晴らしい絶景だった。途中、とても危険な場所があったのでこの整備が必要だと感じた。

#### 4. 課題と解決策

今回の活動を通して、山菜に関する知識や、浄の滝などの観光スポットにまつわる逸話などを伝えることができるものが必要だと感じた。我々は、地域の住民に聞くことでしかそのような知識を得ることができず、あらかじめそれを知ることができれば、もっと楽しめるのではないかと感じた。

解決策として、ホームページの充実はもちろん、現地にもそのようなことを伝えられるものがあればもっといいのではと感じた。そこで、戸沢村でとれた間伐材を利用して、山菜の見分け方や料理法、観光スポットにまつわる逸話などを記した看板をつくれれば観光客をより楽しませることができるのではないかと感じた。

#### 5. 終わりに

今回のフィールドラーニングを通して、今まで経験したことのないことを体験できたり、実際に行ってみたところの課題、解決策を自分で考えてみたりして、自身の成長を実感できた。今後にもこのフィールドラーニングで得たことを生かして行きたいと感じた。

### 理学部 Mさん

#### 1. はじめに

私がフィールドラーニングに参加した理由は、山の自然を体験したいと思ったからです。自分は、海沿いの町で育ったので、海の自然にはたくさん触れてきました。しかし、山の自然は体験したことがありませんでした。これまで経験してないことを、たくさん体験したいと思いました。

#### 2. 1回目

1回目のプログラムでは、「蕎麦打ち体験、山菜採り、山菜料理、キノコの菌植え」を体験しました。どれも初めての経験で、大変面白かったです。特に、山菜採りと山菜料理が印象に残っています。初めて山菜を自分の手でとって、それを自分で食べる経験ができました。始めは山菜を見分けるのに苦労しました。また、宿泊先での料理も山菜が中心で、地元の方々の食文化を教えてくださいました。それを自分の手で体験できてよかったです。

#### 3. 2回目

2回目のプログラムでは、「杉の間伐、木工クラフト、浄の滝トレッキング」を体験しました。杉の間伐では、森林管理がなぜ必要なのか、間伐をする理由について教えていただきました。また、間伐を行うにはただ木を切ればいい訳ではなく、木を切った後に運びだすルートを決めたり、切った木の利用方法を決めたりと、間伐を行うのが簡単ではないことを初めて知りました。浄の滝は、迫力満点で長時間歩いた疲れが一気に吹き飛びました。

#### 4. 課題と解決策

戸沢村の情報が手に入りにくいということです。講師や宿泊先の方々から戸沢村の成り立ち、課題、今回訪問しなかった観光地など、たくさんのお話を伺うことができました。参加しないと聞けないお話を聞いて、参加してよかったと感じました。しかし逆に言えば、今回のプログラムではなく、個人で観光として訪れる人は、なかなか地元の方しか知らない情報を入手しづらいと感じました。観光地の案内だけでなく、村の成り立ち、伝説など地元の方しか知らないことを知れば、もっと戸沢村に魅力を感じる人が増えると思いました。その解決策として、地元の方の話をまとめた記事を作り、それにアクセスできるQRコードを観光案内板に設置して、個人の観光客でも情報が入手できる環境を作るのが良いと考えました。

#### 5. まとめ

今回このプログラムに参加して、普段の授業ではできないことをたくさん体験できてとても良かったです。はじめて山の自然に触れて、森の壮かさ優雅さを存分に感じました。自然あふれる戸沢村にまた行きたいと思いました。釣りができる場所もあるので、夏休みに釣りに行きたいと思います。



### 理学部 Sさん

私は、5月22, 23日と6月12, 13日に戸沢村に体験学習に行きました。戸沢村は自然が豊かで、海育ちの私は新鮮な体験の連続でした。特に印象に残っているのが、1回目のフィールドラーニングの二日目の朝、宿泊先の方に戸沢村の観光スポットである、幻想の森に連れて行っていただいたことです。幻想の森は、屋久島の縄文杉のような呼ばれる曲がりながらも上に向かって伸びている杉の巨木がたくさん生えているところです。この杉は山ノ内杉と呼ばれ最上峡一帯に見られていて、幻想の森

の杉の中には樹齢1000年を越すものもあるそうです。

私は幻想の森に行ってみて、戸沢村の森林に興味を持ち、二回目のフィールドラーニングのプログラムに間伐作業があったため、戸沢村の間伐について調べことにしました。間伐作業の際に、間伐作業を行わないと森の土壌に光が届かなくなり、植物が育たず土砂災害に弱くなってしまふこと、栄養が枯渇し森の木がうまく育たないことを教えていただきました。しかし、戸沢村では間伐を行う方が減っており、その理由は輸入木材の安さに負けてしまい、国産材の需要が減っていること。また、林業従事者の方の年齢が高くなってきており、山の中に入り間伐した木を運ぶのが難しくなっている現状があるようです。

私はこの話を聞いて、これらの問題が戸沢村の課題なのではないかと思い調べることにしました。まず、山形県の調査データによると平成29年度の山形県の林業従事者の高齢化率（65歳以上の割合）は20.7%と全産業平均より高くなっていることがわかりました。また、木材の価格について調べると、林野庁によると無加工の場合は実は国産材のほうが安いということがわかりました。しかし、実際に建材として利用すると、そのために加工が必要で、その場合輸入木材よりもコストがかかってしまうため、売れにくい現状があるようです。

しかし、現在はコロナ禍により、輸入木材の供給が足りず価格が上昇しており、国産木材が見直され始めています。コロナウイルスは悪いことばかりおこると考えていたので驚きました。今は一時的な需要に過ぎないかもしれませんが、国産の木材の需要が高まり、戸沢村の林業にも追い風になってくれれば、戸沢村の林業再生につながると思います。

### 理学部 Sさん

まず戸沢村での体験について記述する。第1回の体験では、そば打ち、山菜取りと山菜料理、キノコの菌植え付け体験をした。そば打ちは初めての体験で、特に水加減と力加減が難しく、自分はそば生地にはびびりを入れた。しかしながら、香りの強いそばで美味しく頂けた。山菜取りでは、元々山形に住んでいたワラビやウドは知っているし見たこともあったが、実際に収穫することは今まで無かったことでありワラビやウドがどのように生育しているのかが知ることができた。また自分たちで収穫した山菜を使って料理をしたことは他のメンバーとコミュニケーションをとることができるいい機会であった。キノコの菌を原木に打ち込むという作業も初めての体験であり、原木でのキノコの栽培方法を知ることができて、今後機会があれば実際に原木キノコを栽培してみたいと思った。

第2回の体験では、間伐体験と木工クラフト、浄の滝トレッキングを行った。間伐体験では、切り倒された木をノコギリで切るだけであったが、間伐の現状や間伐の

意義など普段生活しては聞けないような貴重なお話をいただいた。木工クラフトでは、そもそも作業をするのが小学生以来の体験であり懐かしさを感じた。また、間伐材を利用したクラフトだったので、他に間伐材の有効活用は何かないだろうかと考えた。浄の滝トレッキングでは、途中まで整備された道を進み、そこからは急な崖がすぐ隣にあるような道や川の中を進んで浄の滝にたどり着いた。目の前で浄の滝を見て、迫力のある滝の流れと、2つの山のが織りなす荘厳さを実感した。また番外的ではあるが、第1回、2回の時に泊めてくださった方に、幻想の森や白糸の滝に連れて行っていただいたがその景色も素晴らしいものだった。

戸沢村の観光の目玉は最上川舟下りであろうが、角川地区にも先に書いたように、御池や浄の滝などの素晴らしい観光スポットがあり、これも観光の目玉になるだろう。しかしながら、観光スポットの案内や紹介はあるものの、交通網の整備が遅れており、自家用車でしかなかなか行けないため、遠い地域からの観光客の足が遠のいてしまう。観光客にアピールするだけでなく、舟下りに来た人向けに角川地区にも訪れるなどのほかの観光スポットとセットにしたツアーを企画したり、インフルエンサーからの紹介などもっと積極的な情報発信も有効だと考える。現状を打破するにはよりアクティブな行動が必要になるだろう。

最後に、コロナウイルスがいまだに猛威を振るう中我々を受け入れ、素晴らしい体験をさせてくださった戸沢村の皆さんに感謝申し上げます。

### 医学部 Kさん

#### 1. はじめに

私は埼玉県出身で、日常的に自然を感じることは少なかった。しかし、毎年家族でキャンプやスキーに行っていたこともあり、自然を楽しむことも好きだった。フィールドラーニングを通して、非日常ではなく日常的に自然と共に生活することの魅力や問題点を自分自身で体験したいと思い、このプログラムを選択した。

#### 2. 1回目

1回目のフィールドラーニングでは、そば打ち体験、山菜採り、山菜料理作り、キノコの菌植えを体験した。どれも初めての体験だった。特に印象的だったのが山菜採りと山菜料理作りである。私は今まで野菜はすべて畑で人の手によって育てられたものだと思っていた。しかし、山菜採り体験を通して、山菜は山の中で豊かな自然によって育てられたものなのだと強く実感した。山菜料理作りでは、自分が想像していたものの倍以上の多彩なメニューを教えていただいた。

#### 3. 2回目

2回目のフィールドラーニングでは、杉の間伐、木工クラフト、浄の滝へのトレッキングを行った。杉の間伐では、目の前で杉が切られて倒れる様子はとても迫力が

あった。木工クラフトでは間伐の際に生じた枝等を用いてフクロウの可愛らしい置物を作った。浄の滝へのトレッキングでは片道約2時間かけてロープを持って歩いたり、橋を架けて川を渡ったりして滝を目指した。

#### 4. 課題と対策

1つ目の課題は山菜料理である。私は山とはあまり縁のない地域に住んでいたこともあり、山菜料理もほとんど口にはななかった。1回目のフィールドワークで沢山の山菜料理を作って食べたが、山菜特有の風味を強く感じるものもあった。そこで、山菜を食べたことのない人の視点から、クセが少なく食べやすい山菜料理を考えたい。今回作った山菜料理の中で最も食べやすかったものは肉炒めだと感じた。山菜以外に身近な食材が含まれていることが食べやすさのカギであると考えられる。そこで私は、山菜を使った餃子はどうかと考え、実際に作ってみた。ふきを粗みじん切りにしてひき肉と混ぜて作った餃子は、ふきの食感と香りを残しつつひき肉や餃子の皮に包まれとても食べやすかった。

2つ目の課題は旅行先として戸沢村を選択することの難しさだと考えた。私たちは今回再学のプログラムで戸沢村を訪れ、農家民宿に泊めていただいたが、学校の案内が無かったら戸沢村で1泊2日するという選択は難しかったと思っている。今でこそ戸沢村の魅力は沢山知っているが、戸沢村を知らない方々にどのようにしてこの魅力を伝えていくかが問題である。最近はSNSでの発信が主流だが、似たような情報が非常に多いSNSで投稿することが最適だともいえない。そこで、原点に帰ってバスや電車の中刷り広告で戸沢村のアピールをするのはどうだろうか。埼玉にいた頃は毎日電車を利用しており、無意識のうちに中刷り広告の内容を覚えてしまうことが多々あった。首都圏から人を呼び込むのであれば、公共交通機関を利用するのは効果的かもしれない。

#### 5. おわりに

今回のフィールドワークを通して、戸沢村の自然や食べ物を満喫することができた。戸沢村を訪れて味わった感動をより多くの人に味わってもらいたいと強く感じたので、そのために私たち大学生には何ができるのか更に考えを深めていきたい。

### 医学部 Aさん

#### 1. はじめに

私はこの授業の概要を見たときに普段の対面授業とは違い自然の中で活動することで学びを得られる点に魅力を感じ選択させていただきました。活動を通してきっと人生では二度と経験できないような仲間との活動や地域の方々との温かさを体験し本当に選んでよかったと思う活動ができたし、戸沢村の人々と出会えてよかったと思いました。

#### 2. 1回目

1日目は班のみんなと2回目の顔合わせを駅でしてそばうち体験から始まりました。実際に粉から自ら作るという貴重な体験で地域のプロの方に教わりながら作りました。お手本を見せてもらったときは単にこねているだけのようですごく簡単そうに見えたのですがまったくそんなことはなく力の入れ方や水の微妙な調節などたくさんの方で工夫と丁寧さと技術が求められるもので専門職のすごさを改めて知ったし地域の中でこのような技術が受け継がれていることが他の分野にも反映されるといいなと思いました。その後山菜採りに出かけました。最初はすべてが同じ草に見えて何を食べるのだろうと思いましたがしっかり見分ける基準がありヨモギやワラビなどを収穫できました。キノコの菌植えも新鮮な体験でした。

#### 3. 2回目

2回目は杉の間伐と木工クラフトトレッキングなど行いました。杉の間伐では地域の課題を自分の目で身をもって体験できたなと思いました。トレッキングではかかる時間を事前にお聞きしていたので前日から不安だったのですが終わった後の滝の感動は頑張ることの大切さを身をもって体験させてくれたと思います。木工クラフトでは間伐材を使用したものだったのでこのような商品がさらに大規模化して広まれば間伐材の処理における課題が少し改善されるのではないかなと思いました。

#### 4. 課題と対策

私は特にキノコの菌植えと山菜採りそして杉の間伐の体験で課題を実感しました。まずキノコの菌植えでは作業スペースが狭く斜面での作業であるため危険だと思いました。菌を植えるためには重い丸太を少しずつ転がさなければいけないのですがお年寄りの方が足場の悪いあのスペースで作業するのは改善すべきだし使用する器具の移動も結構大変で少子化問題の改善が必要だと思いました。山菜採りではワラビの収穫においてすでに成長しすぎて食べられないワラビが結構あったのでこれは人手不足で収穫が間に合わずせっかくの地元の食材が無駄になってしまっているのもっと里山の手入れに人材が必要だと思いました。最後に杉の間伐ですがここでは実際に切ってもらった木が倒れないというハプニングが起きました。これにおいては周辺の木が高すぎて倒れないようにこの点も里山の手入れが十分に行われていない部分に関係していると思うのもっとその仕事があることを広める部分の努力が必要だと思いました。今、求人サイトなども発達しているので積極的に多面的な解決へのアプローチが必要だと感じました。

#### 5. おわりに

今回コロナ化の中危険も考慮したうえで私たち山大生を受け入れてくださった戸沢村の皆様本当にありがとうございました。今回一緒に活動させていただいて批

判的に物事を捉え改善策を自然に考える力が以前よりもついたと思います。それは地域の方が活動のたびによい点も悪い点もすべて説明しながら教えていただいたおかげです。本当にありがとうございました。

## 医学部 Yさん

### 1. はじめに

私は山形県出身で、これまで戸沢と聞くと「白糸の滝」や「舟下り」などを考えていた。しかし、それ以外に何が有名で、どのような体験ができるのか、自分もよく知らないことがあった。そこで、この活動を通して戸沢村の観光だけではなく、その自然や生活なども体験して、県内の人にも戸沢村のことを知ってもらいたいと思い参加した。

### 2. 第1日程

1回目の訪問では蕎麦打ちや山菜採り、キノコの菌植えなどを行ったが、どの活動も初めてのものととても貴重な経験となった。特に山菜料理は食べたことがほとんどなく、新鮮な味わいだった。しかし、独特の苦味や食感があるため、多くの人にとっては馴染みのないものになっているのではないかと感じた。

### 3. 第2日程

2回目の訪問では杉の間伐や浄の滝へのトレッキングなどを行った。間伐という作業にも多くの意義や手順があり、その1つ1つが里山の保全に繋がるということがよく分かった。また、トレッキングでは浄の滝はもちろん、道中でも普段は味わえない多くの自然に触れることができ、改めて自然の雄大さを知ることができた。この活動の中で気になったのは間伐における人手不足の問題である。間伐自体はチェーンソーを用いれば比較的簡単に行えていたが、その倒した木材を運び出すには多くの人手が必要になるため、今後木々の管理が上手く行えなくなるのではないかと感じた。

### 4. 解決策

山菜料理については調べてみると多くのアレンジ料理が存在することが分かった。その中でも最近食べられる機会の多いファストフードと組み合わせることで、より親しみやすい料理になるのではないかと考えた。また、そのような店を国道沿いに多く出店することで、日高村のような地元の特産品を利用した村おこしが行えると考える。人手不足については村のPRを通して、より多くの人に戸沢に来てもらう必要があると感じた。その方法の1つとして民宿の紹介が良いのではないかと考える。具体的には農家民宿の1日を映像としてHPなどに掲載することで、戸沢村に来ればこんな体験ができるというイメージがしやすくなると思う。

### 5. まとめ

今回の活動では多くの自然に触れながら、里山でどのようなことが行われているのかを身をもって学ぶことができた。この経験を活かして、多くの人に戸沢村の魅力伝えていきたい。また、自分の提案が少しでも戸沢村の役に立てればと思う。

### 6. 参考文献

『cookpad 山菜ピザのレシピ』

<https://cookpad.com/search/山菜ピザ> (2021/6/21閲覧)

『未来開墾ビジネスファーム これは意外！オムライスで大成功の村おこし』

<https://special.nikkeibp.co.jp/NB0/businessfarm/newsttopics/03/> (2021/6/21閲覧)

## 工学部 Iさん

### 1. 初めに

私が山形を学ぶ授業の中からフィールドラーニングを選んだのは話せる人を作るためだ。また、正直座学の授業にすると集中力が続かなくなりそうだと考えていた。私は小学生の頃全国の巨木を見て回る「巨木巡り」という自由研究をしていた。その頃から大きな木に興味があったのでネットで戸沢村の巨木の記事を見つけて応募してみたいと思った。

### 2. 第一回フィールドラーニング

フィールドラーニングは一泊二日で二回に分けて行われた。活動は基本的に戸沢村の農村環境改善センターに集まって行われた。一日目の最初の活動はそば打ち体験だった。私は小学生の頃に一度そば打ち体験をしたことがあったがその記憶も薄れていたため初めてやるような心持で臨んだ。職人の方ほどうまくはいかなかったがその時初めて会話をした同じ学部学科の人と協力して作業できた。この人とは活動が終わってからよく会話するようになった。また、山菜取りでは車の移動がかなり怖かったが、案内の人について行って食べられる野草について教えてもらった。この時、生でウドの茎を食べたがかなり苦かった。集合場所に帰り、取ってきた山菜の下処理をしてこの日の活動は終了した。民宿に泊まることになり、この時前述の人以外と会話する機会があった。民宿で出された夕食の中に昼間生で食べて苦かったウドが入っていて敬遠していたが、食べてみるとむしろ甘いくらいで下処理が完璧にできていることに驚いた。

二日目、前日に下処理していた山菜を使って昼食を作ったが多すぎて残すことになってしまった。この時にもまた別の人と話す機会があった。最後のキノコの菌植えについては菌植えというよりは自然の胞子を利用した方式だった。伐採した木の幹に穴をあけてそこに別の種類

の木のビスを打ち込むことによってその部分に自然の胞子が付着してキノコが育つという仕組みらしい。どのような様子で生えてくるのか完成したのを見てみたかった。

### 3. 第二回フィールドラーニング

二回目一日目の最初の活動は杉の間伐だった。地元の方が最初に木を切り倒す作業をした時、うまく倒れずに引っかかったままになりかなり危なかった。もっと間伐の頻度を増やした方が安全なのではないかと思った。この時も車の移動が怖かった。午後の木工クラフトではフクロウが止まり木に止まっている形の置物を作った。危険な工程があったので集中がいった。一人二つ作るということだったのでそれぞれ表情の違うフクロウを作ってみた。

二日目にはこれまでで最も体力的に厳しい体験があった。それは御池から浄の滝までの徒歩での移動である。この道中で色々な動植物について自分で気付いたり地元の方に聞いたりした。特に野草についてかなり詳しくなった。きつかったが何とか浄の滝までたどり着くことができた。行きの道中で思ったのは危なすぎるということだった。かなりの悪路であり、中には落ちたら無事では済まなそうなところが何か所も平気であった。案内の方まで落ちかけた場面があって、皆もかなり怖々と歩いていったようだった。滝の近くは夏でもまだ雪が残っていて涼しかった。地形の成り立ちまで教わることができた。帰りもかなり怖かったが全員御池まで戻ることができた。

### 4. 改善点

他所から来た人には環境的に少し危ないと思った。間伐、菌植えの場所へと通じる車道と浄の滝へ通じる山道は整備しなければ事故につながりそうだと思う。

### 5. 最後に

二日目の活動が終わってからもやり取りをする人が残ったのでそこに関して言えば目標は達せられた。また、体験の中で木のことについて聞くことはできたが巨木らしい巨木を見ることはできなかった。話しやすい人をつくることができたのでフィールドラーニングについてはうまくいったと思っている。巨木については後で訪れる機会があったら見に行きたいと思う。



### 工学部 Kさん

#### 1. はじめに

私がこのフィールドワークもがみに参加しようと思ったきっかけは、山菜採りや、浄の滝トレッキング、そば打ち体験など、普段の生活の中では経験できないような体験ができるということに、とても興味が沸いたからです。特に、山形の動植物に関心があって、出身地である沖縄県の自然との違いを山菜採りやトレッキングの中で感じてみたいと思いました。

#### 2. 活動1回目（5月22日、23日）

一回目の戸沢村訪問では、そば打ち、山菜採り、山菜料理作り、キノコの菌植えの体験をさせていただきました。私は特に「そば打ちの体験」、「山菜採り」が印象に残りました。そば打ち体験では、生まれて初めてそばを作る工程を教わって、思ったより力がある作業だなと感じました。また、自分たちで打ったそばと、職人さんの打ったそばを比べると、生地のなめらかさや生地の薄さ、そばの細さなどに大きな違いがあって、職人さんの技術は本当にすごいなと思ったし、かっこいいなと思いました。山菜採りでは、沖縄には生息していない植物や昆虫を見ることができて楽しかったです。また、村の方が山菜や樹木の説明をしてくれて、とても勉強になりました。

#### 3. 活動2回目（6月12日、6月13日）

二回目の戸沢村訪問では、杉の間伐、木工クラフト、浄の滝トレッキングの体験をさせていただきました。杉の間伐の体験では、杉の間伐がなぜ必要なのか、間伐をしないとどうなるのか、を学ぶことができました。また、杉の木の間伐にはとても労力がかかり大変だと思ったし、この労働力の問題をどう解決するのか考えていけないなと感じました。木工クラフトでは木材を加工して、フクロウの置物を作りました。工作は好きなので、とても楽しかったです。また、木を乾燥させるときにひびが入らないようにするにはどうすれ

ばいのか気になりました。トレッキングは大変だったけど、戸沢村に生息する動植物や地質について様々なことを学ぶことができ面白かったです。

#### 4. 課題と解決策

今回の活動を通じて、戸沢村についていくつかの課題を感じました。1つ目は、登山道の整備についてです。浄の滝トレッキングでは、滝まで歩いて数時間かかってしまい、登山道の途中には、登山になれていない方には少し危険な箇所もありました。このような登山道は登山が好きな人にとっては整備された道より良いかもしれませんが、多くの人に浄の滝を訪れてほしいのであれば、きちんと登山道の整備をして、気軽に滝を訪れる事ができるようにする事が必要不可欠であると思います。2つ目は、戸沢村の魅力がネット上では検索しづらいことです。戸沢村を訪れる前に事前学習として戸沢村について調べましたが、記事が少なく、あまり深く戸沢村のことについて調べることができませんでした。本当はとても魅力のある村なのに、ネット上にその魅力を発信しないとその魅力に気づいてもらえないのでとてももったいないと思います。なので、今後はWebサイトでの情報発信にとどまらず、TwitterやYoutubeなどでも情報発信していくことが大切だと思いました。

#### 5. まとめ

今回の体験を通じて、普段は体験できないようなことができ楽しかったです。また、山形県の魅力と課題について知ることができたので、山形県について考える良いきっかけとなりました。戸沢村はとても魅力のある村だと感じたし、自分は溪流釣りや、昆虫が好きなのでまた戸沢村を訪れたいと思います。

### 工学部 Mさん

#### 1. はじめに

私がこの授業を履修した理由は、自分の知らない山形県の魅力を見ることができたからだ。私は仙台市出身であるが、隣県である山形県について知っていることはサクランボの産地であることなどごく普通の情報だけであった。また、最上地方の自然はどのように美しいのか興味があった。そこで、この講義を通して山形県を少しでも深く知りたいたいと思い参加した。

#### 2. 1回目

フィールドラーニング1回目の主な活動は、蕎麦打ち体験・山菜採り・山菜料理づくり・キノコの菌植えであった。蕎麦打ち体験では、自分たちで蕎麦粉から蕎麦を作った。蕎麦はこねて、引き伸ばして、切る「だけ」だと思っていたが、すべての過程において熟練の技術が必要だということが分かった。特に、生地を1つにまとめる際に空気を抜きながらこねるという技術は相当困難であると感じた。山菜採り・山菜料理づくりでは、身近

な自然にも食材となるものがたくさんあるということに気付かされた。また、山菜独特の風味を消すために手間がかかることも分かった。キノコの菌植えでは、重たい原木を動かしてドリルで穴をあけ植菌するという一連の作業がとて大変だと感じた。

#### 3. 2回目

フィールドラーニング2回目の主な活動は、杉の間伐、木工クラフト、浄の滝へのトレッキングであった。杉の間伐では、森林の手入れがいかにより生物の多様性を保つために必要かを知ることができたが、思っていた以上に体力が必要であった。木工クラフトでは、木材を加工してフクロウの置物を作った。トレッキングでは、神々しいほどの浄の滝を肌で感じる事ができた。また、浄の滝以外にも道中で多くの自然に触れることができ、山形県の魅力の1つを発見できたと言えるだろう。

#### 4. 課題と対策

1つ目の課題は、山菜料理である。想像以上に食べやすい味であったが、山菜独特の風味が苦手な人もいる。今回はてんぷらやお浸しにして食べたが、ペースト状に加工したり別ジャンルの料理と組み合わせたりするなどの新しい調理方法の開拓が必要であると思う。

2つ目の課題は体験場所の安全化である。足場が非常に悪く、観光客だけでなく現地の人にとっても危険な箇所がいくつかあった。対策としては、間伐によって切り出した木材等の自然の材料を使って環境整備を行うことが挙げられる。その際、集客につながるような景観に合ったデザインをすることが必須である。しかし、少々険しい道のりに挑戦することで大きな達成感を得られる場合もあるので、難易度別でコースを作成することで子供から大人まで楽しむことができるのではないだろうか。

#### 5. おわりに

今回のフィールドラーニングで、戸沢村の魅力・課題をたくさん発見することができた。このような全国に広めるべき山形の素晴らしい魅力を後世に残していくためにも自分たちに何ができるのか、さらに考えていきたい。

### 工学部 Sさん

#### 1. はじめに

私はこれまで大自然に触れてきたのは、主に学校の行事での遠足などになりますが、やはり日常生活環境では味わうことのできない大自然を味わうには大自然に足を運ぶことが手取り早いと思ったこと、そして山形県といえば雪国のイメージが強く、おそらく長い冬があげたこの時期は本来の地形や景色、食材までを自分の五感を駆使して体感できることと思ひ戸沢村のフィールドラーニングに参加しました。

#### 2. 戸沢村訪問1回目

戸沢村訪問1回目では蕎麦打ち体験、山菜採りなど、ただ大学に通っているだけでは体験できないようなことを体験することができました。そば打ち体験は昔やったことがありましたが、大学生になってこそ気付くことがたくさんありとても新鮮な体験でした。山菜採りは山形県の都市部に住んでいては絶対に体験できないようなことであり、戸沢村に行ったからこその特権だと思いますし、自分達で採った山菜をあく抜きした後の山菜料理は絶品でした。

### 3. 戸沢村訪問2回目

戸沢村訪問2回目では杉の間伐、木工クラフト、トレッキングを体験しました。地元の方から杉の間伐が衰退していると聞き、実際体験したところとても力のいる作業で、高齢化が進んでいる戸沢村では今後衰退していく可能性が高く、若者を林業に就かせる仕組みや機械化を図るなどの対策が重要だと思いました。トレッキングでは頂上の滝を目指し片道2時間ほど歩きました。山の入口のほうはしっかりと整備してあり安全でしたが、奥になるにつれて足場が悪くなり危ないところも少々あったので山奥の開拓も課題の一つだと感じました。

### 4. 課題と解決策

上記に述べたように杉の間伐の衰退と、トレッキングでの足場の整備のこの2点が課題だと感じました。杉の間伐の衰退の解決策としてはボランティアのような形で杉の間伐を体験するツアーみたいなものを募集し、山を守る、育てることの重要性を発信してみる、そしてトレッキングでの足場の整備は戸沢村単体で考えるのではなく杉の間伐のことを含め、他の県と連携しながら次の世代にこの大自然を残していく手段を協議するなど前向きな活動が必要で、これに似た例として過去に雪降ろしツアーのニュースを見た事があり、まさか雪降ろしが旅行として成り立つとは想像していなかったことですし、若者の興味を引くという点ではツイッターを情報の発信の起源とすれば費用をかけずして人を募集することも可能で、もしかしたら自分たちで仕切ってみるのも面白そうなことと思いました。

### 工学部 Wさん

フィールドワーク共生の森もがみ「里山保全とパワースポット巡り（戸沢村）」での全活動を通して、普段自分が大学のキャンパスに通うだけでは絶対に体験できないことを体験し、触れ、学ぶことができました。第一日程ではまだ班員ともなかなか打ち解けることが出来ていないまま、戸沢村に出発しました。初日午前中ではそば打ちを体験することができました。個人的には全日程の中で最も楽しく、有意義な活動だったと思います。早くこねすぎて失敗してしまいましたが、自分たちの作ったそばは格別においしかったです。午後は山菜採りに

出かけました。僕は地元でもよく親と山菜を採りに山へ入っていたので少しだけ自信がありましたが、地元の慣れ親しんだ山とは全く異なっており、歩くのも苦労しました。ヨモギを食べる文化は初めて知りました。地元に戻った時に親と山で探してみたいと思います。民宿では班員と講義内容以外の話でも盛り上がり、友情を深めることが出来ました。二日目は前日採ってきた山菜を使った料理を学ぶことが出来ました。地元を離れてから、山菜を食べる機会が全くなく、かつ自分の手で料理することが出来るということだったので、とてもわくわくしていました。多人数の食事を準備することは初めてでしたが、自分なりにうまく出来たと思います。特にウドを調理する時が大変でした。すぐに焦げてしまうので常に動かしつつ、あくががたくさん出るのもしっかりと火を通す必要がありました。午前中いっぱいで作ったお昼ご飯はとてもおいしかったです。

第二日程初日はとにかく重労働でした。スギの間伐は初めての経験で、どんな場所で行うのかもよく分かりませんでした。生い茂る林の中で目の前の木が倒れる様子はとても興奮しました。同時に、間伐の必要性も学ぶことができました。定期的に間伐を行う理由として、災害が起こった際に山が崩れにくくする役割があります。山形に限った話題ではありませんが、「里山保全」という言葉の意味が少しだけ分かりました。午後は木工クラフトで木のフクロウを作りました。枝を細かく削ったり、穴を開けたり、接着したりとすごく難しかったです。二日目は往復5時間で浄の滝を見に行きました。何十回上り下りをしたか分かりません。自然豊かな森の中を歩くのはとても気持ちよかったですがとても疲れました。浄の滝では滝壺まで進んでみました。まだ雪が残っており、涼しかったです。帰りも森を味わいながら歩くことが出来ました。

フィールドワーク全活動と事前調査の内容を考えてみると、戸沢村の外部へのPR方法を改善すべきだと思いました。戸沢村にはすでに素晴らしいものがたくさんありますが、アピールする点において弱いところがあるように感じました。具体的にはインターネット上ではサイトやSNSの発信方法。現地では道路上での誘導方法などを改善すべきだと思います。最後に今回私たちのフィールドワークに携わっていただいた全ての方に感謝したいと思います。貴重な体験をありがとうございました。

### 農学部 Wさん

#### 1. はじめに

私は山菜採りや杉の間伐など、実際に山の中に入って活動を行うことができる点に魅力を感じ、この戸沢村のフィールドワークに参加した。初めて知った村で、初めて会う人たちと一緒に活動ということで不安だったが、終わってみると本当に貴重な経験となり、戸沢村の魅力を十二分に感じる事ができた。



## 2. 活動一回目

一回目の活動は、蕎麦打ち体験・山菜採り・山菜料理・キノコの菌植えであった。蕎麦打ちは思っていた以上に複雑な工程があり、こねる際には力も必要とした。自分で苦労して作った蕎麦は、形が不揃いであったが美味しく感じた。山菜採りは食用にするのに適した大きさのものを選んだり、似ている山菜を見分けたりすることが予想以上に困難であった。食べる際にもそれぞれの山菜にあった下処理をする必要があり、手間がかかっていることを知ることが出来た。キノコの菌植えは足場の悪い急な斜面で重い原木を転がしながら作業するため、怪我をする危険性もあると感じた。

## 3. 活動二回目

二回目の活動は、杉の間伐・木工クラフト・浄の滝へ向けてのトレッキングであった。杉の間伐は、こまめに間伐をして森林環境を整える必要性を知ることが出来た。木々が密集していると、伐採した際に近くの木に引っかかってしまい倒れてこないというハプニングが発生し、尚更間伐が捗らなくなってしまう可能性があると感じた。浄の滝へのトレッキングは予想以上に過酷な道のりであったが、そんな中でもヒメサユリを始めとした多くの植物を知ることができ、滝自体も滝つぼ付近まで近づくことができ、その迫力に圧倒された。

## 4. 課題と解決策

今回の体験を通して感じた課題は、観光スポットまでの経路が分かりにくい点と、そのスポットにまつわる逸話などを知る機会が地元の人に聞くという方法以外に無い点である。私たちは体験の中でお話を伺い、それぞれの場所で興味深いお話を聞くことが出来たが、個人での観光の際にはその風景を見るだけで終わってしまう事になり、もったいないと感じた。

これらの課題を解決していくために、案内・説明看板の設置が有効的であると考えた。観光スポットの入口までの経路を明確にするために道路沿いに看板を設置し、トレッキングコースに入ってから分かれ道には方向を示すものを立てておく。そして観光スポットには逸話を記した看板を設置することで、見に来た人々をさらに楽しませることが出来るだろう。

## 5. おわりに

今回のフィールドワークで、地域の人と同じ目線に立ち、同じことを体験しないと分からない苦労や課題があるということを知ることができた。戸沢村はまた訪れたいと思うような温かみがあり、美しい自然に囲まれた素晴らしい村だった。今後は戸沢村の魅力を多くの人に発信して行きたいと思う。

# 山形大学エリアキャンパスもがみ運営会議委員名簿

令和4年3月31日現在

## 山形大学

エリアキャンパスもがみキャンパス長	清 塚 邦 彦	小白川キャンパス長
教育開発連携支援センター	栗 山 恭 直	教 授
人文社会科学部	松 本 邦 彦	教 授
地域教育文化学部(教育実践研究科)	江 間 史 明	教 授
理学部	栗 山 恭 直	教 授
医学部	後 藤 薫	教 授
工学部	木 俣 光 正	教 授
農学部	江 頭 宏 昌	教 授
エンロールメント・マネジメント部	伊 藤 真由美	教務課長
小白川キャンパス事務部	片 桐 茂 則	学務課長
小白川キャンパス事務部	高 橋 勝 俊	総務課長

## 最上地域

新庄市教育委員会	高 野 博	教育長
金山町教育委員会	須 藤 信 一	教育長
最上町教育委員会	中 嶋 晴 幸	教育長
舟形町教育委員会	伊 藤 幸 一	教育長
真室川町教育委員会	門 脇 昭	教育長
大蔵村教育委員会	有 馬 眞 裕	教育長
鮭川村教育委員会	矢 口 末 吉	教育長
戸沢村教育委員会	市 川 重 保	教育長
高等学校長会	高 橋 剛 文	代表(新庄北高等学校長)
最上地方町村会	大 友 弘 克	事務局長
NPO法人田舎体験塾つのかわの里	安 食 輝 敏	代表

## オブザーバー

山形県最上総合支庁総務課連携支援室長	小 泉 篤
同 総務課連携支援室主査	工 藤 真 紀

## エリアキャンパスもがみ事務局

(大学事務局)	
学士課程基盤教育機構	三 上 英 司
学士課程基盤教育機構	阿 部 宇 洋
(教育開発連携支援センター)	
小白川キャンパス事務部	池 野 尚 美
同	鈴 木 啓 伸
同	箭 柏 秀 司
同	柿 崎 利 津子
同	國 分 聡 子

## (最上事務局)

事務局長	岸 隆 一
事務局員	澤 野 ひろみ

**エリアキャンパスもがみ研究年報2020・2021**

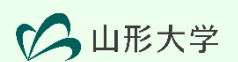
エリアキャンパスもがみ 令和2・3年度 事業報告書

令和4年(2022年)3月31日

編集：山形大学エリアキャンパスもがみ



エリアキャンパスもがみ



事務局 山形大学教育開発連携支援センター TEL 023-628-4720 FAX 023-628-4836  
〒990-8560 山形市小白川町 1-4-12 E-mail [acmogami@jm.kj.yamagata-u.ac.jp](mailto:acmogami@jm.kj.yamagata-u.ac.jp)